柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第74集

黒部古屋敷

―― 新潟県柏崎市 黒部古屋敷遺跡発掘調査報告書 ――

2014

柏崎市教育委員会

黒部古屋敷

── 新潟県柏崎市 黒部古屋敷遺跡発掘調査報告書 ──

2014

柏崎市教育委員会

序

柏崎市は42kmにも及ぶ海岸線を有し、美しい海辺は日本の渚100選にも選ばれています。また、この美しい日本海に沈む夕日は圧巻です。一般県道向山西山停車場線長嶺バイパス事業は、観光資源に恵まれた海岸部と北陸自動車西山インターチェンジのアクセスの改良を図るもので、観光交流人口の増大に寄与するものとして大きく期待されるものです。

当該事業の実施に伴いまして、柏崎市教育委員会では長嶺前田遺跡と黒部古屋敷遺跡の発掘調査を実施いたしました。本書で報告する黒部古屋敷遺跡は、別山川のほとりに位置する集落遺跡でありました。平安時代以降、幾度も集落が営まれたことがわかりました。最も新しい時期は、江戸時代の中頃にあたる18世紀前半頃であります。

『西山町誌』には黒部地区について、「もとは別山川の川岸にあったそうだ。今もそこを「ふるやしき」といっている。そこがもとの居住地だという」と記されています。今回の発掘調査の成果は、この記載を裏付ける証拠の一つとなるのではないでしょうか。地域の歴史や文化の解明と理解に、発掘調査が一つの役割を果たすことができたと感じられます。

最後になりましたが、このたびの発掘調査が無事終了できたことは、ひとえに地域の皆様と、事業主体者であります新潟県、また事業を担当されました柏崎地域振興局地域整備部のご理解とご協力の賜であります。また、御指導くださった新潟県教育委員会、発掘調査に参加された公益社団法人柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様や関係者各位に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

平成26年3月

柏崎市教育委員会
教育長　大　倉　政　洋

例　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市西山町黒部字古屋敷地内に所在する黒部古屋敷遺跡で行われた発掘調査の記録である。

2．本調査事業は、新潟県（担当：柏崎地域振興局地域整備部道路課）を事業主体とする一般県道向山西山停車場線長嶺バイパス社会資本整備総合交付事業（道路）に伴う事前調査であり、柏崎市教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施したものである。

3．発掘調査における現場業務は、平成24年8月6日に着手し、同年11月21日まで実施した。整理業務については、現場業務終了後から本格的に着手し、平成26年3月までに報告書を作成した。

4．現場業務は、柏崎市教育委員会教育総務課埋蔵文化財係の職員等を調査担当・調査員・調査補助員として実施した。整理・報告書作成作業は、調査担当を中心に同係のスタッフで行った。

5．出土した遺物には、遺跡名の略号として「クロ古」と註記し、遺構名･グリッド及び層序等を併記した。

6．本報告書の執筆及び編集は中島が行った。

7．本事業で出土した遺物並びに調査や整理業務の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（埋蔵文化財事務所）が保管・管理している。

8．本書掲載の図面類の方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

9．次の業務については、関連業者への委託により実施した。

基本測量・遺構測量　……　株式会社榮技術
空中写真撮影　……　株式会社オリス
図版作成　……　株式会社オリス

10．発掘調査の準備段階から本書作成に至るまで、事業主体者をはじめとする関係者等から様々な御協力と御理解を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

黒部・鬼王・長嶺町内会・新潟県教育委員会（順不同・敬称略）

目　次

Ⅰ　序　　説 …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　発掘調査業務の体制と概要 …… 2

Ⅱ　遺跡をとりまく環境 …… 4
1　黒部古屋敷遺跡の位置と地理的環境 …… 4
2　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　調　　査 …… 9
1　調査の目的と調査区の設定 …… 9
2　調査の方法 …… 9

Ⅳ　遺跡と遺構 …… 11
1　基本層序と遺構の概要 …… 11
2　遺構各説 …… 12

Ⅴ　遺　　物 …… 19
1　遺物の概要 …… 19
2　土器・陶磁器 …… 19
3　漆器 …… 22
4　木製品 …… 22
5　金属製品 …… 23
6　石製品 …… 23
7　製鉄関連遺物 …… 23

Ⅵ　総　　括 …… 24
1　古代 …… 24
2　中世～近世 …… 25
3　黒部古屋敷遺跡の変遷 …… 27

〈引用・参考文献〉
〈附　　表〉
〈報告書抄録〉 …… 巻末

図版目次

図版１　黒部古屋敷遺跡　遺構全体図
図版２　黒部古屋敷遺跡　遺構全体分割図１
図版３　黒部古屋敷遺跡　遺構全体分割図２
図版４　黒部古屋敷遺跡　遺構全体分割図３
図版５　黒部古屋敷遺跡　基本土層図
図版６　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図１
図版７　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図２
図版８　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図３
図版９　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図４
図版10　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図５
図版11　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図６
図版12　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図７
図版13　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図８
図版14　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図９
図版15　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図10
図版16　黒部古屋敷遺跡　遺構個別図11
図版17　黒部古屋敷遺跡　遺物実測図１
図版18　黒部古屋敷遺跡　遺物実測図２
図版19　黒部古屋敷遺跡　遺物実測図３
図版20　黒部古屋敷遺跡　遺物実測図４
図版21　黒部古屋敷遺跡　遺物実測図５
図版22　黒部古屋敷遺跡　遺物実測図６
図版23　黒部古屋敷遺跡　空中写真１
図版24　黒部古屋敷遺跡　空中写真２
図版25　黒部古屋敷遺跡　調査区完掘写真
図版26　黒部古屋敷遺跡　基本土層写真
図版27　黒部古屋敷遺跡　遺構写真１
図版28　黒部古屋敷遺跡　遺構写真２
図版29　黒部古屋敷遺跡　遺構写真３
図版30　黒部古屋敷遺跡　遺構写真４
図版31　黒部古屋敷遺跡　遺構写真５
図版32　黒部古屋敷遺跡　遺構写真６
図版33　黒部古屋敷遺跡　遺構写真７
図版34　黒部古屋敷遺跡　遺構写真８
図版35　黒部古屋敷遺跡　遺構写真９
図版36　黒部古屋敷遺跡　遺構写真10
図版37　黒部古屋敷遺跡　遺構写真11
図版38　黒部古屋敷遺跡　遺構遺物１
図版39　黒部古屋敷遺跡　遺構写真２
図版40　黒部古屋敷遺跡　遺構写真３
図版41　黒部古屋敷遺跡　遺構写真４
図版42　黒部古屋敷遺跡　遺構写真５

挿図目次

第１図　黒部古屋敷遺跡と事業範囲図
第２図　黒部古屋敷遺跡の位置と周辺の地形
第３図　黒部古屋敷遺跡と周辺の遺跡
第４図　グリッド設定図
第５図　掘立柱建物・柵模式図
第６図　黒部古屋敷遺跡・至徳寺遺跡・鉄砲町遺跡の古代土師器
第７図　明治24年調製土地更正図に合致する溝

別表目次

別表１　黒部古屋敷遺跡　遺構観察表
別表２　黒部古屋敷遺跡　掘立柱建物・柵一覧表
別表３　黒部古屋敷遺跡　土器・陶磁器・漆器一覧表
別表４　黒部古屋敷遺跡　木製品一覧表
別表５　黒部古屋敷遺跡　金属製品・石製品・製鉄関連遺物一覧表
別表６　遺構図版土層注記

Ⅰ 序　説

1　調査に至る経緯

1）事業の概要

新潟県柏崎市は日本海に面した新潟県のほぼ中央に位置し、広ぼうは東西27.40㎞、南北40.20㎞、面積は442.70㎢である。市の北部に位置する西山町地域で、一般県道向山西山停車場線の道路改築工事が計画された。これは、主要地方道柏崎・高浜・堀之内線と一般県道向山西山停車場線をバイパスで接続することで、北陸自動車道西山ＩＣと海岸部の国道352号線を直結して、観光資源が豊富な柏崎市の海岸部へのアクセスを良好にするものである。これにより、首都圏や関西圏からの観光交流人口の増大を見込むとともに、平時及び緊急時の交通の円滑化を図るものである。事業主体者は新潟県（担当：柏崎地域振興局地域整備部）である。

2）黒部古屋敷遺跡の発見

柏崎市教育委員会（以下、「市教委」）は、当事業の計画を把握したことから、平成19年４月３日に事業予定地における分布調査を行った。当該事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在していなかったものの、それまで調査が行われたことがなかった地域であることから行ったものである。この分布調査では、長嶺地区において土師器・須恵器・珠洲等が採集され、新発見の長嶺前田遺跡として新潟県教育委員会教育長へ報告を行った（市教委2008）。しかし、黒部地内の当該地区は雑草や雑木が繁茂していることから表面採集は行えず、埋蔵文化財の有無について確認することはできなかった。その後、事業主体者と長嶺前田遺跡の取り扱いについて協議を行ったが、法線の変更は困難なことから、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。ただし、この段階では事業採択はなされていなかったことから、事業の進捗状況を見ながら随時協議を続けることとなった。

平成21年度に事業が正式に採択されたことを受けて、長嶺前田遺跡の確認調査について調整を行った。その結果、用地取得の前年にあたる、平成22年度の稲刈り後に調査を実施することとなった。確認調査は平成22年11月16日から18日に実施した。この調査で、遺構と遺物が確認されたが、湿地の痕跡とみられる腐植物層が厚く堆積する部分も確認され、記録保存が必要な範囲を絞り込むことができた（市教委2012）。この調査結果をうけて、長嶺前田遺跡の本発掘調査の実施に向けた協議を行い、平成23年度の稲刈り後から調査を開始することとなった。

この段階では黒部地区については埋蔵文化財の確認ができていなかった。しかし、工事計画の見通しを立てるために早期の確認が必要であった。平成23年度は長嶺前田遺跡の本発掘調査を実施していたが、黒部地区の用地買収が進んだことから当地区の試掘調査を実施することとなった。調査は平成23年11月17日・18日に行った。調査は約1300㎡が対象で、ここに9カ所のトレンチを任意に設定した。その結果、遺物は1点のみの出土であったが、４カ所のトレンチで遺構が確認された（市教委2013）。この調査の結果、遺構が確認された範囲を中心に新発見の黒部古屋敷遺跡として新潟県教育長へ報告した。

3）本発掘調査に至る経緯

長嶺前田遺跡の本発掘調査は平成23年10月から一部で開始しており、ここで想定していなかった下層の遺構面が存在することが確認されていた。さらに黒部古屋敷遺跡が発見されたことから、全体の調査計画を見直すこととなった。平成23年度は着手済みの長嶺前田遺跡の一部の上層遺構面を完了するにとどめ、平成24年度当初に同地区の下層遺構面を調査することとなった。その後、長嶺前田遺跡の調査は中断し、黒部古屋敷遺跡の発掘調査を実施することとなった。なお、長嶺前田遺跡の発掘調査は平成25年度以降も継続して実施している。

事業を担当する新潟県柏崎地域振興局長は、平成24年５月31日付柏振地第126号で黒部古屋敷遺跡について、文化財保護法第94条第１項の通知を新潟県教育長に提出した。これに対し、新潟県教育長は、平成24年６月８日付教文第293号の２で記録保存のための本発掘調査を実施する旨の指示を事業主体者に伝えた。事業主体者と柏崎市は当事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の委託契約を締結した。柏崎市教育長は平成24年７月12日付け教総第560号により、文化財保護法第99条第１項に基づき、黒部古屋敷遺跡の発掘調査に着手する旨の通知を新潟県教育長に行い、発掘調査を開始した。

2. 発掘調査業務の体制と概要

1）調査体制

平成24年度の現場業務から整理作業を経て、平成25年度の報告書刊行に至るまでの体制は以下の通りである。

調査主体　柏崎市教育委員会　教育長　大倉政洋
（担当：教育総務課埋蔵文化財係）
総　　括　猪俣哲夫（教育総務課長）（平成24年度）
力石宗一（　〃　）（平成25年度）
管　　理　小池繁夫（教育総務課課長代理兼埋蔵文化財係長）
調査担当　中島義人（埋蔵文化財係主査）
調査補助員　池田文江（柏崎市遺跡考古館埋蔵文化財係）
山岸サチ子（　〃　）
整理作業員　柏崎市教育委員会臨時職員（柏崎市遺跡考古館埋蔵文化財係）
発掘作業スタッフ　公益社団法人柏崎市シルバー人材センター会員

2）現場作業の経過

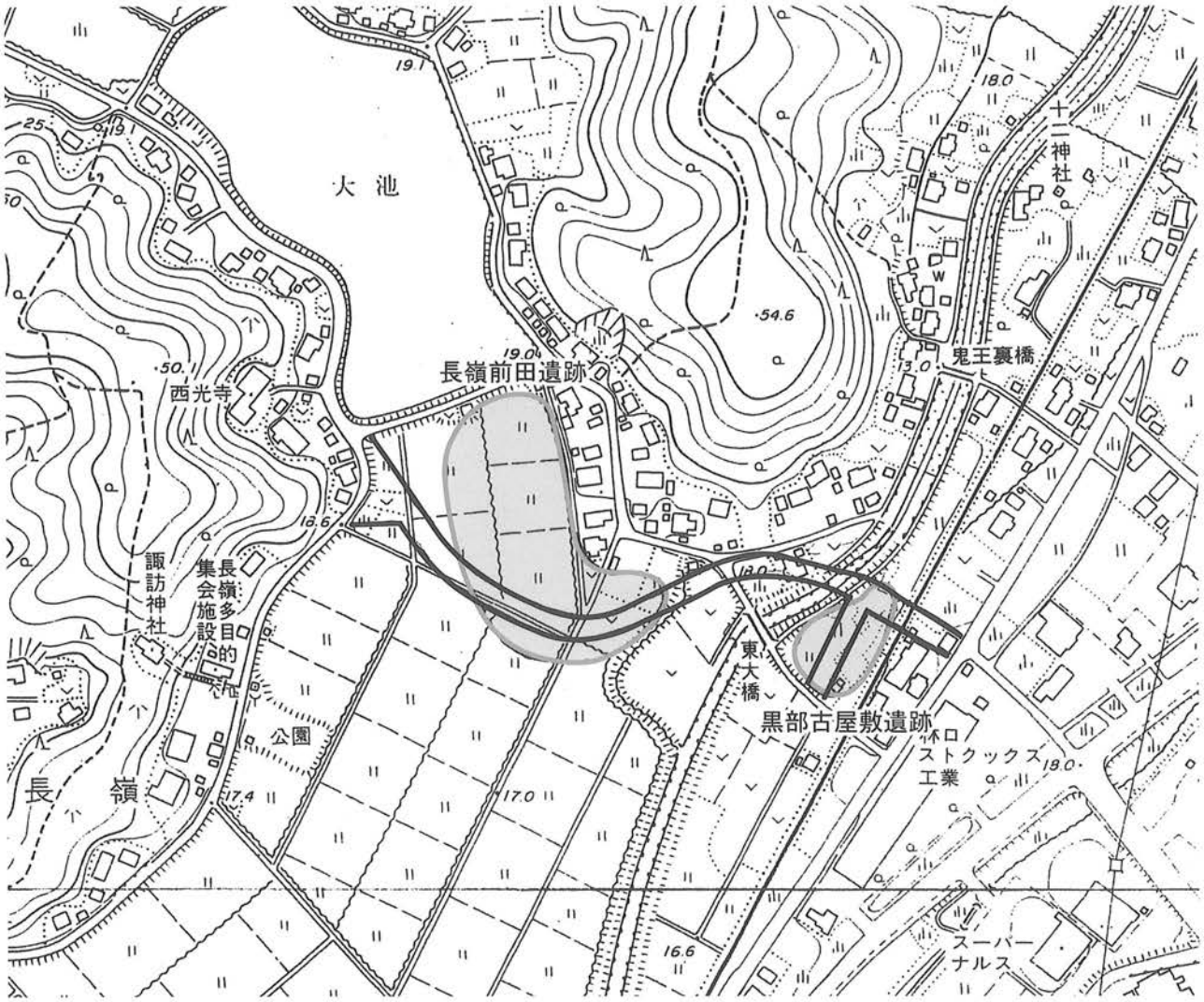
黒部古屋敷遺跡の発掘調査は平成24年８月６日から平成24年11月21日まで、延べ55日間にわたって実施した。調査では、昭和30年代に行われた河川改修前の旧別山川流路が事業地内にかかっていることが確認され、この範囲は調査対象から除外した。このため、実際の調査面積は約750㎡となった。掘削土の搬出が困難であったため、調査区を二分割して掘削土置き場を市道法線内に確保しながら調査を実施した。ここでは東側調査区、西側調査区と呼び分ける。調査は東側調査区から着手した。東側調査区の発掘作業及び記録作成を９月10日まで行った。その後に埋め戻しを行い、引き続き西側調査区の調査に着手した。

西側調査区の調査は11月21日まで行い、埋め戻しなどを行って、現場作業を終了した。

3） 整理・報告書作成の経過

基礎整理作業としての出土遺物の洗浄及び注記は、現場作業に並行して行った。出土遺物は少なく、接合が必要な資料もほとんど無かったため、同年度中に遺物実測をほぼ完了させた。また、検出遺構に関する記録類の整理作業も同年度中にほぼ完了させた。

平成25年度は、原稿の執筆、図版の作成などを行った。図面図版と写真図版の版下作成は業務委託により行った。並行して調査担当が原稿の執筆、観察表の作成などを行い、本書を刊行した。



第１図　黒部古屋敷遺跡と事業範囲図（縮尺１：5,000）

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

1　黒部古屋敷遺跡の位置と地理的環境

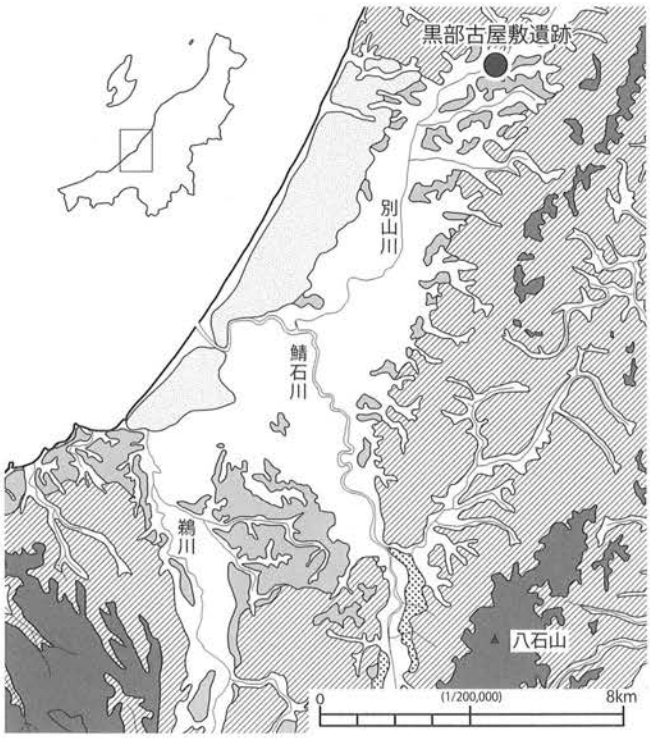
黒部古屋敷遺跡は、新潟県柏崎市西山町黒部・鬼王地内に所在する。柏崎平野の北部にあたり、鯖石川の支流である別山川の左岸に位置する。

柏崎平野　新潟県の中央部は中越地方と呼ばれる。中越は、標高1,500ｍ級以上の連山が続く東側と、河川や海岸に沿って発達した段丘・平野がみられる西側に区分されるが［小林ほか2008］、柏崎平野は西側の一部である。柏崎平野は、鯖石川と鵜川を主要河川として形成された臨海沖積平野であり、各河川は個々に独立した水系を持つ。そして、信濃川水系の越後平野や関川水系による頚城平野とは、丘陵や山塊による分水嶺によって隔されており、ひとつの独立した平野を形成する。

柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、東頸城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鵜川・鯖石川によって西部・中央部・北～東部に3分され、それぞれ米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊が海岸にまで達し、沿岸部は低位・中位・高位の各段丘による断崖が顕著で、沖積地や砂浜は少ない。中央部は、黒姫山から北へ緩やかに高度が下がり、沖積地に接する一帯に広い中位段丘が形成され、その北側に湿地性の強い沖積地が広がる。北～東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵･曽地丘陵･八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川･長鳥川といった鯖石川の支流が南西に流れ出る。

平野の地形は、中･上部更新統～完新統からなる段丘や多くが地下に埋没した上部更新統からなる古（旧期）砂丘、更新統の最上部～完新統からなる河道・旧河道・自然堤防・後背湿地・新砂丘などに区分される［柏崎平野団体研究グループ1979］。日本海に面する北西部は海岸に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわり、現在では柏崎の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は砂丘後背地として湿地性が強く、鵜川・鯖石川の蛇行により各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

別山川流域と遺跡周辺の地形　柏崎平野東部を北流する鯖石川は、鵜川とともに柏崎平野の二大河川のひとつである。別山川は、鯖石川の下流域で合流する最大の支流で、延長は約17.4㎞である。水源は出雲崎町との境界付近の曽地丘陵にあり、曽地丘陵と西山丘陵との間を向斜軸に沿いながら、おおむね南西に向かって流れる。流域には氾濫原堆積物からなる沖積層が広がり、柏崎平野の北端を形成する。下流の刈羽村域では平野部は大きく開けるが、上流の旧西山町域での平野部は幅が狭くなっていく。現



第２図　黒部古屋敷遺跡の位置と周辺の地形

在の別山川は、河川改修が進んでおり、直線的な流路となっている部分が多いが、以前は随所で蛇行して排水を妨げていたとされる。黒部古屋敷遺跡周辺では、昭和30年代に河川改修が行われて現在の流路となったが、それ以前は幾度も浸水の被害があったといわれる。

2　歴史的環境と周辺の遺跡

1）黒部古屋敷遺跡をめぐる歴史的環境

本遺跡では、おもに古代・中世・近世の遺物が出土した。ここでは古代以降の遺跡や関連資料から、周辺地域における歴史的環境について概観する。

a　古　　代

越後国を含む古代北陸道の諸国は、それまでの越国を分割することにより成立したが、それは持統４年（690）の庚寅年籍作成段階であった可能性が高いとされている［坂井1983］。成立当初の越後国は、現在の阿賀野川以北の地であり、現柏崎市域等は、越中国に属していた。現在のような越後国の国域が確定したのは、大宝２年（702）における越中国四郡（蒲原郡・古志郡・魚沼郡・頸城郡）の越後国への分割［米沢1976］と、和銅5年（712）に出羽国が分置・独立して以後のことである。

奈良時代の柏崎市・刈羽郡域の大部分は、古志郡に属していた。当時の古志郡は、長岡市（旧三島郡和島村）八幡林遺跡の調査成果から、島崎川流域の八幡林遺跡付近に郡衙等の中枢部が想定でき［和島村教委1994ほか］、柏崎平野とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的にはやや隔たりがあった。その後、９世紀前葉に柏崎平野一帯は三嶋郡として分置・独立したとされている［米沢1980］。

承平年間（931～938）に成立した『倭名類聚鈔』には、三嶋郡の郷名として「三嶋」・「高家」・「多岐」の3郷が記される。また、延長５年（927）に完成した『延喜式』には、越後国駅馬として「三嶋」と「多太」がみられる。これら２史料に記された記載順や地名あるいは式内社などの分布から、別山川流域は多岐郷に比定され、多岐郷内に多太駅があったと想定される。

b　中　　世

『吾妻鏡』文治２年（1186）３月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として、「宇河（鵜河）荘」「佐橋（鯖石）荘」「比角荘」の３荘園が記される。これらは、寄進地系荘園として11世紀末～12世紀中葉頃に成立したと考えられる［荻野1986］。各荘園の四至は明確でないが、鵜河荘は鵜川河口付近を除く鵜川流域一帯と鯖石川左岸域の一部など、比角荘はおおむね現在の柏崎市街地、佐橋荘は鯖石川中流域と長鳥川流域付近が荘域と考えられる。しかし、鯖石川最大の支流であり、古代の官道北陸道が通っていた別山川流域については、荘域の拡大や別の荘園が成立した痕跡がみられない。周辺地域に関する史料をみると、『明月記』正治元年（1199）正月廿二日条及び正和２年（1313）の「源光広和与状写」に記載されている「苅羽郷」のほか、保の存在を窺い知ることができる［村山1990］。まず、康安2年（1362）の「藤原為顕寄進状并上杉憲栄安堵状」（善照寺文書）にある「苅羽□（郡）原田□（保）」は、花田に比定されている［新沢1990］。文明３年（1471）の「伊弥彦神条式写」（高橋文書）には「曽智吉井保」とあり、曽地・吉井と考えられる。そして、「尊卑分脈」には嵯峨源氏融流で13世紀中葉～14世紀前葉頃に生存したとみられる等 ・告の注釈に「（越後國）赤田保地頭職」の記載がみられる。なお、別山川流域のほかにも、西山丘陵の沿岸部には「埴生保」・「神田保」が推測されている。前者は、延文2年（1357）の「左衛門尉某打渡状」（覚園寺文書）にあり、宮川に比定されている。後者は、高野山清浄

心院「越後過去名簿」に「貞精　カリワ郡神田保　カイサワ又次良　大永五年二月廿九日」[山本2008]、「毛利安田氏所領注文」（米沢市立図書館所蔵）14）に「神田保」とあり、西山町甲田に比定されている。

この別山川流域は、弥生時代中期以降に開発が進められた先進地であり、北陸道に通じた交通や流通の要地であったことなどが考えられる。そのため、鵜川や鯖石川流域とは異なる歴史的展開があったと推測され、国衙領としての伝統が強く残存した結果、中世前期では荘園が成立しなかったと考えられる。

次に、中世後期における在地の支配関係について、おおまかな勢力分布をみていく。まず、佐橋荘と鵜川荘安田条を本貫地とする毛利氏は、時期によっては別俣郷までを領域としていた可能性があるなど、柏崎・刈羽地域では最大の勢力を誇っていた。毛利氏は、南北朝の動乱期において、安芸の領地へ移った西国毛利氏に対し、越後に在国した主勢力を越後毛利氏と呼ぶ。同氏に対する勢力としては、鵜川荘上条の上条城を館とした上条上杉氏、刈羽の赤田城を根拠地として別山川流域の大半を領する斎藤氏などが配され、北や西から毛利氏を牽制していた。越後毛利氏は、いくつかの庶子を分出するが、戦国末期の御館の乱（1578年）に際し、安田毛利氏・斎藤氏・上条上杉氏は景勝方に与し、北条毛利氏は景虎方の主勢力として活躍した。しかし、北条毛利氏は、本拠地北条城を開城して景勝方に降り、佐橋荘を主とする領地のすべてが上杉景勝方の武将に細分して分け与えられ、在地の勢力図は一変した。

c　近世

天保検地帳による黒部の戸数は４戸で、当時は別山川左岸の「ふるやしき」にあったと伝えられる。しかし、たびたび別山川が氾濫するため、当地から現在の住宅街に移ったのだという。元和２年（1616）以降は幕僚で、貞享２年（1685）から高田城主稲葉正通の支配を受けたとされる。

d　古代以降の遺跡

ここでは、黒部古屋敷遺跡周辺の遺跡ということで、旧西山町地域の古代以降の遺跡について概観する。当期の遺跡では複数の時代が複合するものが多い。

当地域では、飛鳥・奈良時代の遺跡は発見例が少ない。宮ノ前遺跡［西山町教委2003］と町口遺跡［柏崎市教委2010］で7世紀後半頃とみられる須恵器杯蓋が各１点出土したが、遺構は未確認である。

宮ノ前遺跡は古墳時代から中世の複合遺跡であるが、古代では９世紀後半から10世紀中頃までの集落跡が確認された。遺構には掘立柱建物や溝、井戸、土坑がある。最大の掘立柱建物は梁間4間、桁行７間のもので、平面積は120㎡を超える大型のものである。同一カ所で3回以上の建て替えが確認できる。遺物には須恵器や土師器の他に、多量の灰釉陶器があり、新田開発を主導した開発領主層の存在が想定される。

坂田地区は、当地域で最も遺跡が密集する地域である。中でも坂田遺跡では、９世紀前半頃に在地で須恵器生産を行っていた可能性が指摘されている［柏崎市教委2009］。９世紀前半の溝から、当期の小泊窯産と須恵器とともに、胎土や形態が特徴的な須恵器がまとまって出土した。両者には同様の墨書がなされており、一括廃棄されていることから同時期のものとみられる。周辺の遺跡では確認されない特徴的なものであることから、この遺跡が須恵器の生産に関わっていることが想定された。

海岸部に立地する井ノ町遺跡では、８世紀代と９世紀前半から中頃までの遺物が多く出土した［西山町教委2001］。８世紀代の遺構は不明瞭であるが、９世紀代には、大型の柱穴に直径30cm前後の柱を建てた掘立柱建物などが見つかった。遺跡は日本海に直接流れ込む仁位殿川の旧流路沿いに立地する。９世紀代の須恵器が多量に出土している。遺構の量に比べて遺物、特に須恵器無台杯の量が多いことから、一般集落とは異なる性格を想定している。この他にも、別山川流域では伊毛大新田遺跡、内田遺跡、尾野内遺跡［新潟県教育委員会1982］が、海岸部では大津遺跡が当期の遺跡であり、今後さらに発見されることが想

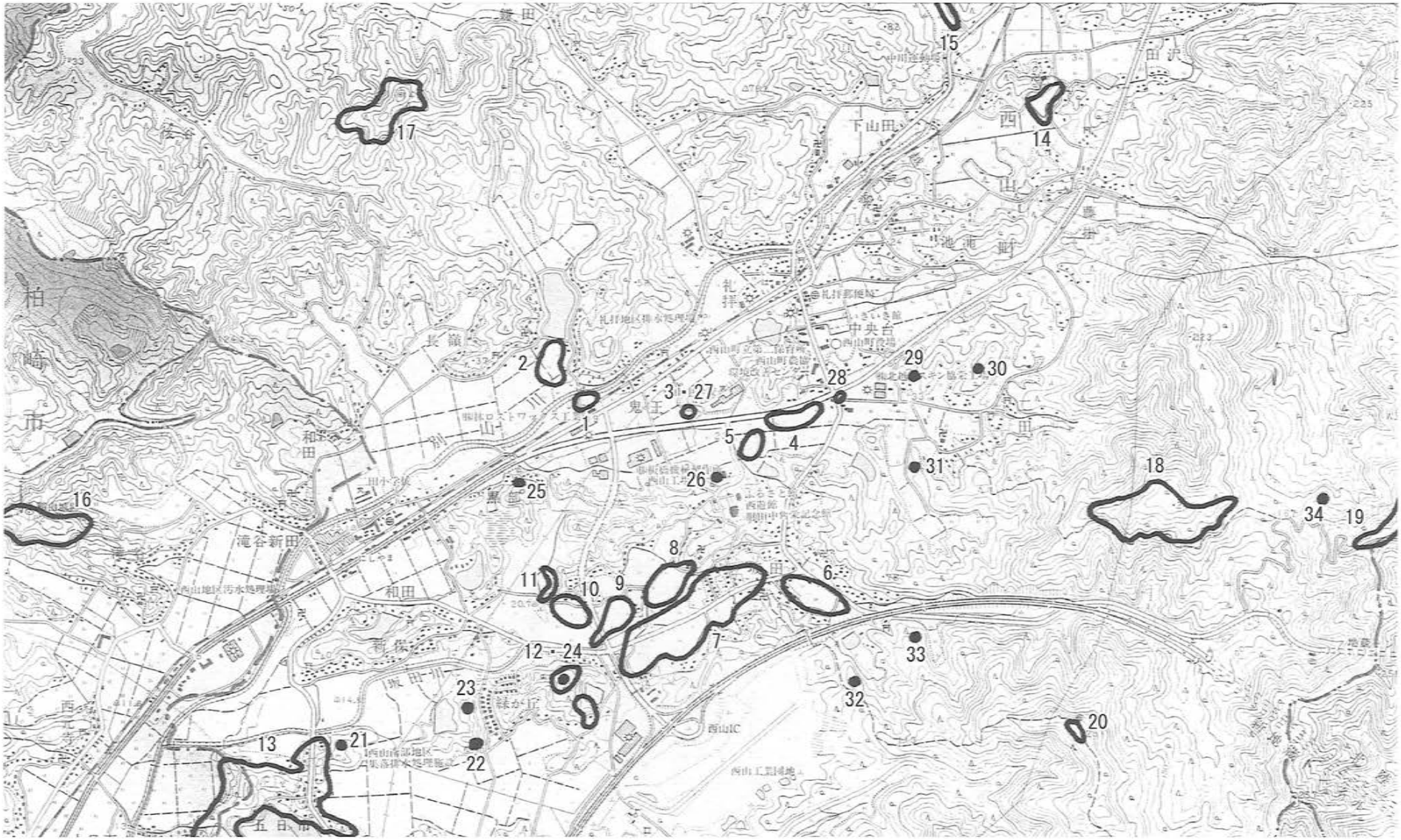
定される。

中世になると、集落跡の他に山城や製鉄関連遺跡などが出現し、館の存在も想定される。集落跡では坂田地区の坂田遺跡と町口遺跡、上沢田遺跡、北野地区の宮ノ前遺跡で発掘調査が行われた。坂田地区の遺跡では12世紀後半頃から16世紀代の遺物と遺構が確認されている。特に町口遺跡では14世紀代と15世紀後半から16世紀前半の堀とみられる大型の溝が検出された。14世紀代の溝は幅2.5ｍ、深さ0.6ｍの箱堀とみられる。15世紀後半からのものは方形に巡る堀の一部とみられ、深い部分では1.4ｍの深さを確認した。遺物には白磁四耳壷や青白磁の梅瓶や小壷、瓦器、茶臼等があり、一般集落とは異なる様相が確認できる。また、坂田遺跡では地籍図や地形の検討から館の存在が指摘されている[鳴海1992]。宮ノ前遺跡では13世紀後半から16世紀代までの遺構、遺物が出土しており、当期の漆器なども出土した。

中世になると、西山・曽地丘陵で活発に鉄生産が行われるようになる。宝童寺遺跡群は別山川最上流部の小支流が流れ出る沢に位置する。ここでは、11世紀から13世紀にかけての木炭窯が多量に見つかり、これに伴う半地下式竪型炉や排滓場も検出された［柏崎市教委2008］。木炭窯は丘陵斜面に折り重なるように築造されており、繰り返し製炭を行ったことがわかる。13世紀代の木炭窯等から外面に簾状圧痕が着く大型の羽口が出土しており、製錬のための半地下式竪型炉に使用されたとみられる。同様の羽口は内越遺跡でも出土しており、この羽口の小型品が坂田地区の集落跡でも出土している。小型のものは同時期の鍛冶に用いられたと考えられる。

中世には多くの山城も築かれ、曽地丘陵上には二田城・高内城、西山丘陵上には鎌田城・大崎城といったやや規模の大きい山城があり、その周辺に小規模な山城や砦が点在する。甲田城は大崎城の北東部に位置する小規模な山城で、ほぼ全域で発掘調査が行われた。東西140ｍ、南北80ｍの範囲に31カ所の平坦面と４基の空堀が検出され、土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・青花・粉挽臼や鉄製品等の他に、炭化種実が多量に出土した［西山町教委1991］。これには、イネ・アワ・キビ・ヒエ・オオムギ・コムギ・ダイズなどがある。放射性炭素年代測定では、一部の試料で16世紀前半から17世紀後半の暦年代範囲が示された［市教委2013c］。

中世から近世にかけて、時期は不明瞭であるが、多くの塚が築かれている。黒部地内では狐山塚群で調査が行われ、２基の塚と１基の掘り込み状遺構が検出され、宝篋印塔や五輪塔の一部などが出土した。



1. **黒部古屋敷遺跡** 2. 長嶺前田遺跡 3. 木ノ下遺跡 4. 二田沖遺跡 5. 扇田遺跡 6. 上沢田遺跡 7. 坂田遺跡 8. 町口遺跡 9. 坂田仲沢遺跡 10. マイグリ遺跡 11. 外前回遺跡 12. 坪之内遺跡 13. 野崎遺跡 14. ワゴ遺跡 15. 伊毛大新田遺跡 16. 勝山城 17. 鎌田城 18. 亀岡城 19. 二田城 20. 金山城 21. 小橋の塚群 22. 桑田の塚群 23. 新保向山の塚群 24. 坪之内塚群 25. 狐山塚群 26. 丑田の塚群 27. 礼拝の塚群 28. 膝附の塚 29. 六百刈の塚群 30. 西ヶ入の塚群 31. 車田の塚 32. 石甲の塚群 33. 善五郎の塚群 34. 甲田ヶ谷の塚群

第３図　黒部古屋敷遺跡と周辺の遺跡

Ⅲ　調　　査

1　調査の目的と調査区の設定

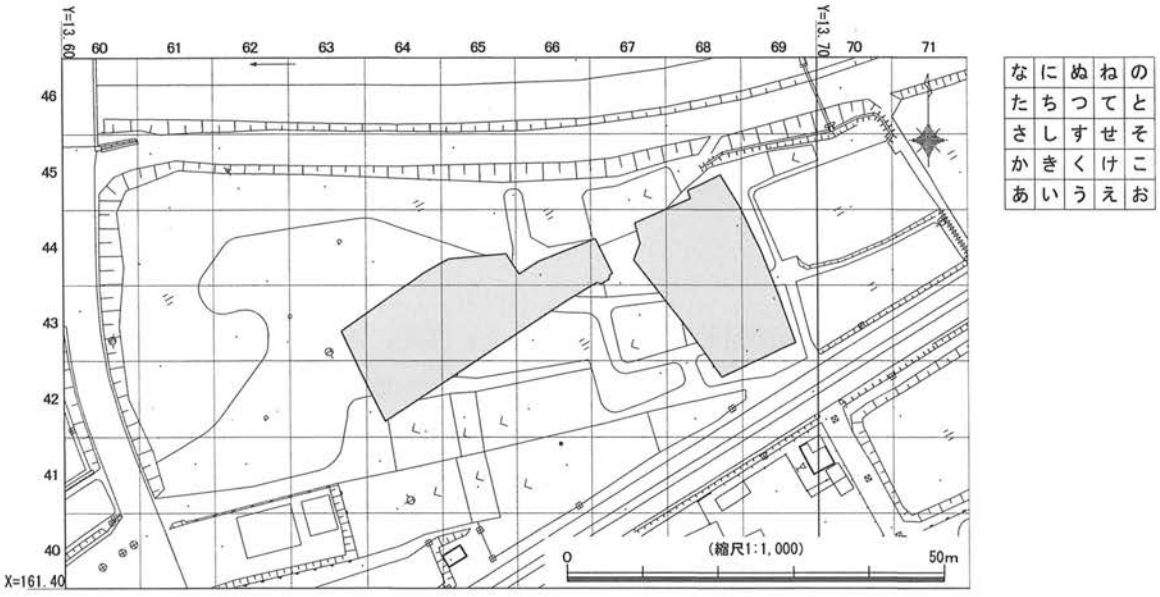
黒部古屋敷遺跡は、原因事業に伴って実施した一連の試掘・確認調査の第３次で発見した。当地区の試掘調査は、別山川とＪＲ越後線を結ぶ県道部分と、これにほぼ直交して取り付く市道黒部西山線の新設部分を合わせた「T」字形の範囲を対象として行った。この試掘調査で出土した遺物は１点だけであったが、溝やピット、土坑等の遺構を検出した［柏崎市教委2013］。この結果を受け、新発見の黒部古屋敷遺跡として新潟県教育長へ報告を行った。ただし、県道部分の北部では河川改修前の別山川の河道跡を検出したため、遺跡範囲から除外した。また、対象地の中でも西寄りのトレンチでは遺構・遺物ともに検出されず、湿地性の堆積を確認したため、このトレンチより西側も遺跡範囲から除外した。調査の原因事業が道路建設のため、遺跡範囲内の法線部分は全て記録保存の対象となった。

調査対象地の地目は畑が大部分であったが、現状は雑木が生い茂る荒蕪地に近い状態である。地表面は概ね平坦で、所々に畑の区画がある。

2　調査の方法

1）グリッドの設定

グリッドは、当事業に伴う発掘調査区全範囲を網羅することを目的に、国家座標を用いて設定した。南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸とし、グリッド名称は10ｍごとに国家座標の値の百位と十位を用いた２桁の整数で表した。この10ｍ四方の方眼を大グリッドとし、これをさらに２ｍ四方の25区画に細分したものを小グリッドとした。小グリッドはア～ノのカタカナで表した（第４図）。なお、東日本大震災の前後にお



第４図　グリッド設定図

いて座標値に変化が生じているが、震災前に作成された各種の地形図と整合させるため、今回の調査は震災前の座標値を用いている。

2）表土掘削と遺構検出

調査対象地の地目は畑地であったが、広範囲で雑木が繁茂していた。調査前にこれらを伐採し、その後に法面バケットを装着したバックホウにより表土掘削を行った。試掘調査においてほとんど遺物が出土しておらず、明確な遺物包含層も確認されなかったため、遺物の出土状況を見ながら重機により遺構検出面直上まで掘削を行った。最終的には、後述するように遺物包含層は一部で残存していたものの、ほとんど遺物は出土しなかったため、ほぼ全域で重機により遺構検出面の上位付近まで掘り下げた。その後、人力により遺構検出面まで掘り下げを行い、鋤簾などを用いて遺構検出を行った。検出した遺構は、スプレー等を用いてマーキングし、遺構概略図を作成した。検出した遺構は、種別を問わず連番を付し、遺構台帳を作成しながら調査を行った。

3）遺構発掘

遺構の掘削は、大型の遺構以外は半截し、概ねの形態、規模、覆土などを観察して遺構台帳に記載した。大型の土坑等は土層観察用の畦を残して掘り下げて、遺構台帳を作成した。その後、必要な記録を作成して完掘した。出土遺物は、遺構外のものは出土した小グリッドを記録して取り上げ、遺構内のものは出土層位を記録し、一部は出土状況の写真を撮影し、出土地点をトータルステーションで記録してから取り上げた。遺構完掘状況の平面図は、業務委託による電子平板測量で作成した。他の遺構の調査などで事前に破壊する必要がある遺構は、調査員がトータルステーションにより観測し、後に業務委託によるデータと合成した。

4）記録作成

遺構個別や遺物出土状況の写真撮影は、調査担当が行った。使用したフィルムは35㎜リバーサルと35㎜モノクロネガである。フィルムの感度はISO100を基本としたが、10月以降はISO400を使用した。また、1200万画素一眼レフデジタルカメラ、コンパクトタイプのデジタルカメラも記録用に随時用いた。

全体完掘後にＲＣヘリコプターによる空中写真の撮影を業務委託により実施した。この撮影では、35㎜カラーリバーサルフィルム、67判カラーネガとカラーリバーサル、2100万画素一眼レフデジタルカメラを使用した。

5）整理・報告書作成作業

発掘調査に並行して出土遺物の洗浄と注記作業を行った。注記にあたっては遺跡名の略号として「クロ古」を用い、他に出土遺構やグリッド、層位等を併記した。遺物量は少なく、接合作業も発掘調査に並行して完了させた。遺物実測は、発掘作業終了後に開始した。器種や部位が把握できるものを主に選択した。合わせて、発掘作業で作成した記録類の整理を行った。

基礎整理作業に引き続いて発掘調査報告書の作成を開始した。図面および写真図版の作成は、業務委託によるデジタル編集で行った。原稿の執筆は全て調査担当が行った。

Ⅳ　遺跡と遺構

1　基本層序と遺構の概要

1）基本層序（図版５）

黒部古屋敷遺跡の本発掘調査で確認した基本層序についてまとめる。基本層序の確認は調査区の壁面で行った。しかし、調査区の北側は改修前の別山川流路跡が大部分を占めており、調査区壁の大部分もこれにかかっていることから、記録の作成は省略した。

確認した基本層序は、第０層から第Ⅴ層までの６層に大別した。第Ⅰ層は現況の表土層であり、この上位の盛土や撹乱を第０層とした。第Ⅰ層の堆積は、厚さが20㎝前後と全域で一定で、上面の標高は17.0ｍから17.2ｍで推移する。各所に畑の区画などに伴う盛土や溝、撹乱がある。

第Ⅱ層は表土層の下位の灰黄褐色粘質土層と旧別山川の埋めたて土をまとめ、前者を第Ⅱａ層、後者を第Ⅱｂ層とした。第Ⅱａ層は調査区全域で確認でき、若干の凹凸はあるが上面は概ね平坦である。炭化物や焼土粒が円形の掘り込み内に堆積している部分が数ヶ所あった。第Ⅱｂ層は、調査区北東部で検出した河川改修前の別山川流路を埋めるもので、さらに細分できる。灰黄褐色や灰黄色などの粘質土が主体で、概ね水平に堆積する。第Ⅱａ層は第Ⅱｂ層を覆っていることから、第Ⅱｂ層が河川改修の際に旧河道の埋めたて土で、河川改修後に整地などを行った際の盛り土が第Ⅱａ層であると考えた。また、第Ⅱａ層に含まれた炭化物や焼土粒は、現代の炭焼きに伴うものと判断したため、調査の対象とはしなかった。

第Ⅲ層は灰黄褐色粘土層、第Ⅳ層は褐灰色粘土層である。両層とも炭化物をやや多く含んでおり、遺構検出面の上位に堆積していることから遺物包含層であると判断した。第Ⅲ・Ⅳ層ともに堆積は非常に薄く、消失している部分が大半である。調査区壁面にかかる遺構の断面を見ると、第Ⅲ層上からの掘り込み、第Ⅳ層上からの掘り込み、第Ⅳ層下位の掘り込みがあることを確認できる。このことから、遺構の形成時期は少なくとも３時期に分けられるが、平面で明確に分類することはできなかった。これらの層の遺存状況が悪いことは、河川改修工事やその後の整地などに伴い削平されたためと考えられる。このような状況であったため、包含層出土の遺物が非常に少なく、どちらの層に帰属するものであるか判別することはできなかったため、各層の形成時期は不明である。第Ⅴ層は遺構検出面である地山層で、にぶい黄褐色や灰黄色の粘質土層である。

2）遺構の概要

本発掘調査で検出した遺構はピット・井戸・土坑・溝がある。遺構の総数は608基で、９棟の掘立柱建物と５本の柵列を想定した。

調査区の北縁部の旧別山川縁辺付近は南側より一段低くなっている。この低い部分では特殊な土坑とみられるもの以外の遺構は稀薄となっており、特に井戸などは見られない。ＳＤ158とＳＤ281がこの境界となっている。これより南側ではほぼ全域で遺構が検出されているが、東側調査区に比べて西側調査区の方がやや濃密に遺構が分布する。ピットは特に西側調査区で多く検出された。西側調査区では井戸も密集して見つかっている。これに対して東側調査区では遺構の分布がやや散漫で、遺構の空白地がやや目立って

いる。ただし、西側調査区西端部でもやや稀薄となっており、この西側で湿地性堆積が検出されていることからも、集落の縁辺であったと考えられる。

2　遺構各説

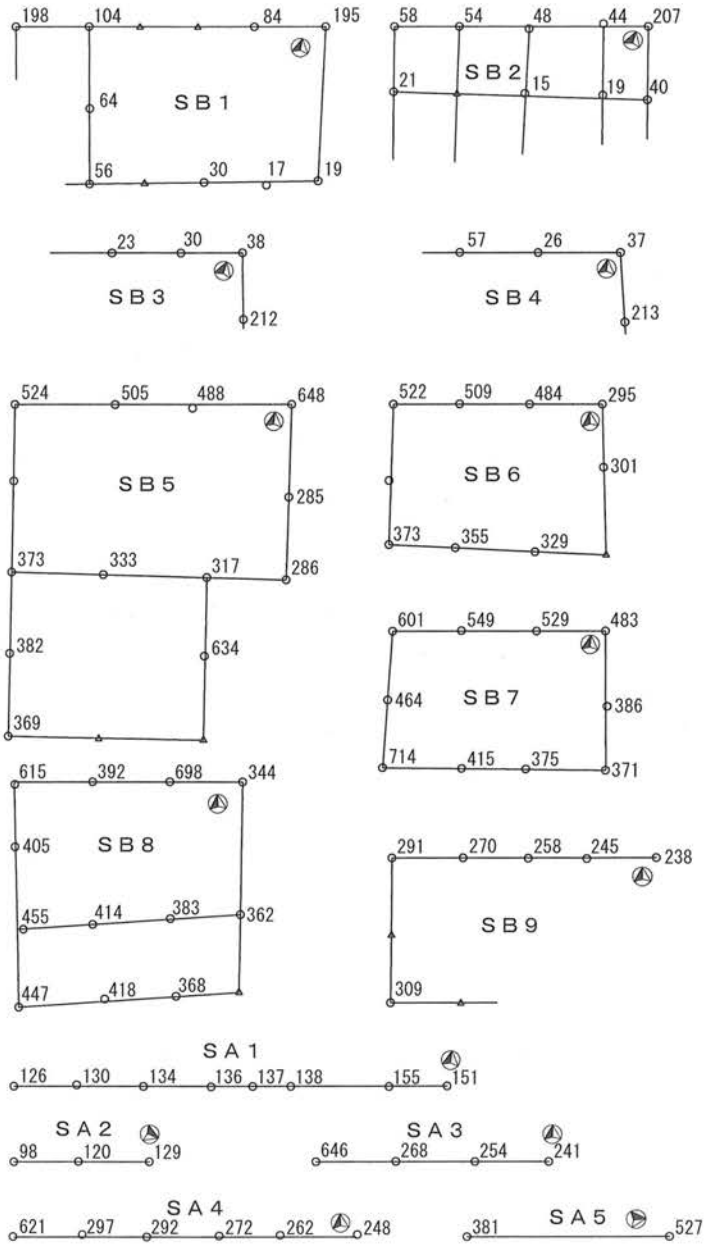
1）　掘立柱建物・柵

柱穴の配置の組み合わせから９棟の建物と５列の柵を想定した。掘立柱建物は調査区の南側に多くあり、調査区外に広がるものが大部分である。現場の調査段階で柱列の確認作業は随時行っていたが、調査段階で把握できたものはＳＡ４とＳＡ５のみであった。その他は全て、整理作業時における図上での検討により柱列を抽出し、掘立柱建物や柵を復元したものである。

ＳＢ１（図版６）　東側調査区の南西部に位置する。梁行２間桁行４間の身舎の西側に庇を持つ側柱建物を想定した。建物の一部は調査区の西側へ広がる。主軸は東へ81°傾く。柱間寸法は一定ではなく、梁側で２ｍを超え、桁側は1.3ｍから1.9ｍとばらつきが大きい。柱穴の平面形はおおむね円形で、深度は0.3ｍから0.5ｍである。北側の柱列でＳＥ87と切り合いを持つ。遺構検出時にＳＥ87上面で柱穴は検出されなかったことから、これに先行する建物である。また、ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ４と交差している。ＳＰ19をＳＢ２と、ＳＰ30をＳＢ３と共有し、前後関係は不明である。

ＳＢ２（図版６）　東側調査区の南西部に位置する。桁行３間で、東側に庇を持つ総柱建物で、調査区の南側へさらに広がるものと想定した。主軸は東へ72°傾く。身舎の柱間寸法は1.8ｍ前後である。柱穴は、平面形が直径0.3ｍまでと小規模の円形で、深度は0.4ｍ以下で浅いものが多い。建物内にＳＥ２が存在しているが、これとの前後関係は不明である。

ＳＢ３（図版７）　東側調査区の南西部に位置する。大部分は調査区の南と西へ広がるもので、北側２間と東側１間を確認した。主軸は東へ70°傾く柱間寸法は1.6ｍから1.8ｍである。柱穴の平面形は0.3ｍ前後の円形である。



第５図　掘立柱建物・柵模式図（縮尺１：200）

ＳＢ４（図版７）　東側調査区の南西部に位置する。ＳＢ３同様に、調査区の南側と西側に広がもので、北側２間と東側１間が確認できた。主軸は東へ83°傾く。柱穴は、平面形が直径0.3ｍ前後の円形で深度は0.3ｍ以下である。ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ４はほぼ同一カ所に位置するが、主軸方向や配置に違いがあることから一連の建て替えによるものかは明らかではない。また、建物内部にＳＥ２が存在するが、これとの前後関係も明らかにできなかった。

ＳＢ５（図版７）　西側調査区のほぼ中央に位置する。梁行２間桁行３間の身舎の南側に２間×２間の張り出し部分を想定した。身舎の主軸は東へ84°傾く。柱間寸法は2.0ｍから2.7ｍまでとばらつきが大きく、間隔も広い。柱穴は南側の張り出し部も含めて、平面形が0.4ｍを超える大きめの円形で、深度も0.5ｍ以上の深いものが多い。しかし、いずれの柱穴でも柱痕は確認できず、覆土は水平やレンズ状の堆積のものである。

ＳＢ６（図版８）　西側調査区のほぼ中央に位置する。梁行２間桁行３間の側柱建物である。主軸は東へ95°傾く。柱間寸法は1.8ｍ前後が多く、最大のものは2.1ｍである。柱穴の平面形は直径0.3ｍ前後の小規模な円形で、深度は0.2ｍから0.5ｍのものが多い。南東角の柱穴はＳＥ313に重複するが、遺構上面で柱穴を確認できなかった。ＳＥ313に先行するものである。

ＳＢ７（図版８）　西側調査区の中央やや西寄りに位置する。梁行２間桁行３間の側柱建物である。主軸は東へ86°傾く。柱間寸法は1.8ｍ前後が多く、最大で2.1ｍである。柱穴の平面形は0.3ｍ前後の円形である。柱穴底部の標高は16.4ｍ前後でおおむね一定である。南東角のＳＰ371はＳＥ376より新しく、この西側のＳＰ375はＳＥ376より新しいＳＰ374に切られているが、ＳＥ371より新しいことを否定するものではない。ＳＢ７がＳＥ371より新しいものである。

ＳＢ８（図版９）　西側調査区の西部に位置する。梁行２間桁行３間の身舎の南側に庇を想定した。ＳＥ406の上面で柱穴１基を確認していたが、掘方を明確にすることができなかったものがある。これとＳＰ372を用いることができれば、３間３間の総柱建物である可能性がある。ＳＰ405がＳＥ406を切っており、ＳＢ８が新しいことは確認された。柱間寸法は２ｍ前後が多い。柱穴は平面形が0.3ｍの円形で、底部の標高は16.4ｍ前後が多い。南西角のＳＰ447から珠洲甕の体部破片（36）が出土した。

ＳＢ９（図版９）　西側調査区の東部に位置する。南東部の大部分は調査区外に広がるもので、西側梁行２間、北側桁行４間を確認した。主軸は東へ90°傾く。柱間寸法は1.8ｍ前後が多い。柱穴は、平面形が円形で0.3ｍ前後、底部の標高は16.6ｍ前後とほぼ一定である。西側梁の中央の柱穴はＳＫ296により消滅しており、これに先行するものである。

ＳＡ１（図版10）　東側調査区中央に位置する。主軸は東へ82°傾く。柱間寸法は1.0ｍから2.6ｍまでと差が大きいが、柱筋はおおむね通っている。主軸はＳＢ１、ＳＢ158におおむね揃う。北側を通るＳＤ158にほぼ平行することから一連の柵であると想定した。

ＳＡ２（図版10）　東側調査区西壁沿いに位置する。柱穴３基からなる２間の柱穴列である。柱間寸法は1.8ｍと一定であるため、一連の柱穴列とした。調査区西側に広がる建物の一部と想定している。

ＳＡ３（図版10）　西側調査区中央よりやや東寄りに位置する東西方向の柱穴列である。柱間寸法は1.8ｍから2.0ｍである。柱穴の規模は0.3ｍ前後と小規模である。

ＳＡ４（図版10）　西側調査区東側に位置する。柱穴6基からなる東西方向の柱穴列である。柱間寸法は1.6ｍから2.0ｍまで差が大きい。柱穴掘方が比較的大きく埋土が類似しており、上面で柱痕が検出されたため、調査段階で一連の柱穴列として認識できたものである。掘方の平面形は円形、隅丸方形、長楕円形

など一定ではない。また、長楕円形のものでも、南北方向に長いものと東西方向に長いものが混在する。柱穴の掘方に規則性はなかったのであろう。埋土の上位は褐灰色土が主体である。柱痕は検出面で明瞭に確認でき、直径が16cm前後の円形であった。柱痕を横切るように半截すると、柱根部は底面にいたらないもの、おおむね底面に達するもの、底面を大きく突き抜けるものなどさまざまであった。また、ＳＰ262・ＳＰ292の柱根は断面で大きく湾曲している。細く、屈曲している材を用いたものであることがわかる。柱痕部分の覆土はにぶい黄褐色土や灰黄褐色土である。ＳＰ262の掘方から肥前陶器丸皿の小片（50）が、ＳＰ621から青花（45）が出土した。この柱穴列に伴うと考えられる道状遺構や建物は確認できなかった。

ＳＡ５（図版10）　西側調査区中央よりやや西に位置する。柱穴２基からなる。いずれもやや大型の柱穴に、断面が方形の柱を持つものである。ＳＰ381は、半截時には緩い粘土層の柱痕部分しか確認できなかったのだが、完掘する際に断面方形の柱根（72）が出土した。ＳＰ527でも、半截時には同様の粘土質の柱痕が検出された。完掘を行う際に柱痕が出土したが（73）、大部分が腐食した小さなものであった。周囲を精査すると、緩い粘土層は平面が正方形を呈していることがわかった（図版28）。２基の柱は、面と面が向かい合っており、これが対になる柱穴であることが確認できた。柱根の中心部分の間隔は約5.3ｍであり、およそ３間に相当するものであった。このため、両柱穴間やその延長線上、これに直行する部分にさらに組み合う柱穴があるものと考えて幾度も精査を行った。しかし、これに組み合う柱穴を確認することはできなかった。ＳＰ381はＳＢ５の柱穴であるＳＰ382を切っているほかは、他の遺構との前後関係は確認できなかった。

２）井戸

当調査で検出した井戸では、いずれも井戸側や水溜などの木製遺物は検出されなかった。そのため、大型の土坑との区分が困難である。ここでは一定程度の水量を蓄えられると想定できる規模のものを一括して井戸とした。当調査区で検出した井戸は15基で、調査区のほぼ全域に分布している。

ＳＥ279（図版11）　西側調査区中央やや東に位置する。平面形はやや隅丸方形に近く、直径1.0ｍ程度である。壁面はおおむね垂直で、深度1.4ｍで平坦な底部に至る。覆土は下位に黄灰色粘土が厚く堆積し、上位には地山土に由来するブロック土が多く混じる。第３層の黄灰色粘土層の上半から珠洲（33・38）、礫、漆器（56～58）、木製品（59）が出土した。これらは、一カ所にまとまるものではなく、出土深度にもばらつきがある。珠洲は小破片で、第３層の上位から出土しており、漆器や木製品は第３層の中位付近から出土した。３点出土した漆器のうちの皿２点はほぼ完形品で、１点は碗の底部のみが残る。木製品は蓋で、一部が欠損するが遺存状況は比較的良好である。これに対して、珠洲は小破片のもので、前者と遺存状況が明瞭に異なる。また、木製品のやや上位で、大型の礫２点も出土した。１点は火を受けており、一部に強く煤が付着する。

ＳＥ313（図版11）　西側調査区中央南壁付近に位置する。平面形は長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍの楕円形である。壁面はわずかに狭まりながら深度1.1ｍで平坦な底部に至る。覆土は５層に分かれ、最下層にしまりが弱い黄褐色粘土層が厚く堆積し、この上面に細かく砕けた炭化物からなる層が厚さ４cmほど堆積する。土師器小片が少量出土した。

ＳＥ278（図版11）　西側調査区中央の南壁沿いに位置し、南半分が調査区外に出る。平面形は直径1.2ｍ前後の円形になるとみられる。断面は底部がやや丸みを帯びる逆三角形を呈し、深度は1.0ｍまでを確認した。覆土はおおむね水平に堆積し、最下層は黒褐色の粘質土が堆積し、しまりが強いものである。壁面

沿いに地山の崩落土とみられる層が薄く堆積するが、掘方に大きな崩落の痕跡は認められない。覆土の上半にも地山に由来するとみられる浅黄色シルトのブロックが多量に混じる。

ＳＥ334（図版11）　西側調査区のほぼ中央に位置する。平面形は直径1.2ｍの円形である。深さ0.7ｍで平坦面を設け、そのほぼ中央の直径0.6ｍが一段深くなり、深さ0.3ｍの水溜のようになる。覆土はおおむね水平に堆積し、5層に分かれる。最下部にはしまりがやや弱い暗灰色粘土が溜まり、その上位ににぶい黄色土ブロックが混じる黄褐色土などが堆積する。最上層は、灰色が強い灰黄褐色土が堆積する。珠洲片口鉢片、天目片（43）などが出土した。

ＳＥ467（図版11）　西側調査区西部に位置する。当調査区内で最も深い井戸である。平面形は長径1.0ｍ、短径0.8ｍの楕円形である。壁面はおおむね垂直に掘りこまれる。確認面から約1.5ｍの深さまで半截したが、床面を検出することができなかったため、全景写真の撮影が完了したのちに全体を断ち割って完掘した。最終的に2.0ｍの深さで底面を確認した。底面は中央が深くなる丸底である。覆土は第５層までを確認しており、上位は褐色土やにぶい黄褐色土からなる。確認面から0.6ｍの深さから腐植物を多量に含むしまりの弱い黒色粘土層となる。この黒色粘土層中の、検出面から1.0ｍ前後の深さのところから粉挽臼の上臼（80）と石鉢（82）が出土した。ほぼ同位置から瀬戸美濃丸皿（41・42）も出土した。粉挽臼は完形品であり、瀬戸美濃の１点も遺存状況が良好なものである。下位の断ち割りに際しては土層の観察はできなかったが、黒色粘土層が続いており、腐植物や一部が炭化した木材が多量に出土した。これらに明瞭な加工痕は認められなかった。井戸の廃棄にあたって、先に多量の炭化材等を投棄したものと想定される。

ＳＥ534（図版11）　西側調査区の中央やや西寄りに位置する。平面形は長径1.3ｍ、短径1.0ｍの楕円形で、壁面はおおむね垂直に下がり、深度1.4ｍで平坦な底部に至る。覆土は上位に褐灰色土や黄褐色土、中位に薄く炭化物層、下位に灰黄褐色粘土層が堆積する。覆土の堆積状況はＳＥ313に類似するものである。下層の粘土層から珠洲甕の底部破片が出土した。また、中位の壁面に木質遺物が張り付いていたが、腐植が著しく軟質であったため、記録の作成や取り上げが行えなかった。

ＳＥ79（図版12）　東側調査区の東壁沿いに位置し、一部が調査区外に広がる。平面形は直径1.4ｍの円形を呈するが、上位に深さ0.5ｍで断面碗型の土坑が掘りこまれているため、実際には直径1.0ｍ前後とみられる。壁面の上半は垂直気味で、下半はやや狭まりながら平坦な底部に至る。深度は1.3ｍである。覆土には地山土に由来するとみられるブロック状の浅黄色土が混じり、最下層に薄く暗灰黄色粘土が堆積する。他の井戸にみられる炭化物層や腐植物を多く含む黒色粘土層は確認できない。覆土中から土師器の小破片と鍛冶滓が少量出土した。

ＳＥ197（図版12）　ＳＥ79の南に隣接する。平面形は直径0.7ｍの円形である。壁面は垂直気味で深さ0.9ｍで平坦な底部に至る。覆土は底部まで大型ブロック状の浅黄色シルトが多量に混じる褐色土で、しまりが強いものである。ブロック状のシルトは下位で特に多くなる。隣接するＳＥ79と同様に炭化物層や黒色粘土層は認められず、掘削土で一時に埋め戻したような堆積状況を示している。遺物は出土していない。

ＳＥ２（図版12）　東側調査区南壁近くに位置する。上面でＳＰ１を検出したが、掘方を確認することはできず、断面図として記録した。ＳＥ２の平面形は、長径1.6ｍ、短径1.2ｍの楕円形で、壁面はやや狭まりながら丸底の底面に至る。深度は1.0ｍである。覆土は７層に分けられ、レンズ状に堆積する。上位は灰黄褐色土が主体で、下位は灰黄褐色の粘質土が主体となる。黒色粘土層や腐植物層は見られない。土師

器壷の底部片、須恵器有台杯底部片（4）、肥前陶器が出土したが、いずれも小破片である。

ＳＥ87（図版12）　東側調査区の中央に位置する。ＳＥ90を切る。ＳＥ87の平面形は直径1.6ｍの円形で、壁面は狭まりながら尖底気味の底面に至る。深度は1.4ｍである。覆土の大部分は褐色土が主体となり、底部付近に腐植物が主体の黒色粘土が少量堆積する。検出面と覆土上層から越前擂鉢（39）が出土し、他に中世土師器の小皿の小破片と鍛冶滓が出土した。

ＳＥ90（図版12）　ＳＥ87の西側に位置し、ＳＥ87に切られる。平面形は、直径1.1ｍの円形で、壁面は垂直に下がり、広く平坦な底部に至る。深さは0.9ｍである。覆土は７層に分けられ、１～５層は褐灰色土が主体となる。第６層は黄灰色粘土の周囲を黒色粘土が囲み、中央には多量の焼土塊が混じる。しまりはごく弱い。最下層にはしまりが強く精良な灰黄色粘土が薄く堆積する。井戸以外の用途が想定できるが、性格は不明である。また、遺物は出土していないため、時期も明確にできない。

ＳＥ145（図版12）　東側調査区の中央東寄りに位置する。上位をＳＫ76が掘りこむ。平面形は直径1.3ｍの円形で、壁面は垂直に下がり丸底の底部に至る。深度は1.3ｍである。覆土は上半に地山土に由来するとみられるブロック土を含む灰黄褐色土が堆積し、下半は粘土層が堆積する。下層の粘土層から珠洲片口鉢（32・34）が出土した。32は、最下層の黄灰色粘土層のほぼ上面で２点の破片が近接して出土した。ほぼ全形が残るが、口縁部から底部にかけての幅３cm程が欠損する。もう１点はこの上位のにぶい黄色土層から出土した体部破片である。

ＳＥ406（図版13）　西側調査区の西部に位置する。平面形は直径2.2ｍの円形で、壁面は垂直気味に下がって深度1.1ｍで広く平坦な底部に至る。ＳＰ404・ＳＰ405・ＳＰ407などと切り合いを持ち、これらに先行することを確認した。これ以外にも上面でピット１基をしたが、平面の記録は作成できず、東西層位図の第１・２層に記録した。覆土は細かく分類したが、大きくは３種に分けられる。最上層は灰黄褐色土やにぶい黄色土ブロックといった上位の地山層に由来するものが主体となる。中層は黒褐色土が主体で、堆積は薄い。下層は、全体的に灰色に近い色調の砂質シルトや粘土が主体となるが、下位にはやや濁った青灰色が主体の粘土層があり、地山層との判別が困難なものであった。平面規模に対して深度が浅く、水溜などの施設を設けないことから、井戸以外の用途も想定されるが性格は不明である。また、遺物も出土しなかったため時期も特定することができなかった。

ＳＥ376（図版13）　西側調査区の西部、ＳＥ406の南東に位置する。形態はＳＥ406に似るが、直径は1.6ｍ、深度1.0ｍとやや小型である。覆土は３層に大別できる。最上層はしまりが強い灰黄褐色土が全体の半分程度まで堆積する。その下位に浅黄色粘土が主体の層があり、最下層は黄灰色等の灰色を強く帯びる粘土層が堆積する。また、黒褐色の粘土層が薄く点在するように堆積する。出土遺物には砥石（79）が1点あるだけで、時期を特定することはできなかった。周囲の柱穴と切り合いをもち、ＳＰ374に壊され、ＳＢ８の柱穴であるＳＰ383を壊している。

ＳＥ365（図版14）　西側調査区の西部、南壁沿いに位置し、一部が調査区外へ続く。ＳＥ406・ＳＥ376に形態が似るが、前者に比べると深度が浅く、扁平な形態である。平面形は、直径２ｍの円形で、垂直気味の壁面が深度0.6ｍで広く平坦な底部に至る。東側は撹乱とＳＫ367に切られ、西側でＳＢ８の柱穴であるＳＰ368を切る。覆土は大きく２層に分けられる。上層はにぶい黄褐色土が主体で、下層は大きめの灰黄色土ブロックが多く混じる黄褐色土が主体である。前の２基と異なり黒褐色土層は確認できない。覆土中から珠洲片口鉢、中世土師器皿（40）、須恵器無台杯（10）などが出土したが、小破片や摩耗が著しいものである。

3）土坑

ＳＫ235（図版14）　西側調査区の東部に位置する。南は調査区外へ続き、北は旧別山川の河道に没する。東西の最大幅は2.8ｍ、南北方向は3.5ｍを確認した。東西方向の断面形態は浅い皿状で、壁面は緩やかな弧を描いて立ち上がる。深さは0.3ｍである。土層図中の上位層は後世の遺構の覆土であり、ＳＫ235の覆土は３層に分けられ、レンズ状に堆積する。しかし、土質に大きな違いは認められず、全体的に黄褐色土が主体となる。覆土中の炭化物は少量である。底面の平坦面は広く、底面でピットも検出された。竪穴状遺構といった性格も想定された。しかし、ピットは西側の壁面沿いに限られたこと、覆土に炭化物がほとんど見られなかった。ここでは、土坑としたが、南北方向の溝の可能性がある。

ＳＫ165（図版15）　東側調査区の中央やや北側に位置する。平面形態は東西5.2ｍ、南北3.7ｍの長方形で、北側は旧別山川の河道に接している。南側の壁面は直線的に急角度で0.8ｍ立ち上がる。東側はやや広い平坦面を階段状に３段設けられる。西側の掘方は不明瞭であったが、おおむね東側と同様に平坦面を持つ段を設けながら立ち上がっている。最深部の床面は、平面形態は一辺3.5ｍのおおむね正方形となる。床面に柱穴や土坑は確認されなかった。覆土はにぶい黄褐色土や暗灰黄色土からなる北側は旧別山川により削られているため、壁面の立ち上がりが存在したかは不明である。覆土中からは肥前磁器の小片や土器片が少量出土したのみである。性格は不明であるが、旧別山川の流路に接しており、この遺構の周囲では井戸等が検出されないことから、居住に関わる遺構とは想定しにくい。河道と何らかの関わりをもった性格を想定する。

ＳＫ119（図版15）　東側調査区中央のやや西に位置する。直径1.5ｍ前後のおおむね円形の黒褐色土が検出され、井戸を想定して調査を開始したが、深さ0.2ｍで底面に達した。断面形態は浅い皿状で、底面には細かい凹凸が点在する。覆土は黒褐色土が主体の単層で、地山土の小ブロックが少量混じる。珠洲壺の体部破片が出土した。ＳＰ146は、ＳＫ119の検出時には確認できなかったもので、ＳＫ119に先行する。

ＳＫ644・ＳＫ645（図版15）　西側調査区中央のやや東に位置する。ＳＫ644の平面形は長軸0.8ｍ、短軸0.6ｍの南北にやや長い隅丸方形である。壁面はやや狭まりながら深さ0.7ｍで平坦な底部に至る。覆土は２層に分かれ、上層は暗灰黄色、下層は灰色の粘質土である。炭化物はほとんど見られない。ＳＫ645の平面形は長軸1.3ｍ、短軸0.7ｍの東西に長い隅丸方形である。壁面は緩い弧を描き、深さ0.2ｍで広く平坦な底部に至る。覆土は褐色土に明黄褐色土ブロックが少量混じり、炭化物が含まれる。ＳＫ645埋没後にＳＫ644が掘られる。

ＳＰ345・ＳＫ641（図版15）　西側調査区のほぼ中央に位置する。ＳＫ641のほぼ中央をＳＰ345が掘りこんでいる。ＳＰ345の平面形は一辺0.5ｍの隅丸方形である。壁面はおおむね垂直で、深さ0.4ｍで平坦な底部に至り、西側壁面沿いに径0.3ｍ、深さ0.1ｍの小ピットを持つ。覆土はおおむね水平に堆積し、中層に灰黄色土ブロック主体層が形成され、小ピットにはしまりの弱い黄灰色粘土が堆積する。ＳＫ641はＳＰ345に先行するもので、長軸0.9ｍ、短軸0.6ｍの東西に長い楕円形を呈する。西側の壁面は垂直に下がり、深さは0.4ｍとなる。東側の壁面は弧を描く。覆土は黄褐色土とにぶい黄色土がまだらに混じる。ＳＰ345は柱穴の可能性が高いと想定して類似する柱穴の検出に努めたが、同様のものを確認することはできなかった。

ＳＫ67・ＳＫ68（図版16）　東側調査区の中央やや南に位置し、ＳＫ67がＳＫ68より新しい。ＳＫ67の平面形は長軸0.7ｍ、短軸0.6ｍの楕円形で、深さは0.3ｍである。ＳＫ68の平面形は長軸0.8ｍ、短軸0.6ｍ

の楕円形で、深さは0.4ｍである。両者とも下層に薄く粘質土が堆積する。

4）ピット

ピットは全体で541基を検出した。そのうち、掘立柱建物や柵の復元ができたものは97基であり、その他のものは建物などの構成や性格が不明のものである。一部は根跡の攪乱もあると思われる。

ピットは形態や規模の特徴から大きく三種に分けられる。一種目は直径0.2ｍ～0.3ｍ程度の小規模なもので、ピットのおよそ半数を占める。深さは0.1ｍ～0.3ｍのものが大半で、覆土は褐灰色土や灰褐色土、暗褐色土などがある。

二種目は、直径0.5ｍ前後、深度0.5ｍ前後のやや大型のものである。ＳＰ95・96・132・296・304・316（図版16）などがある。覆土は水平に堆積しているものが多く、地山土に似るブロックが多量に混じるものが多い。柱痕を確認できたものは少ない。

三種目は、平面形が直径0.7ｍ前後の円形か楕円形で、深さが0.4ｍ前後のものである。底部は丸みを持つ。ＳＰ263・400・410（図版16）では柱痕を確認した。底部の中央に幅15㎝前後の柱痕を認められる。上部を掘りこんだ痕跡があることから、柱の抜き取り痕と想定する。ＳＰ400は、大部分がＳＰ399に壊されるが、細い柱痕が検出面から底面に至っている。ＳＰ263では肥前系陶器の小片が出土した。

5）溝

溝は全体で14基を検出した。溝には明治時代の土地更正図の区割りや道に一致するものがある。覆土は灰色を基調とした砂混じりのシルトが主体である。これらの溝の年代を特定できる遺物は出土していないが、他の井戸や土坑、ピット等を切っている。また、復元された掘立柱建物や柵もこれを横切っており、同時に存在したとは考えられない。明治期に残る区割りであることから、当遺跡の集落の最終段階が廃絶した後に作られたものと想定する。

これに対し、ＳＤ493は上面に多数のピット等が掘られ、全体の中でも古い時期の遺構であることがわかる。この溝は西側調査区のほぼ中央に位置し、西南西から東北東におおむね直線に通るものである。覆土は地山土との識別が困難な部分が多いが、一部では赤褐色の粗砂が主体となる部分もある。粗砂以外の部分では掘方が不明瞭であった。全体的には、壁面や底面に凹凸が多く、深さも一定ではない。東側では最大幅0.9ｍ、深さ0.2ｍ前後となるが、西側では幅0.2ｍ、深さは数㎝程度となる。また、途中で溝が極端に浅くなり途切れる部分もあった。東端も徐々に浅くなって消失しており、溝の両端部は不明瞭である。これらを一連の溝とした場合、確認できた全長は21.9ｍとなる。全体的に覆土中に炭化物はほとんど認められない。覆土中から土師器、鍛冶滓がまとまって出土した。西半部では溝が浅くなっていることも影響しているであろうが、遺物の大部分は溝の東半部で出土した。特に東端部付近ではまとまって出土している。

V 遺　物

1　遺物の概要

本遺跡から出土した遺物には、土器・陶磁器類をはじめ、漆器、木製遺物、金属製品、石製品、製鉄関連遺物がある。包含層がほとんど消失しているため、大部分は遺構覆土から出土したものである。遺物の時代は古墳時代から近世まで確認できる。

時代毎の出土量では、古墳時代は少なく、古代から近世のものがやや多い。しかし全体的に出土量は少ない。古墳時代のものは、小破片で摩耗が激しいものばかりである。古代のものには須恵器と土師器があり、その多くはＳＤ493から出土した。他の遺構から出土したものも含め、小破片となったものが多い。中世から近世のものには、土師器、珠洲、越前、瀬戸美濃、肥前系陶磁器、青花がある。井戸から出土したものが多いが、柱穴や土坑からも若干出土している。近世の陶磁器は、旧別山川の埋め立て土からも出土した。

漆器は３点あり、全てＳＥ279から出土した。木製遺物には桶、蓋、用途不明の部材、柱根がある。柱根以外はいずれも井戸から出土したものである。石製品は砥石、粉挽臼、石鉢がある。鉄製品は用途不明な金属片の他に鋸身が１点ある。製鉄関連遺物はいずれも鍛冶滓で、多くはＳＤ493から出土したものである。

2　土器・陶磁器

1）古墳時代

いずれも土師器で、小破片である。３点を図示した。１・３はＳＫ165から、２はＳＥ365から出土した。１は有段口縁の壺の口縁部とみられる。口縁端部は欠損しており、器面も劣化が著しい。２・３は甕の口縁部破片である。口縁部が緩やかに外反し、端部は丸く収まる。これらも表面や破損部の摩耗が著しい。いずれも後世の遺物を含む遺構から出土した。当期の遺物が少ないことなどを考慮すると、この時期の集落が今回の調査区の近傍にあったことが想定される。地理的には若干離れるものの、別山川左岸には多くの古墳時代の遺跡が分布している。黒部古屋敷遺跡周辺でも未知の集落跡が存在することが想定される。

2）古代

須恵器と土師器がある。須恵器では有台杯・無台杯・甕を、土師器は有台皿と柱状高台皿の他に無高台の底部がある。皿か碗かは判然としないものであるが、ここでは無台皿とする。古墳時代と同様に、破片となったものが多く、全形をうかがい知れるものは少ない。ＳＤ493からは土師器がまとまって出土しており、他に須恵器も数点出土した。その他のものは後世の遺構に混入したとみられるものが大部分である。

ａ．須恵器（４～14）

有台杯2点、無台杯５点、甕４点を図示した。有台杯はいずれも底部の破片である。４はやや幅が広く内屈する高台を持つ。５の高台は細く垂下する。外底面に回転糸切りとみられる痕跡が認められるが、小

破片で摩耗しているため判然としない。６は無台杯の口縁部の小片で、口径12cm前後に復元できる。７～10は無台杯の底部破片である。７は焼成が良好で、暗青灰色を呈し、胎土に微小な白色粒子を多く含むものである。佐渡小泊窯跡群産とみられる。８は焼成がやや軟質なうえ、二次焼成により器表が劣化している。胎土に長石と石英を含む。９は底部から体部下半の小破片で、灰白色を呈する。胎土に少量の小礫を含む。焼成は良好である。10も灰白色を呈するが、胎土に多量の小礫を含むもので、破損部の摩耗が著しい。11～14は甕の体部破片である。13の叩き具痕は幅が広い平行文で、打ち込みが深い。当て具痕は放射状である。胎土はやや粗く、小礫の他に長石や海綿骨針を含む。焼成は硬質であるが、内面の還元が不十分でにぶい褐色を呈する。他の３点の叩き具痕は擬格子で、当て具痕は同心円である。胎土は緻密で白色粒子を多く含むなど共通した特徴を有する。

b．土師器（15～30）

有台皿５点、無台皿６点、柱状高台皿５点を図示した。15は口縁部の小片で、口径の復元が困難なものである。胎土に砂を多く含み、褐色土粒や雲母も多く混ざる。明褐色を呈する。高台を持つ底部の16に特徴が似ていることから、同一個体である可能性が高い。有台皿はいずれも底部が厚く、高台は大きく広がる。無台皿は、全形がわかるもの１点の他は、いずれも底部の破片である。25は口縁部が内湾し、口縁部中位に段を有する。底部破片は、底部径が５cm以下の小型のものと、６cm台の大型のものに分けられる。27～30は柱状高台皿である。29を除き、高台はあまり発達せず、低めのものである。27・28は内底面中央に窪みを有する。29は高台の下端がつぶれたように外側に広がり、体部は内湾気味に大きく広がる。30は他に比べて高台径が大きい。体部は外反して大きく開く。焼成は軟質なものが多く、破断面も摩耗しているものが多数である。胎土に砂や礫などの混入物が多い。また、成形や調整は粗雑なものが多い。

３）中世・近世

時期が確認できたものは、おおむね18世紀前半頃までのものである。珠洲・越前・土師器・瀬戸美濃・肥前系陶磁器・青花がある。肥前系の陶磁器が最も多く、珠洲がこれに次ぐ。井戸から出土したものが多いが、小破片のものはピットや土坑からも出土している。遺物の分布状況を見ると、東側調査区に比べて西側調査区の方が多いが、西地区では小破片となったものが多い。これに対し、東側調査区では、ＳＥ87とＳＥ145では比較的残存状況が良好なものが出土した。以下、種類ごとに概観する。

a．珠洲（31～38）

片口鉢・壷・甕がある。片口鉢は５点を図示した。口縁部が残るものは31と32である。いずれも口縁端部が内傾する。31は小片のため、口径は不明確だが、25cm前後に復元した。32はＳＥ145の床面付近から出土したもので、口縁部から底部にかけて幅３cm程度を欠損するほかは全形が残る。口径21.7cm、底径10.8cm、器高8.2cmである。底部中央に直径４cmほどの穴が開いている。内面は摩耗が著しく、卸目の大部分がすり減って消えている。底部の穴は意図的にあけられたものではなく、使用により底部が劣化して破損したものとみられる。口縁部の形態から、2点とも珠洲編年［吉岡1994］のⅤ期とみる。33～35も内面が著しく摩耗している。胎土が粗く、５mm前後の小礫を多く含む。口縁部を欠くため時期を明確にしがたいが、Ⅴ期以降のものとみる。壷・甕は、体部か底部の破片で、口縁部を残すものは出土していない。37の叩き目は細密な平行文だが、打ち込みは浅い。36・38の叩き目は幅の広い平行文である。これらもⅤ期のものと想定する。

b．越前（39）

ＳＥ87から擂鉢が出土した。接合しない破片もあるが、全て同一の個体とみられる。底部は縁辺がわずかに残り、体部は全体の６分の１程度が残る。口径34cm、底径12.8cm、器高12cmに復元した。口縁部内面下位に段ができる。卸目は幅３cmに10目のものを放射状に16条施す。外面は、上位のロクロナデは丁寧だが、下半は凹凸が顕著で、下端付近は粘土がつぶれた痕跡がみられる。胎土はやや粗く、径２mm程度の礫がやや多く見られる。木村氏の編年［木村2008］のⅤ-１期とみられる。

c．土師器（40）

ＳＫ365から手捏ね成形の皿が１点出土した。中世後期の京都系土師器皿である。口縁部は全周の４分の１が残り、底部は縁辺のごく一部が残る。外面の口縁部下位に横ナデによるわずかな窪みが巡る。口縁端部はやや外側に開いて丸く収まる。煤の付着は見られない。15世紀後半から16世紀前半のものとみられる。

d．瀬戸美濃（41～44）

丸皿が２点、天目が２点出土した。丸皿は２点ともＳＥ467から出土したものである。41は丸皿の口縁部の小片で、内外面に灰釉が施される。胎土は粗い。42も丸皿で、口縁部の３分の１程度を欠損する。口径9.9cm、底径5.3cm、器高2.5cmである。口縁部は内湾し、端部がやや肥厚する。高台は逆三角形で小さなものである。胎土は緻密で灰色を呈し、径１mmから２mm程度の白色の礫が少量混じる。全面に灰釉が施されるが、外底面には焼き台の痕跡とみられる円形の露胎部分がある。また、畳付けの大部分では使用により、釉が剥がれている。43・44は天目の口縁部破片である。43はＳＥ334から、44はＳＫ377の上面から出土した。口縁部下位がくびれ、端部はわずかに外反する。42は大窯３段階に位置づけられよう。41・43・44は口縁部の小破片のため明確にしがたいが、大窯２～３段階とみられる。

e．青花（45）

ＳＰ621の掘方埋土から出土した。端反りの口縁部を持つ皿である。外面は上から界線、牡丹唐草文、界線を描き、内面は口縁部下位に界線、見込みに十字花文を描くもので、小野氏の分類の皿B_1Ⅵ類である［小野1982］。15世紀後半から16世紀前葉に位置づけられる。

f．肥前（46～55）

小破片も合わせると比較的多くが出土したが、図示しえたものは10点である。46・47は磁器碗の小破片である。46はＳＰ292から、47はＳＫ165から出土したもので、いずれも18世紀頃のものとみられる。48は波佐見焼磁器の皿である。焼成不良で胎土は明褐色に発色する。内面は、見込みに蛇の目釉剥ぎを行い、体部下位に二重圏線、体部に草花文、口縁部に圏線を描く。外面は体部下半が露胎である。波佐見編年のⅤ-１期に位置づけられる。49～52は陶器の皿である。49は見込みを蛇の目釉剥ぎする。外面はロクロ削りが行われ、体部中位より下位は露胎である。50は口縁部の小破片で、内面から外面口縁部上位に銅緑釉が、外面体部には無色釉がかかる。51は畳付けを除く全面にやや緑がかった灰白色の釉がかかる京焼風の碗である。52は内面に鉄釉が、外面は白色の釉がかかり、高台は露胎である。53は碗で、褐色の胎土に無色釉がかかる。50はＳＰ262から出土したもので、肥前Ⅳ期とみる。他はいずれも旧別山川の埋め立て土から出土したもので、52が肥前Ⅱ期、他は肥前Ⅳ期とみられる。54・55は陶器の擂鉢である。54は口縁部に鉄釉がかかり、内面にごく細い筋の卸目を施す。口縁端部は外側に巻き込んでおさめる。55は口縁端部が内屈するもので、口縁部に鉄釉をかける。2点とも旧別山川の埋め立て土から出土したもので、いずれも肥前Ⅱ期とみられる。

3　漆器

漆器は３点出土した。いずれもＳＥ297の下層から出土したものである。皿２点と、やや大型の底部で椀とみられるもの１点である。塗膜の分析等は行っていないが、いずれも渋下地とみられる。全て横木取りである。56は口径7.9cm、底径5.5cm、器高2.0cmである。高台からその内部は黒色系漆で、他は内外とも赤色漆である。外底面の黒色系漆の上に赤色漆で文様を描く。高台は小さく、外側に開くものである。57は口径9.4cm、底径6.3cm、器高2.9cmである。塗膜の剥離が著しいが、内赤外黒色系漆とみられる。内面の赤色漆は大部分が剥落している。外面体部に赤色漆で文様が描かれているが、これも大部分が剥落しているため、模様は不明である。高台の形態は56と同様である。58は底径8.3cmと他の２点に比べて大型だが、大部分が欠損して底部のみが残存する。高台も付け根部分から欠損しており、体部は見込みの外縁部分から欠損する。見込み中央に赤色漆が残る。外面は、高台の外面と高台内側に黒色系漆が塗られる。内赤外黒色系漆の椀であったとみられる。皿２点はほぼ全形が残っていたが、この椀の欠損した部分の破片は確認できなかった。

4　木製品

用途が判別できるものは蓋、籠物結桶、柱があるが、大部分は用途不明のものである。15点を図示した。59はＳＥ279から出土した蓋で、５分の１程度を欠損する。正円とはならず、隅丸方形に近い。中央に径１cmの穴が開く。60は円形板の一部で、中央付近に径２mmの穴が２個開く。61はＳＥ467の黒色粘土層からまとまって出土した籠物結桶の部材である。籠は消失しており、各部材が分離した状態で出土したものを復元実測した。底板は３枚の板をつなげて、直径20.9cmの円形とする。側板は15枚あるが、それぞれの幅は不揃いで、長さにも若干のばらつきがある。側板の外面に籠の痕跡が巡る。62～64も籠物結桶の側板である。62は上部に径３mmの穴が開けられる。63は最も幅が広いもので、6.4cmである。これらの外面にも籠の痕跡が残り、内面には底板のあたりとみられるかすかな窪みも認められる。64は上部の大部分を欠損する。全面が炭化している。65～71は用途不明の部材である。65は幅2.4cm、厚さ0.7cmの板状のもので、先端を面取りしてとがらせている。片面はほぼ全面が、その裏面は先端部分が炭化する。67は厚さ0.5cmの薄い板材で、長さ16.1cm、幅5.0cmが残る。一端が強く炭化している。68は角材の一部とみられる。69は一端を丸く成形した板状の部材である。ホゾ穴が開けられ、この部分で折損している。片面が炭化している。70は断面円形の棒状部材である。図の上部は折損しており、下部は切断されている。71は角材に長方形の穴を同一方向に向けて３カ所開けられ、この穴に割れ目を入れたホゾが挿される。またこの穴に直行する抉りを１カ所に設ける。図左側の先端は曲面に成形されて端部を尖らせる。図右側は折損している。用途は不明である。72・73は柱根である。72の断面は一辺18cmの正方形の芯持ち材である。芯は中心からはずれている。高さ27cm が残存する。底面には鋸によるとみられる切断痕が残る。73は大部分が滅失しているが、出土時は平面正方形の緩い粘土に囲まれていた（図版28）。柱痕が腐食した部分に流れ込んだ粘土とみられ、72と同様の正方形の柱が据えられていたことを示している。

5　金属製品

74は鋸の一部である。鋸身の厚さは約３mm、長さ17.6cm、幅4.2cmが残る。刃部はわずかに弧を描いていることから、木の葉型の鋸身とみられる。素歯でアサリがある。75は棒状、76は板状の鉄製品である。76は薄い金属板を途中で折り曲げ、２枚が重なっている。77は銭貨でＳＫ523の上面で出土した。３枚が重なり、錆で貼りついている。上面の一枚は「元豊通寶」で初鋳は1078年である。

6　石製品

78・79は砥石である。78は図の上部が折損している。断面は正方形で、使用面は図の表裏２面である。79は図の下部が折損する。上部に紐を通すためのものとみられる穴が開けられる。石材は78が頁岩、79が凝灰岩である。80・81は粉挽臼の上臼である。80は完形品で、臼面の溝は８分画である。供給穴側の側面に持ち手を設け、対面に挽木穴が付く。81は上臼の縁部の小破片である。82は石鉢の破片である。口径28cm、底径23cm、器高15cmに復元される。底部は安定した平底で、中央部が窪んでいる。口縁端部は水平で、内面は緩やかに弧を描いて見込みに至る。内面に焦げが付着する。３点とも石材は安山岩である。

7　製鉄関連遺物（83 ～ 93）

鍛冶滓が出土した。多くはＳＤ493からのものである。92・93は碗型鍛冶滓の一部である。他に焼土粒などは出土しているが、炉壁や羽口は確認できない。

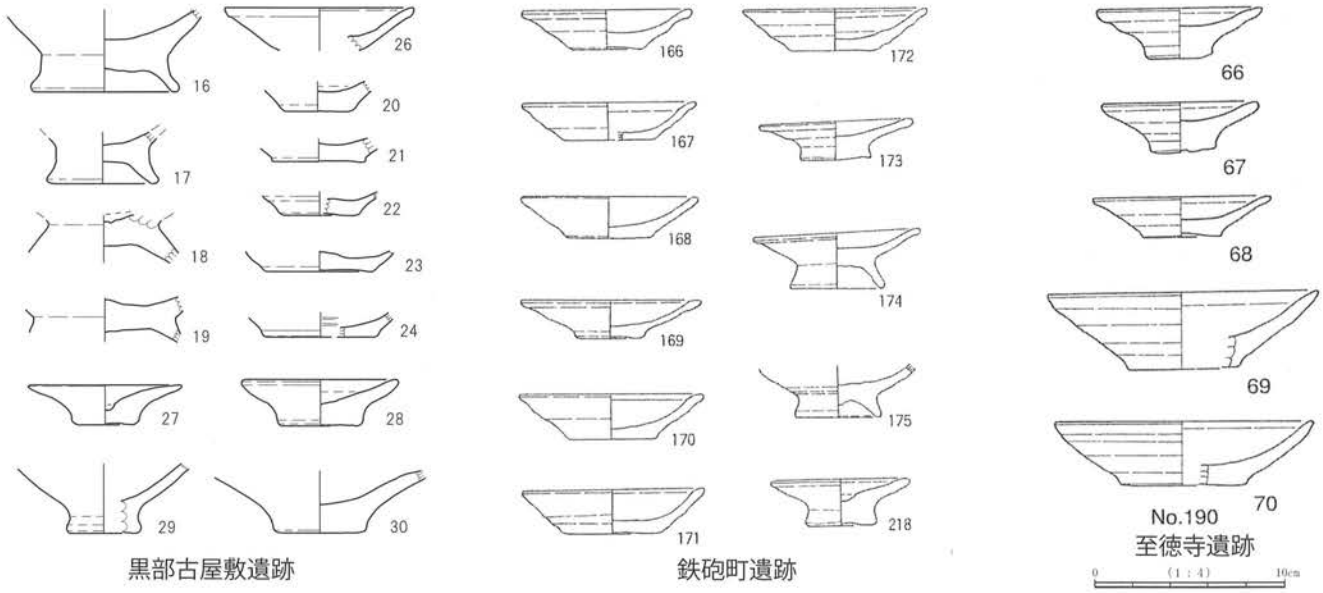
Ⅵ 総　括

1　古代

黒部古屋敷遺跡の発掘調査では、ＳＤ493からまとまって古代の遺物が出土した。他の遺構からも当期の遺物が出土しているが、後世の遺構に混入したとみられる小破片のものが多く、遺構の時期を決定できる資料となり得るものはほとんどない。ここでは、ＳＤ493から出土した遺物の年代についてまとめる。

ＳＤ493から出土したもので、図示しえたものは須恵器１点、土師器15点である。須恵器は甕の体部破片であり、時期の比定は困難である。ただし、叩き目痕と当て具痕が特徴的なもので、周辺の９～10世紀代の集落跡では確認されていないものである。土師器は有台皿、無台皿、柱状高台皿がある。全形をうかがい知れるものは少ないが、特徴についてまとめる。有台皿は、口縁部の小破片が１点、底部破片が4点である。底部の厚さは１～1.5cmと厚く、これに外側に大きく開く長い高台が付く。無台皿は底部破片が4点である。底部径からは大小の２法量があることが想定される。柱状高台皿は、高台はそれほど発達せず、低めのものである。これらの資料の類例は上越市鉄砲町遺跡［新潟県教育委員会他1995］や至徳寺遺跡［笹沢他2001・上越市史専門委員会考古部会2003］に求めることができる。

鉄砲町遺跡では、ＳＥ31・ＳＥ54の資料があげられる。ＳＥ31では柱状高台皿が出土している。口径7.3cm、器高2.5cmで、内底面中央に指頭大の窪みを有する。内面の窪みは当遺跡の27・28でも確認できる。ＳＥ54では、小皿・柱状高台皿・有台皿がある。柱状高台皿の体部は直線的に開くもので、当遺跡のものと若干異なる。有台皿の底部は１cm以上の厚みがあり、当遺跡出土のものに似る。至徳寺遺跡で有台皿・無台皿・柱状高台皿がまとまって出土した遺構にＳＫ107がある。有台皿の底部は厚く、柱状高台皿の高台の高さは器高の半分程度である。この他の遺構からも同様の形態の資料は多く出土している。



第６図　黒部古屋敷遺跡・至徳寺遺跡・鉄砲町遺跡の古代土師器

これらの事例と比べると、黒部古屋敷遺跡ＳＤ493から出土した土器群は、形態や組成において鉄砲町遺跡や至徳寺遺跡のものと同様の特徴を持っており、時期的にある程度のまとまりがあることが想定できる。鉄砲町遺跡の資料は11世紀後半に、至徳寺遺跡の資料は11世紀末葉頃の時期が想定されており、黒部古屋敷遺跡ＳＤ493の資料も11世紀後半から末葉に位置づけられよう。当遺跡では、この時期のまとまった資料は他に確認できず、集落の様相は不明である。ＳＤ493からは鍛冶滓もまとまって出土しており、他の遺構などからも少量ではあるが鍛冶滓や焼土粒が出土している。この時期に鍛冶に関わる集落が周囲に存在していたことが想定される。しかし、出土した土器類が少なく、時期も限定されることから、ごく短期間の小規模なものであったと考えられる。ただし、柏崎平野北部ではこの時期の集落跡は見つかっておらず、当期の資料もほとんど見られない。資料の空白期の一部を埋める資料であり、古代から中世への集落の変遷を検討するうえで重要な資料である。今後の資料の蓄積に期待したい。

2　中世～近世

1）遺物の時期

黒部古屋敷遺跡の発掘調査で出土した中世から近世の土器類には、珠洲・越前・土師器・瀬戸美濃・青花・肥前陶磁器がある。遺構からまとまって出土するようなものはほとんどなく、大部分は小片となったものである。それぞれの時期について再度確認する。

珠洲は、片口鉢と壷・甕の底体部破片がある。片口鉢の胎土はやや粗く、白色の礫を多量に含んでいる。口縁部は２点あり、いずれも端部が内傾する。壷・甕の叩打痕は、37のものは原体の幅は狭く細密であるが打ち込みが浅い。36・38は粗い原体を用い、内面の当て具痕はナデにより不明瞭である。いずれもＶ期頃のものと想定した。

越前擂鉢は、口縁上面が水平で内側に沈線が巡り、木村氏の編年のＶ-1期に位置付けた。瀬戸美濃は天目と丸皿が各２点ある。42の丸皿は体部がやや膨らみ気味に立ち上がるもので、大窯第３段階に位置づけた。肥前陶磁器は肥前Ⅱ期が３点、Ⅳ期が６点、同Ⅳ期とほぼ同時期の波佐見Ｖ-１期を1点確認した。

これらの各年代は、珠洲Ｖ期が14世紀後半から15世紀前半、越前Ｖ-1期が15世紀末から16世紀初頭、大窯第３段階が16世紀代、肥前Ⅱ期が17世紀前葉でⅣ期が17世紀末から18世紀前半頃が想定される。14世紀後半から18世紀前半頃までの長期間の資料を確認できたこととなる。しかし、出土遺物が少ないことから、集落が継続的に存在していたとは考えにくい。また、遺物の出土量が少ないうえに、小破片となったものが大部分を占めている。このため、遺構の時期を特定することは難しく、時期毎の遺構の変遷を検討することは困難である。

2）遺構の時期

多くの遺構は時期の特定が困難ではあるが、ここで各時期の遺物の分布を確認し、若干ではあるが遺構の時期を確認する。

珠洲はＳＥ145・ＳＫ119・ＳＥ279・ＳＫ304・ＳＥ534・ＳＰ447から出土したが、ＳＥ145以外のものはいずれも小破片である。調査区の全域で出土している。越前はＳＥ87の他、ＳＰ151から擂鉢の小破片が出土しており、東側調査区に限られる。時期的に近いとみられる瀬戸美濃はＳＥ334・ＳＫ377・ＳＥ467から、土師器皿はＳＥ365から出土しており、西側調査区の西半部にまとまる。肥前系陶磁器はＳＥ２、

ＳＫ165、ＳＡ４の柱穴であるＳＰ292からと、西側調査区北東部の旧別山川埋めたて土中から出土しており、東西の両調査区から出土している。

これらの中で、出土状況や共伴遺物などからいくつかの遺構の時期について検討したい。ＳＥ145は珠洲片口鉢２点が出土し、１点はほぼ全形が残るものである。両者とも、基底部上の粘土層のやや上位から出土したもので、32の残存状況が良好なことから、珠洲Ⅴ期に近い遺構であるとみる。ＳＥ79では珠洲２点が出土したが、いずれも小破片である。漆器３点、木製品蓋、鉄製品鋸身も出土した。漆器は内外赤色漆と内赤外黒色系漆の皿はほぼ全形が残る。木製品蓋は全体の8割程度が残存し、鋸身は大部分が腐食して欠損している。珠洲とその他のものでは残存状況が違うことから、埋没に至る過程が異なるものと想定する。赤色漆器が16世紀後半以降に農村にまで普及するとされており、高台の形態等も考慮すると、16世紀後半以降に位置づける。ＳＥ467では、瀬戸美濃丸皿２点、籠物結桶、粉引臼、石鉢等が出土した。丸皿の１点は口縁部の３分の１ほどを欠損するが、残存状況は良好なものである。粉挽臼は完形品で、石鉢は全体の２分の１程度が残る。籠物結桶は箍が消失するが、他の部材は全て残る。これらは第５層中位のほぼ同一カ所から出土しており、一括して廃棄されたものと考える。丸皿は16世紀代に位置づけられる。周辺の遺跡では、粉引臼は16世紀以降に出土量が増加しているため、共伴関係に齟齬はないと考えられ、ＳＥ467は16世紀代のものと捉えられるだろう。ＳＡ４の柱穴であるＳＰ262からは肥前Ⅳ期の陶器の小破片が出土している。これに近い時期のものと想定する。ＳＤ283は、明治23年調製の土地更正図の地割にほぼ合致する。ＳＡ４と交差するものであることから、更正図の地割の成立は、ＳＡ４廃絶後であり、18世紀後半以後であると考えられる。

ＳＥ365・ＳＥ376・ＳＥ406では、遺物はほとんど出土していないが、掘方平面が直径２ｍ前後の円形で、深度が１ｍ前後、平坦な広い床面を持つもので共通した特徴を有する。ＳＥ365から16世紀代の土師器皿が、ＳＥ376を切るＳＫ377から瀬戸美濃大窯の天目が出土している。肥前陶磁器が混入しないことから、16世紀代に位置づけておく。

以上、遺構から出土した遺物が少ないため、大部分の遺構は時期を特定することができなかった。

３）集落の変遷

ここまで、黒部古屋敷遺跡の発掘調査で出土した中世から近世の遺物の所属時期について確認し、遺構の時期の検討を行った。しかし、出土遺物が少ないことから、大部分の遺構は所属時期が不明なままとなってしまった。最後に資料が少ないながらも、遺構の配置や遺物の分布などをもとに、中世以降の黒部古屋敷遺跡の集落の変遷を検討してみたい。

当遺跡で中世の遺物が明確に確認できるのは珠洲Ⅴ期の段階で、14世紀後葉から15世紀前半である。この時期に属する遺構はＳＥ145で、他には小破片が調査区全域で出土している。当期では珠洲以外の資料は確認できず、出土量も少ないことから、短期間の小規模な集落であったと想定する。

これに続く資料としては、時期的にやや差があるものの、16世紀代にあたる越前Ⅴ-1期と瀬戸美濃大窯第3段階がある。遺物は越前擂鉢、瀬戸美濃丸皿・天目、土師器皿、籠物結桶、粉挽臼、石鉢があり、当遺跡の中では最も種類が豊富である。大型の井戸が多く確認され、やや長期に渡る生活が営まれたことが想定される。その後、17世紀前葉にあたる肥前Ⅱ期の陶磁器が少量出土するが、いずれも旧別山川の埋めたて土中から出土したもので、遺構の状況は不明である。17世紀後葉から18世紀代にあたる肥前Ⅳ期、波佐見Ⅴ-1期の陶磁器が柱穴や旧別山川埋立土などから出土する。また、ＳＥ279から出土した漆器も17世

紀以降のものとみられ、ここでは肥前系陶磁器に伴うものと考える。今回の調査では、これより新しい時期の遺物は確認されなかった。

3　黒部古屋敷遺跡の変遷

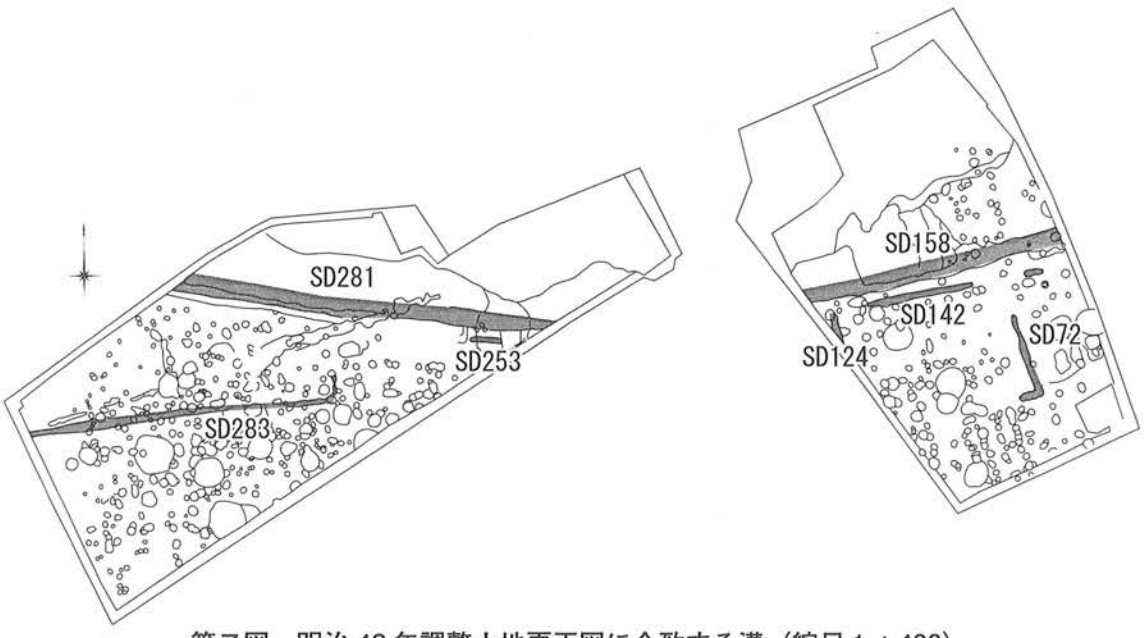
最後に黒部古屋敷遺跡の変遷を時代ごとにまとめる。

古墳時代　小破片となった土師器が少量確認できる。当期のものとみられる遺構は未確認である。調査区の南東にやや広い沖積地が続いていることから、周辺にこの時期の集落が存在していたものと考えられる。

古代　柏崎平野では9世紀頃から集落が増加するが、黒部古屋敷遺跡では集落が成立した様相は確認できない。遺物が少量出土していることから、周囲に当期の集落が成立していたことは想定できる。古代末期から中世初頭にあたる11世紀後半では、須恵器・土師器と鍛冶滓が溝からまとまって出土していることから、この時期に鍛冶に関わる集落が成立したと考えられる。しかし、この溝以外に当期の遺構を確認することはできなかった。当遺跡の周辺では、この時期の資料はほとんど確認されていない。ここに鍛冶関連遺物を伴う集落が成立したことは、周辺の製鉄関連遺跡の動向と合わせて検討する必要あるだろう。

中世　遺物の出土量からみて、15世紀代から断続的に集落が存在していたとみられる。各時期の集落は小規模なもので、ごく短期間のものであったのではないだろうか。しかし、各時期に井戸が存在しており、それぞれの時期に井戸を伴う住居が営まれていたことが想定できる。そして、18世紀前半より新しい資料は出土しなかった。

『西山町誌』「4　黒部誌」には、黒部は「天保検地書には戸数が四戸」で「もとは別山川の川岸にあったそうだ。今もそこを「ふるやしき」といっている」とある。この伝承がいつの時代のことを指し、どのような経緯で伝わったのかは明らかではなかった。しかし、今回の発掘調査で「ふるやしき」の地に集落が存在していたことが確認された。また、明治27年に調製された土地更正図の境界に合致する溝が検出された。この溝の一部が18世紀代の柵と交差していることから、この時期の集落が廃絶した後に区画の再編が行われたと考えられる。その後、この地から集落は移動していき、「ふるやしき」と呼ばれて現代に至ったものと考えられる。



第7図　明治42年調整土地更正図に合致する溝（縮尺1：400）

≪　引用・参考文献　≫

小野正敏　1982「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第 2 号　日本貿易陶磁研究会
柏崎市教育委員会　2001『柏崎町』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 38 集）
柏崎市教育委員会　2003『柏崎市の遺跡ⅩⅡ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 41 集）
柏崎市教育委員会　2010『坂田遺跡群Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 50 集）
柏崎市教育委員会　2008『柏崎市の遺跡ⅩⅦ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 54 集）
柏崎市教育委員会　2008『宝童寺遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 55 集）
柏崎市教育委員会　2009『坂田』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 56 集）
柏崎市教育委員会　2010『坂田遺跡群Ⅲ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 58 集）
柏崎市教育委員会　2012『柏崎市の遺跡 21』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 66 集）
柏崎市教育委員会　2013ａ『柏崎市の遺跡 別冊Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 70 集）
柏崎市教育委員会　2013ｂ『柏崎市の遺跡 22』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 71 集）
柏崎市教育委員会　2013ｃ『下境井』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 73 集）
柏崎平野団体研究グループ　1979「柏崎平野の地形発達史と下谷地遺跡周辺の地形」『北陸自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書　下谷地遺跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第 19）新潟県教育委員会
春日真美　1999　「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号　北陸古代土器研究会
春日真美　1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』　九州近世陶磁学会
木村孝一郎　2008「越前焼の編年研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
小林巖雄・飯川健勝・久保田喜裕・神蔵勝明・渡辺秀男・渡辺文雄 2008「中越地域西部の地形と地質」地学団体研究会新潟支部中越沖地震調査団編『柏崎・刈羽をおそった地震の被害と基盤－2007 年新潟県中越沖地震－』（地団研専報 57 号）　地学団体研究会
笹沢正史・水澤幸一　2001「伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半を中心として～」『上越市史研究』第 6 号　上越市史専門委員会
上越市史専門委員会考古部会　2003『上越市史叢書』８
鳴海忠夫　1992「刈羽郡西山町坂田の館跡－地積図と遺物から把握した中世館跡の一例－」『長岡郷土史』第 29 号　長岡郷土史研究会
新沢佳大　1990「諸藩領の成立と変遷」・「近世郷村と柏崎町の成立」市史編さん委員会編『柏崎市史』中巻　市史編さん室
新潟県教育委員会　1979『狐山塚群　国道 116 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』（新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 17）
新潟県教育委員会　1982『尾野内遺跡　芦ヶ埼砦跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第 30）
新潟県教育委員会　1983『内越遺跡　国道 116 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』（新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 33）
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団　1995『鉄砲町遺跡　北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅴ』（新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第 65 集）
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団　2002『箕輪遺跡Ⅰ　一般国道 8 号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第 109 集）
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団　2003『下沖北遺跡　一般国道 8 号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第 125 集）
新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団　2005『東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ　一般国道 8 号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 140 集）
西山町誌編纂委員会　1963『西山町誌』
西山町教育委員会　1991『二塚・甲田城跡発掘調査報告書』（西山町文化財調査報告書第 3 集）
西山町教育委員会　2001『井ノ町遺跡発掘調査報告書』（西山町文化財調査報告書第 6 集）
西山町教育委員会　2003『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』（西山町文化財調査報告書第 7 集）
藤澤良祐　2001「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通―研究の現状と課題―」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品―東アジア的視点から―』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
北陸中世考古学研究会　2007『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』
北陸中世土器研究会　1997『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』
水澤幸一　2005「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
村山教二　1990「中世における柏崎市域」市史編さん委員会編『柏崎市史』上巻　市史編さん室
八峠　興　2001「柱状高台考」『中世土器研究論集―中世土器研究会 20 周年記念論集―』中世土器研究会編
山本隆志　2008「高野山清浄心院『越後過去名簿』（写本）」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 9 号　新潟県立歴史博物館
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
四柳嘉章　1997「第 6 章第 3 節　北陸の中世漆器」『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会編
米沢　康　1976「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第 28 巻 5 号　信濃史学会
米沢　康　1980「大宝 2 年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第 32 巻 6 号　信濃史学会
和島村教育委員会　1994『八幡林遺跡』（和島村埋蔵文化財調査報告書第 3 集）

別表１　黒部古屋敷遺跡遺構観察表

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP1		42-68-ノ				褐灰色、灰黄褐色	2→1	図版12. SE2掘削中に消滅。	
SE2		42-68-ノ	150	120	113	灰黄褐色粘質土		図版12。東西の壁面上部は、一部崩落か。	須恵器有台杯(4)
SP3		42-68-ノ	20		14	暗褐	2-3		
SP4		43-68-オ					2→4	SE2掘削中に消滅。	
SP5		43-68-オ	削中に		16	暗褐	2→5	SE2掘削中に消滅。	
SP6		42-68-ノ	24		22	暗褐			
SP7		43-68-オ	28		19	暗褐・地山ブロック			
SP8		43-68-オ	24		16	暗褐	8-9		
SP9		43-68-オ	22		28	暗褐	8-9		
SK10		43-69-ア	57		15		10-213		
SP11		43-69-ア	35	37	27		11→196		
×12		43-69-ア	73		6				
SP13		43-69-ア	34	34	24	暗褐			
SP14		43-69-ア				黄褐	15→14		
SP15	SB2	43-69-ア	42	36	31	暗褐・黄褐ブロック	15→14・16		
SP16		43-68-オ				1:暗褐、2:褐灰	15→16		
SP17	SB1	43-69-ア	24	23	11	暗褐			
SP18		43-69-ア	28	25	35	暗褐		筒形	
SP19	SB1/SB2	43-69-ア	45	30	35	1:褐灰、2:灰砂		長楕円、椀型	
SP21	SB2	42-68-ネ	25		23	1:暗褐、2:灰色粘土		尖底	
SP23	SB3	43-68-エ	26		32	暗灰粘土		尖底	
SK24		43-68-オ	21		15	暗褐		椀型	
SP26	SB4	43-68-オ	18		13	暗褐		椀型	
SP28		43-68-エ	32		19				
SP30	SB1/SB3	43-68-オ	20		20	暗褐		筒形丸底	
SP31		43-68-オ	20		13	暗褐	31-32-33	椀型	
SP32		43-68-オ	20		20	暗褐	31-32-33	椀型	
SK33		43-68-コ	52		40	褐灰・黄褐ブロック・炭化物	31-32-33	筒形平底	
SP34		43-68-オ	48	30	22	暗褐		逆三角	
SP36		43-68-オ	22		10	暗褐		椀型	
SP37	SB4	43-69-ア	31		30	暗褐		筒形丸底	
SP38	SB3	43-69-ア			22	1:暗褐2:黄褐	208→38		
SP39		43-69-カ	45	22	28	1:暗褐、2:褐灰		ピット2基	
SP40	SB2	43-69-イ	22	22	40			筒形丸底	
SP41		43-69-キ	45	31	42			筒形平底	
SP42		43-69-キ							
SP44	SB2	43-69-カ	30	28	24	暗褐		尖底	
SP45		43-69-カ	44	30	40	暗褐		筒形丸底	
SP46		43-69-カ	26	25	14			椀型	
SK47		43-69-カ	70		29	1:褐灰、2:暗灰			
SP48	SB2	43-68-コ	30		15	暗褐		椀型	
SP49		43-68-コ	20		12	暗褐		椀型	
SP50		43-68-コ	42	36	26				
SP51		43-68-コ	35	28	20				
SP52		43-68-コ	23		17	暗褐		筒形丸底	
SP54	SB2	43-68-ケ	28		33	暗褐		筒形丸底	

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP56	SB1	43-68-エ	52		43	1:灰黄褐・炭少、2:褐・黄橙			
SP57	SB4	43-68-エ	30		20	暗褐・黄橙ブロック少			
SP58	SB2	43-68-エ	30		17	暗褐			
SP59		43-68-ウ	29		24				
SP60		43-68-ウ	35		20	褐灰	61→60	椀型	
SP61		43-68-ク	48		38	褐灰・炭	61→60	椀型	
SP62		43-68-ウ	42			褐灰・黄褐ブロック			
SP63		43-68-ク	40	24	29	1:灰黄褐、2:褐灰粘土			
SP64	SB1	43-68-ク	28		62	1:暗褐・炭、2:灰黄褐粘土			
SP65		43-68-ケ	27		18	暗褐			
SK67		43-68-コ	70	59	31	灰黄色砂質シルト	68→67	図版16	
SK68		43-68-ケ	82	68	49	暗灰黄色粘質土	69-68→67	図版16	
SP69		43-68-ケ	32		30	暗褐・炭少	68-69		
SK71		43-69-サ							
SD72		43-69-サ	428	41		灰		更正図の地割に一致する溝。L字型。	
SP74		43-69-シ	30	28	38	褐灰・炭少			
SK76		43-69-シ	116	70	27	灰黄褐色、黄褐色	145→76	図版12	
SK78		43-69-ツ	184	93	17		79-78-179		古代土器小片
SE79		43-69-ヌ	138		121	黒褐色粘質土	79-78	図版12	木製鍋蓋(59)・古代土器小片・鍛冶滓
SP84	SB1	43-68-ソ	30	27	24	1:暗褐、2:褐灰粘土			
SP85		43-68-ト	24		20	暗褐、黄褐ブロック			
SP86		43-68-ソ	32		40	灰褐・黄褐ブロック			
SE87		43-68-セ	162	157	152	灰黄褐色、黒褐色腐植物	90→87	図版12	越前擂鉢(39)・土師器小皿・鍛冶滓・溶着滓
SE90		43-68-ケ	116	110	90		87←90-91		焼土塊
SP91		43-68-セ	44		37	灰黄褐	90-91		
SP92		43-68-ク	48		12	暗褐			
SP93		43-68-ク	60		33	暗褐			
SP94		43-68-ク	15		8	暗褐			
SP95		43-68-ク	45		45	にぶい黄褐色	95→96	図版16	
SP96		43-68-キ	73	64	58	1:暗褐、2:にぶい黄橙ブロック	95→96	図版16	
SK97		43-68-シ	68		78		98→97		
SP98	SA2	43-68-シ	35		84		98→97		
SK100		43-68-ス	46	30	6				
SP101		43-68-ス	30		20		102→101		
SP102		43-68-ス	46		37		102→101		
SP104	SB1	43-68-ス	39		34	褐灰・黄褐ブロック	105→104		
SP105		43-68-ス	33		21	褐灰・黄褐シルトブロック	105→104		
SP106		43-68-ス	22		15	暗褐			
SP107		43-68-ス	46		38	暗褐			古代土師器甕頸部
SP108		43-68-ス	30		7	灰褐			
SP109		43-68-ス	20		9	暗褐			
SP110		43-68-ス	24		15	暗褐			
SP111		43-68-ス	20		16	暗褐			
SK112		43-68-セ	51	26	18	暗褐・黄橙ブロック			
SP113		?-?-?	24		16	暗褐・炭化物多			
SP114		43-68-セ	23		26	暗褐、黄褐・褐灰少		ピット2基	

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP115		43-68-セ	32		24				
SP116		43-68-テ	29		9				
SD117		43-68-ツ	74	26	10	灰黄褐・少炭化物			
SP118		43-68-ツ	19		16				
SK119		43-68-ツ	150	137	18	黒褐色	146→119	図版15	
SP120	SA2	43-68-チ	31		9	暗褐・黄橙シルトブロック少			
SP121		43-68-シ	19		8	暗褐			
SP122		43-68-チ	43		24	褐灰粘土・黄灰シルトブロック			
SP123		43-68-チ	30		10	褐灰シルト			
SD124		43-68-タ	116	37	24		124-125	南側は調査区外に続く。	
SP125		43-68-タ	40		23		124-125-126		
SP126	SA1	43-68-ナ	53		36		125-126		
SP127		43-68-ナ	24		13	1:暗褐、2:灰白砂質			
SP128		43-68-ナ	24		13	1:暗褐、2:灰白砂質・褐灰砂質			
SP129	SA2	43-68-ニ	38		44	暗褐・炭少			
SP130	SA1	43-68-ニ	43		14	1:暗褐・炭、2:暗褐・黄褐ブロック			
SD131		43-68-ニ	87	30	5		131-729		
SK132		43-68-ニ	65		44	灰黄褐色、黄灰色粘質土		図版16	
SP133		43-68-ニ	18		22	暗褐・灰白まだら			
SP134	SA1	43-68-ヌ	29		18	暗褐・灰白シルト少			
SP135		43-68-ツ	29		30				
SP136	SA1	43-68-ヌ	31		26				
SP137	SA1	43-68-ネ	30	30	42	暗褐			
SP138	SA1	43-68-ネ	28	28	28	暗褐			
SP139		43-68-ノ	28	28	32	暗褐			
SP141		43-68-ノ	42	32	22	暗褐			
SD142		43-68-ヌ	570	34	10			更正図の地割に一致する溝。	
SP143		43-68-ニ	20		15	暗褐			
SP144		44-68-エ	38		33	暗褐・炭多			
SE145		43-69-チ	136	117	135	暗灰黄色粘土	76→145	図版12	珠洲片口鉢(32・34)
SP146		43-68-ツ	58	52	42		146→119		
SP147		43-69-ニ	20	16	20	暗褐			
SP148		43-69-ニ	30	24	24	暗褐			
SP150		44-69-イ	30	28	23	暗褐・褐灰ブロック			
SP151	SA1	43-69-ニ	32	30	40	暗褐			須恵器無台杯・土器小片
SP152		44-69-ア	25		45	暗褐・炭	153→152		
SP153		44-69-ア	34		28	暗褐	153→152		
SP154		43-69-ナ	33	30	18	暗褐			
SP155	SA1	43-69-ナ	28	26	25	暗褐			
SP156		44-68-オ	36	28	28	暗褐		底部小ピット	
SP157		44-69-ア	30	27	23	暗褐			
SD158		44-68-オ	1390	100	15		160・165→158→159	更正図の道に一致。東西とも調査区外に続く。	
SK159		44-69-イ	192		20		201・158→159	北半分はSD158に切られる。	
SP160		44-69-キ	46	34	35	にぶい黄褐・褐灰・炭	160→158		
SP161		44-68-オ	30	30	23	暗褐			
SP162		44-68-エ	12	10	8			杭	

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP163		44-68-エ	14	14	30			杭	
SP164		44-68-エ	18	16	24			杭	
SK165		44-68-キ	521	392	86	灰黄褐色、にぶい黄褐色	165→158	図版14。別山川流路沿いのテラス状遺構。	土師器壺甕(1・3)・肥前磁器碗(47)
SP167		44-68-コ	30	24	8	褐灰			
SP168		44-68-コ	16	15	33			杭	
SP169		44-68-コ	28	26	37	褐灰		杭	
SP170		44-68-コ	26	20	11	褐			
SP171		44-68-ケ	28	22	15	褐			
SP172		44-68-コ	23	23	16	褐灰			
SK173		44-69-キ	95		49			東壁へ	
SP174		44-69-サ	30	23	32	暗褐・黄褐ブロック			
SP175		44-69-サ	23	23	25	暗褐			
SP176		44-69-サ	23	23	8	灰			
SP178		44-68-ソ	30	28	19	1:黄灰、2:黄褐			
SP179		44-68-ソ	30	30	12	褐・炭			
SP180		44-68-ソ	24	20	14	1:褐灰・炭、2:黄橙			
SP181		44-68-ソ	30	26	32			テラス	
SP182		44-68-コ	25	18	16	黒褐			
SP183		44-68-ケ	40	31	20	1:暗褐、2:褐			
SP185		44-68-ケ	23	20	13	1:褐灰、2:暗褐			
SP186		44-68-セ	21	20	8	暗褐			
SP187		44-68-セ	25	25	20	暗褐			
SP188		44-68-セ	18	16	7	暗褐			
SP189		44-68-セ	42	40	46	暗褐			
SP191		44-68-セ	40		30				
SP193		44-68-セ	48		26		193-732	下部にピット	
SD194		44-69-ア	102	23	12			更正図の地割に一致する溝。	
SP195	SB1	43-69-テ	30	28	50				
SK196		43-69-ア	73	44	10		11→196		
SE197		43-69-シ	72	70	90				
SP198	SB1	43-68-シ	20		30	暗褐・炭多			
SP199		43-68-セ	22		19	褐灰と褐がまだら			
SP200		43-68-セ	30		40	灰黄褐と暗褐・炭少量			
SP201		44-69-ア	30		37	暗褐・炭少	158→201→159		
SP206		43-69-シ	48		37		76→206		
SP207	SB2	43-69-キ	33		28				
SP208		43-69-ア	38		29		209→208→38		
SP209		43-69-カ	29		40		210←209→208		
SP210		43-69-カ	36		24		209→210		
SP211		43-69-ウ	53		80				
SP212	SB3	42-69-ナ	23		30				
SP213	SB4	42-69-ナ	25		25				
SP215		43-68-ソ	26		38				
SP216		?-?-?	24		24	灰黄褐・灰白			
SP217		43-68-ソ	25		11				
SP218		43-68-ソ	22		12				

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP219		43-68-テ	18		22				
SP220		43-68-ト	15		17				
SP221		43-69-ナ	21		30	褐灰・灰白シルト混じり			
SP222		43-68-ソ	22		17	灰黄褐・灰白			
SD231		43-66-チ	1899	93	27			SD158に続く構成図の道に一致する溝。	鉄製品(75)
SD233		43-66-チ	237	25	6			更正図の地割に一致する溝。	
SK235		43-66-ニ	297	285	32	灰黄褐色、にぶい黄褐色	659→235-236	図版14	
SP236		43-66-タ	27		37		236-235		
SD237		43-66-タ	89	23	5			更正図の地割に一致する溝。	
SP238	SB9	43-66-サ	22		13	灰黄褐			
SP239		43-65-ソ	47		38	灰黄褐・にぶい黄ブロック	241→239		
SP240		43-65-ソ	31		26	灰黄褐・灰白ブロック少			
SP241	SA3	43-65-ソ	28		26	灰黄褐・にぶい黄ブロック	242→241→239		
SP242		43-65-ソ	27		15		243→242→241		
SP243		43-65-ソ	19		7	暗褐	243→242		
SP244		43-65-ソ	28		12	褐灰～暗褐			
SP245	SB9	43-65-ソ	28		54	灰黄褐			
SP246		43-65-ソ	37		26		249→246←248		鍛冶滓(83)
SP247		43-65-ソ	20		35		248→247		
SP248	SA4	43-65-ソ	55	51	34	にぶい黄褐色	246←248→247	図版10。柱痕。	
SP249		43-65-ソ	33		19	暗灰黄	249→246		
SP250		43-65-ソ	26		50	褐灰・灰白ブロック	250→251		
SP251		43-65-ソ	36		38		250→251		
SP252		43-65-ソ	48	36	41				
SP253		43-65-コ	48		22				
SP254	SA3	43-65-セ	30		30	灰黄褐	257→254		
SP255		43-65-セ	22		7		257→255		
SP257		43-65-セ	21		7		254←257→255		
SP258	SB9	43-65-セ	29		35	褐	260→258		
SP259		43-65-セ	31		8	にぶい黄褐・灰黄まだら	260→259←262		
SP260		43-65-セ	16		7		258←260→259		
SP261		43-65-セ					262→261		
SP262	SA4	43-65-セ	77	40	55	にぶい黄褐色	259←262→261	図版10。柱痕。	肥前陶器皿(50)
SP263		43-65-ケ	72	56	44	灰黄褐色		図版16。柱痕あり。	
SP264		43-65-ケ	30		45	褐灰	265→264		須恵無台杯(264)
SP265		43-65-ケ	40		36		265→264		須恵器無台杯(265)
SP266		43-65-ケ	20		30	灰黄褐			
SP267		43-65-セ	27		29	暗褐・灰白ブロック少			
SP268	SA3	43-65-ス	30		23	灰黄褐・褐・灰白と黄橙			
SP269		43-65-ス	46	24	10			不正形	
SP270	SB9	43-65-ス	30		27	1:褐灰(柱痕)、2:黄灰		柱痕	
SP271		43-65-ス	46	30	14	灰黄褐		図版10	
SP272	SA4	43-65-ス	93	556	53			図版10。柱痕。	
SP274		43-65-ク	28		25				
SP275		43-65-ク	29		10	黄灰～褐灰			
SP276		43-65-ク	52		35	褐・黄褐混じる・黄橙ブロック			

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SE278		43-65-ウ	153		106	暗灰黄色粘土、黒褐色粘質土		図版11。南半部は調査区外へ。	
SE279		43-65-ク	107	98	143	灰黄褐色、灰黄色粘土	280→279	図版11	珠洲片口鉢(33)甕(38)・漆器皿碗(56～58)・鋸身(74)
SP280		43-65-ク	19		20		280→279		
SD281		43-65-ス	62	23	6		282→281		
SP282		43-65-ス	20		30	褐灰	282→281		
SD283		43-65-キ	112	29	7		285→283	更正図の地割に一致する溝。	
SP284		43-65-ス	25		12		284→281		
SP285	SB5	43-65-ク	48		62	灰黄褐色	285→283	図版7	
SP286	SB5	43-65-ウ	20		27	褐灰			
SP287		43-65-ウ	28		24	褐灰			
SP288		43-65-ウ	21		24	褐灰			
SP289		43-65-ウ	19		22	灰褐			
SP290		43-65-ウ	19		31	褐灰			
SP291	SB9	43-65-シ	27		17	褐灰～灰黄褐・灰白まだら多			
SP292	SA4	43-65-シ	56	55	51	灰黄褐色		図版10。柱痕。	肥前磁器碗(4)
SP294		43-65-シ	21		28	灰黄褐・灰白粒多			
SP295	SB6	43-65-シ	31		29	灰黄褐～褐・黄橙と灰白			
SP296	SB9	43-65-キ	75		66	灰黄褐色		図版16	
SP297	SA4	43-65-サ	50	48	29	にぶい黄褐色		図版10。柱痕。	
SP298		43-65-キ	25		33				
SP300		43-65-キ	29		40	灰(褐灰)やや砂質			
SP301	SB5	43-65-キ	21		39	褐灰	301-304		
SP302		43-65-キ	42		24				
SP303		43-65-キ	20		21	灰褐・灰混じり			
SP304		43-65-キ	60	56	67				
SP305		43-65-イ	25		32	灰褐・褐灰混じり			
SP306		43-65-イ	20		18				
SP307		43-65-イ	25		28				
SP308		43-65-イ	16		12		308-676		
SP309	SB9	43-65-イ	29		25				
SP310		43-65-イ	37		51		313→310		
SP311		43-65-イ	14	12		灰褐	311-312		
SP312		43-65-イ	16		22	灰褐	313→312-311		
SE313		43-65-イ	111	96	115	暗灰黄、黄褐色粘質土	310←313→312	図版11	
SP315		43-65-イ	30		21	褐灰・灰褐少			
SK316		43-65-ア	75	67	69	灰黄褐色	317→316-680	図版16	
SP317	SB5	43-65-イ	37		48		317→316		
SP318		43-65-カ	34		34	灰黄褐		テラスあり	
SP319		43-65-カ	23		10	灰黄褐			
SP320		43-65-カ	30		23	灰黄褐	320→654		
SP321		43-65-カ	25		17	1:灰黄褐、2:黄灰			
SP322		43-65-カ	35		41		322←323		
SP323		43-65-カ	33		25	褐灰	322←323-325		
SP324		43-65-カ	23		22	黄灰～灰・砂混じり			
SP325		43-65-ア	29		21		323-325		
SP326		43-65-カ	21		33	褐灰・灰褐少			

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP329	SB6	43-65-ア	28		18	褐灰		掘りすぎ	
SP331		43-65-ア	18		16	灰褐		尖底	
SP332		43-65-ア	22		18	褐灰・灰白混じり・黒褐粘土粒			
SP333	SB5	43-64-オ	54	42	61	灰黄褐色	335→333	図版7	
SE334		43-65-ア	127		112	にぶい黄褐色、暗灰色粘土	335→334	図版11	須恵器無台杯(7)甕(11・14)・瀬戸美濃天目(43)・木製品(65・68)
SP335		43-64-オ	64		31	1:暗褐、2:褐、3:灰褐・褐灰			
SP336		43-65-カ	48	44	57	1:褐灰、2:褐灰、3:褐灰粘質	338→336		
SP338		43-65-カ	45		26	褐灰・灰白まだら多	338→336		
SP339		43-65-カ	32		15	褐灰、上位灰白まだら多			
SP343		43-64-コ	49		74		344→343		
SP344	SB8	43-64-コ	76	44	52		344→343		
SP345		43-64-コ	67	35	57	褐灰色	641→345	図版15	
SP346		43-64-コ	16		10				
SP347		43-64-コ	32		54	褐灰・灰白粒少	348→347		
SP348		43-64-コ	29		24	褐灰・灰白まだら多	348→347		
SP349		43-64-コ	23		19	褐灰・灰白ブロック多			
SP350		43-64-コ	44	32	32				
SP352		43-64-オ	32		21	褐灰・灰褐混じり・灰白			
SP353		43-64-オ	16		15	褐灰・上位に灰白ブロック			
SP355	SB6	43-64-オ	35		49	褐灰～灰・灰白ブロック			
SP356		43-64-オ	15		8	褐灰	357→356		
SP357		43-64-オ	17		15	灰褐	357→356		
SP358		43-64-オ	18		13	褐灰・灰白上位に多い			
SP359		43-64-オ	21		10	褐灰・灰褐少・灰白少			
SP360		43-64-オ	20		8	褐灰			
SP361		42-65-ナ	31		21	灰褐・褐灰混じり			
SP362	SB8	42-64-ノ	30		10	褐灰			
SP363		42-64-ノ	20		6				
SP364		42-64-ト				SK365上位。消滅。			珠洲片口鉢(31)
SK365		42-64-ト	197	177	82	黄褐色、灰黄色ブロック	368→365→367	図版14	土師器甕(2)・須恵器無台杯(10)・土師器皿・(40)
SK367		42-64-ト	116		45	灰黄褐色、にぶい黄色砂質シルト	365→367	図版14	砥石(78)
SP368	SB8	42-64-テ	42		71	黄褐色粘質土	369-368→365	図版14	
SP369	SB5	42-64-テ	59		55	灰黄褐色	369-368	図版14	
SP370		42-64-ノ	43		36	褐灰・灰褐少・炭			
SP371	SB7	43-64-オ	28		48	褐灰・灰褐・炭少			
SP372		43-64-エ	100	65	67	灰黄褐色		図版13	
SP373	SB5/SB6	43-64-エ	67		47				須恵器甕(12)
SP374		42-64-ネ	46		25	灰褐～褐・褐灰少	375・376→374		
SP375	SB7	42-64-ネ	42		30				
SE376		43-64-エ	168	162	107	灰黄褐色、灰黄色シルト	377→376	図版13	砥石(79)
SK377		43-64-エ	78		34				須恵器有台杯(5)瀬戸美濃天目(44)
SP378		42-64-ノ	33		29	灰黄褐色	378→380	図版9	
SP379		42-64-ノ	26		16	褐灰・灰白多・炭少			
SP380		42-64-ネ	23		26	灰黄褐色	383→380←378	図版9	
SP381	SA5	42-64-ネ	46	40	67	にぶい黄褐色	381→382	図版10	柱根(72)
SP382	SB5	42-64-ネ	40		54	灰黄褐色	381→382	図版10	

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP383	SB8	42-64-ネ	57		59	灰黄褐色	383→380	図版9	
SP384		42-64-ネ	17		16	褐・褐灰少			
SP386	SB7	43-64-オ	74	42	43		386-387		
SP387		43-64-オ	49	32	36		386-387		
SP388		43-64-エ	43		48				鍛冶滓(89)
SP390		43-64-エ	60		35	灰黄褐色		図版13	
SP391		43-64-エ	24		13				
SP392	SB8	43-64-ク	34		40				
SP393		42-64-ネ	22		18	褐・褐灰少			
SK394		42-64-ネ	48		28	1:褐・灰褐、2:褐灰・黄灰			土師器無台皿(24)
SP395		42-64-テ	56		53	褐・灰褐混・炭やや多	395→396		
SP396		42-64-テ	23		31	褐灰・灰褐多	395→396		
SP397		42-64-テ	33		64				
SP398		42-64-テ	25		30				
SP399		43-64-エ	65	50	56	褐灰色	400→399	図版16	
SP400		43-64-エ	49		34	灰黄褐色	400→399	図版16。柱痕あり。	
SP404		43-64-ウ	35			灰黄褐色	406→404	図版13	
SP405	SB8	43-64-イ	47	36	28	灰黄褐色	406→405	図版9	
SE406		43-64-ウ	220	211	115	灰黄褐色、褐灰色		図版13	
SP407		43-64-ウ	40		45	灰黄褐色	406→407	図版13	
SP409		43-64-ウ	25		31				
SP410		42-64-ヌ	55		60	灰黄褐色	412→410←411	図版16。柱痕あり。	
SP411		42-64-ヌ	27		13		411→410		
SP412		42-64-ヌ	44		30		412→410		
SP413		42-64-ヌ	35		43	灰褐・黄橙ブロック多		方形掘り方	
SP414	SB8	42-64-ヌ	24		34	褐灰色		図版8	
SP415	SB7	42-64-ヌ	45		45	1:灰褐、2:褐灰、3:灰褐			
SP416		42-64-ツ	24		32	灰褐・地山ブロック			
SP417		42-64-ツ	20		16	褐・地山少			
SP418	SB8	42-64-ツ	28		30	1:褐灰・地山多、2:褐灰			
SP419		42-64-ツ	40	30	41	1:灰褐、2:黄褐砂質、3:柱痕		柱痕あり	
SP420		42-64-ス	20		7	褐			
SP421		42-64-ス	28		13	褐・浅黄ブロック混じり			
SP423		42-64-ツ	57	40	64	1:灰褐・浅黄ブロック、2:灰褐	423-724		
SP424		42-64-ス	22		13				
SP425		42-64-シ	17		18				
SP426		42-64-シ	25		43				
SP427		42-64-シ	19		12				
SP428		42-64-シ	28		38	1:褐灰、2:にぶい黄褐			珠洲片口鉢(35)
SP429		42-64-キ	23		9				
SP430		42-64-キ	22		18				
SP431		42-64-キ	23		38				
SP432		42-64-シ	27	21	16				
SP433		42-64-シ	27	20	11				
SP434		42-64-サ	15		20				
SP435		42-64-サ	16		24				

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP436		42-64-チ	39		36	灰褐・褐灰混じり	436→437		
SP437		42-64-チ	37		31	暗褐～灰褐・地山少	436→437-438		
SP438		42-64-チ	36		8	灰褐・褐灰混じり	437-438		
SP439		42-64-チ	38		32	灰褐・褐灰・炭少			
SP440		42-64-タ	20		8	褐灰・灰白ブロック			
SP441		42-64-タ	19		15	褐灰・浅黄ブロック			
SP442		42-64-タ	29		32	褐灰	442→443		
SP443		42-64-タ	24		15	褐灰・地山ブロック	442→443		
SP444		42-64-チ	22		20	暗褐・褐灰少・炭少			
SP445		42-64-チ	15		14	暗褐・地山ブロック少・炭			
SP446		42-64-チ	33		18	褐・地山ブロック	446→447		
SP447	SB8	42-64-チ	43		42	暗褐	446→447		珠洲(36)
SP448		42-64-チ	27		15	1:灰褐、2:褐			
SP449		42-64-チ	31		40	灰褐・地山ブロック			
SP450		42-64-ニ	42	25	23	1:褐、2:灰褐			
SP452		42-64-ニ	37		13	灰砂質土			
SP453		42-64-ニ	35		22	灰褐・地山ブロック			
SP455	SB8	42-64-ニ	39	34	42	褐灰～灰黄褐	456→455		
SP456		42-64-ニ	23		35	灰黄褐・黄橙灰白ブロック過半	455←456→457		
SP457		42-64-ニ	27		27	灰黄褐・黄橙灰白ブロック大半	456→457		
SP460		42-64-ニ	30		35	灰褐			
SP461		42-64-ナ	16		6	灰褐			
SP462		43-64-イ	19		30	褐・褐灰混じり			
SP463		43-64-イ	38		70	灰黄褐色	464→463	図版8	
SP464	SB7	43-64-イ	24			褐	464→463		
SP465		43-64-イ	48		58	褐・褐灰まだら	466→465		
SP466		43-64-イ	44		40	灰褐・灰粘土	466→465		
SE467		43-64-ア	97	87	199	にぶい黄褐色、黄灰色粘土	467←468	図版11	瀬戸美濃丸皿(41・42)・木製品(60～69)・粉引臼(80・81)・石鉢(82)
SP468		43-64-ア	39		12		467←468		
SP469		43-64-ア	24		20	灰褐	467←469		
SP470		43-64-ア	30		14	灰褐・地山ブロック	467←470		
SK471		43-64-ア	53		37	1:黄橙・灰褐少、2:灰褐、3:灰褐			
SP472		43-64-イ	18		6	褐灰・灰褐少			
SP473		43-64-キ	28		30	褐・黄橙小ブロック			
SP474		43-64-キ	22		15	灰褐・黄橙ブロック少			
SP475		43-64-カ	22		9	褐・褐灰・黄橙まだら			
SP476		43-64-ク	24		40	1:褐灰、2:地山ブロック・褐灰			
SP477		43-64-ク	30		53	灰褐・褐灰少			
SP478	SB6	43-64-ケ	25		21	1:灰褐(柱痕)、2:褐灰・灰白			
SP479	SB5	43-64-ケ	50	46	77				
SP480		43-64-ケ	15		17	褐			
SP481		43-64-ケ	35		29	1:褐灰・黄橙粒多・炭、2:灰褐	483→481		
SK482		43-64-ソ	50		21			SD493の一部か。	
SP483	SB7	43-64-コ	40		50		481←483→627		
SP484	SB6	43-65-サ	24		6	灰黄褐			
SP485		43-65-サ	28		29	褐灰・灰白ブロック多			

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP486		43-65-サ	30	22			487→486		
SP487		43-65-サ	17		17	灰黄褐～褐灰	487→486		
SP488	SB5	43-65-サ	37		32		489→488		
SP490		43-65-サ	23		21				
SP492		43-65-タ	28		35	褐灰・灰白ブロック多	493→492		
SD493		43-65-タ	105	67	25		493→492		須恵器甕(13)・土師器皿(15～23・26～30)・鍛冶滓(84～93)
SP494		43-65-ツ							
SP495		43-65-チ	18		14	褐灰・灰白筋状			
SP496		43-65-ナ	20		11	灰褐～暗褐			
SP497		43-65-タ	29		23	1:灰褐・炭、2:黄褐・灰褐	497→498		鉄製品
SP498		43-65-タ	32		49	褐灰と灰褐がまだら	497→498		
SP499		43-65-タ	17		16	褐灰～灰			
SP500		43-64-ト	26		4	灰褐	685→500	浅い丸底	
SK504		43-64-ト	169		7		504→621	大型の浅土坑。試掘トレンチにより大部分消滅	
SP505	SB5	43-64-ソ	40		35	褐灰・灰白ブロック・炭		試掘トレンチにより上部消滅。	
SP506		43-64-ソ	18		26	褐灰・灰白ブロック少・炭少		試掘トレンチにより上部消滅。	
SP507		43-64-ト	16		4	褐灰・灰白少		試掘トレンチにより上部消滅。	
SP508		43-64-ソ	26		17	1:灰褐・炭、2:灰褐・灰白			
SP509	SB6	43-64-ソ	27		15	褐灰・灰白ブロック多			
SP510		43-64-ソ	20		19	褐			
SP511		43-64-ト	33		33	褐灰・灰白小ブロック・黒褐			
SP512		43-64-ト	58	41	58	褐灰	512→513		
SP513		43-64-ト				褐灰・灰褐	512→513		
SP514		43-64-テ	22		14	褐灰・黄橙ブロック			
SP515		43-64-テ	48	34	25	褐灰・灰白ブロック・炭			
SP516		43-64-ネ	20		14	褐灰・褐・灰白ブロック			
SP517		43-64-テ	26		13	褐灰・下位黄橙			
SP518		43-64-テ	22		20				
SP519		43-64-テ	19		17	灰褐・褐灰・黄橙ブロック	520→519		
SP520		43-64-テ	46		55	1:灰褐・褐3:褐灰粘質	520→519		
SP521		43-64-セ	28		15	灰褐・褐	522→521←523		
SP522	SB6	43-64-セ	24		26	褐灰・黄褐まだら多	522→521		
SK523		43-64-セ	102	94	24	にぶい黄褐色	524→523	図版7	銭貨(77)
SK524	SB5	43-64-セ	77	73	53	浅黄色土ブロック	524→523	図版7	
SP525		43-64-セ	36		16	褐灰・地山ブロック少			
SP526		43-64-セ	23		35	褐灰・灰褐・炭少			
SP527	SA5	43-64-セ	52		46	にぶい黄褐色		図版10	柱根(73)
SP528		43-64-セ	31		35	黄橙～灰白ブロック多・褐灰少			
SP529	SB7	43-64-ケ	41		44	灰黄褐色、にぶい黄褐色		図版8	
SP530		43-64-ク	18		7	褐灰～黄灰・地山ブロック多	531→530		
SP531		43-64-ク	34		17	灰褐・下位褐灰	531→530		
SP532		43-64-ス	31		37	灰褐～褐・褐灰	532→534		
SP533		43-64-ク	26		7	灰黄褐・灰白ブロック			
SE534		43-64-ス	147	107	139	黄褐色粘質土、灰黄褐色粘質土	532→534←535	図版11	珠洲(37)木製部材(66・71)
SD535		43-64-ス	180	40	8	褐灰～灰褐・黄褐まだら	708→535→534		
SP537		43-64-ツ	32		14				

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP538		43-64-ツ	16		13	灰褐			
SP539		43-64-ツ	42		35	1:灰褐・灰白少、2:褐灰粘土	539→540・541		
SP540		43-64-ツ	34		22	褐灰・灰白少	539→540・541		
SP541		43-64-ツ	18		15	褐灰・灰白少	539→540・541		
SP542		43-64-ヌ	24		18	灰褐			
SP543		43-64-ヌ	17		24	灰褐・炭やや多			
SP544		43-64-ヌ	20		24	灰褐	544→545		
SP545		43-64-ツ	20		7	暗褐・灰白ブロック	544→545		
SP546		43-64-ス	18		19	灰褐・炭少			
SP547		43-64-ス	16		25	灰褐			
SP548		43-64-ク	23		22	灰褐・褐灰			
SP549	SB7	43-64-ク	25		14	灰褐・褐灰			
SP550		43-64-ク	24		15	灰褐			
SK551		43-64-キ	75	33	13				
SP552		43-64-シ	19		12	褐		尖底気味小ピットあり	
SP553		43-64-シ	17		12	灰褐・褐灰と灰白		丸底	
SP554		43-64-チ	27		37	灰褐・黄橙ブロックや		丸底	
SP555		43-64-シ	17		24	灰褐・褐灰	555-556		
SP556		43-64-シ	14		3	褐	555-556		
SP557		43-64-サ	16		22	灰褐	557-558		
SP558		43-64-サ	20		23	灰褐			
SP559		43-64-シ	20		7	灰褐			
SP600		43-64-キ	26		13	褐			
SP601	SB7	43-64-キ	24		13	褐・褐灰少			
SD602		43-64-キ	10		5	灰褐			
SP603		43-64-キ	35		25	1:灰・褐、2:柱痕、3:黄橙、4:黄褐		柱痕	
SP604		43-64-カ	41		22	灰褐・褐灰少・炭			
SP605		43-64-カ	30		33	褐			
SP606		43-64-カ	16		13	褐			
SP607		43-64-カ	12		5	褐			
SP608		43-64-カ	16		4	褐			
SP609		43-64-サ	17		9				
SP610		43-64-カ	16		7				
SP614		43-64-カ	16		29				鉄製品(76)
SP615	SB8	43-64-キ	35		30	褐灰・明黄ブロック			
SP616		43-64-ク	26		16				
杭619		--							
SP620		43-64-カ	18		11	灰褐・褐灰まだら・炭		溝内	
SP621	SA4	43-65-サ	40		23	灰黄褐色	504→621	図版10。柱痕。	青花皿(45)
SP622		?-?-?	23		10	灰褐			
SP623		?-?-?	27		16	褐～暗褐			
SP624		?-?-?	20		10	褐灰～灰褐			
SP625		43-64-ソ	37		29	褐灰～灰褐・黄褐ブロック			
SP626		43-64-コ	18		14		658→626		
SP627		43-64-コ	38		17	灰褐	483→627←628		
SP628		43-64-ソ	42		17	灰褐	628→627		

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP629		43-64-ケ	26		22	灰黄褐～黒褐			
SP631		43-64-ケ	24		24	灰黄褐・灰褐混じり			
SP632		43-64-ク	40		69				
SP633		43-64-オ	28		29	灰褐・炭	633→335		
SP634	SB5	42-65-ニ	58		75				
SP635		42-65-ナ	42		35				
SP640		43-64-コ	92	68	24		640→345		
SP641		43-65-カ				灰黄褐色	641→345	図版15	
SP642		43-64-テ	20		17	暗褐・褐灰			
SP643		43-64-ト	32		30	褐灰・黄褐ブロック			
SK644		43-65-ツ	78	60	78	暗灰黄色粘質土	645→644	図版15	
SK645		43-65-ツ	110	80	47		645→644		
SP646	SA3	43-65-シ	21		8	暗褐			
SP648	SB5	43-65-チ	28		43	灰黄褐・・灰白と黄橙まだら			
SP649		43-64-ニ	28		25				
SP650		43-64-ツ	23		26				
SP651		43-64-ツ	21		15				
SP652		43-64-テ	27		40				
SP653		43-64-コ	22		30	1:灰黄褐、2:褐灰			
SP654		43-65-カ	20		9	灰黄褐	320→654		
SP655		43-65-キ	38	26	29				
SP656		43-65-コ	47		16	灰黄褐～褐灰・黄橙まだら		底部不正形	
SP657		43-65-ケ	18		28	褐灰			
SK658		43-64-コ	35		5	赤褐色砂	658→626		鍛冶滓(91)
SP659		43-66-チ	25		23		659→235-236	SK235下部のピット	
SP660		43-66-チ	20		22		660→235	SK235下部のピット	
SP661		43-66-タ	27		42		661→235	SK235下部のピット	
SP662		43-65-ネ	37		27		662-493		
SP663		43-65-ネ	21		5		663-493		
SP664		43-65-テ	33		54				
SP665		43-65-セ	22		24				
SP666		43-65-ヌ	20		5				
SK667		43-65-ツ							
SP668		43-65-ウ	25		35				
SP669		43-65-チ	27		45		669-493		
SP671		43-65-チ	29				671-493		
SP672		43-65-キ	16		20	褐灰やや砂質			
SP673		43-65-キ	39		20				
SP674		43-65-キ	30		9	褐灰	304→674		
SP676		43-65-イ	20		11		308-676		
SP678		43-65-ナ	25		1				
SK679		43-65-サ	72	32	18				
SP680		43-65-ア	28		45		680→316		
SP681		43-65-ア	24		19		681→682		
SP682		43-65-ア	23		43		681→682		
SP683		43-65-ア	28		22				

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP684		43-65-ナ	20		10				
SP685		43-64-ト	31		27		685→500		
SP686		43-64-ト	27		9				
SP687		42-64-ソ							
SP688		42-64-ソ	31		14				
SP689		43-64-オ	17						
SP690		43-64-オ	16		7				
SP691		43-64-テ	25		23				
SP692		43-64-テ	21		24				
SP693		43-64-テ	37		53		693→500		
SP694		43-64-テ	26		26				
SP695		43-64-セ	39		19				
SP696		43-64-セ							
SP697		43-64-セ	16		11				
SP698	SB8	43-64-ケ	35		46				
SP699		43-64-エ	25		24				
SP700		43-64-エ	30		38				
SP701		43-64-エ	48	40	64				
SP702		42-64-ネ	28		32				
SP703		42-64-ネ	18		21				
SP704		42-64-テ							
SP706		43-64-ヌ	19		8				
SP707		43-64-ツ	27		16				
SP708		43-64-ツ	45		60		708→535		
SP709		43-64-ク	21				406-709		
SP710		42-64-ツ	23		10				
SP711		43-64-チ	23		21				
SP712		42-64-ニ	39		21				
SP713		42-64-ニ	23		14			試掘トレンチにより上部消滅。	
SP714	SB7	42-64-ニ	21		10			試掘トレンチにより上部消滅。	
SP715		42-64-ニ	20		25				
SP716		42-64-ナ	25		9				
SP717		42-64-ツ	39	25	6				
SP718		42-64-シ	25		36				
SP719		43-64-ア	38		15		719→469		
SP720		42-64-ナ	23		12			試掘トレンチにより上部消滅。	
SP721		42-64-ナ	21		15				
SP722		42-68-ノ	26		14		722→3		
SP723		43-68-エ	26		9		723→23		
SP725		43-68-ソ	33		43				
SK726		43-69-チ	82	57	27				
SP727		43-69-ツ	43	32	37		727→78		
SP728		43-69-ツ	22		39		197-728→78		
SP729		43-68-ニ	28	25	17		729-131		
SP730		44-69-カ	16		20			SD158下部のピット。	
SP731		44-69-キ	20		36				

番号	建物・柵	位置	長径	短径	深度	覆土	切り合い	備考	出土遺物
SP732		44-68-セ	33		12		732→193		
SP733		44-68-ソ							
SP734		44-68-ト							
SP735		44-68-ト							
SP736		44-68-ト							
SP737		44-68-テ							
SP738		43-65-サ	12		5				
SP739		43-65-ス							
SP740		43-65-セ	23		5		740→262		
SP741		43-65-シ	20		24				
SP742		42-64-ツ	39		45		742→423		

別表２　黒部古屋敷遺跡　掘立柱建物・柵一覧表

No.	主軸	長軸	短軸	柱穴	柱間寸法	備考
SB1	81°	8.19m	4.11m	104-*-*-84-195-*-19-17-30-*-56-64,198	1.38～2.18m	
SB2	72°	6.69m		58-54-48-44-19-15-*-21,207-40	1.72～1.96m	
SB3	70°			23-30-38-212	1.63～1.83m	
SB4	83°			57-26-37-213	1.83～2.16m	
SB5	84°	7.33m	4.64m	524-505-488-648-285-286-317-333-373-*,382-369-*-*-634	2.04～2.73m	
SB6	95°	5.54m	3.99m	522-509-484-295-301-*-329-355-373-*	1.67～2.10m	
SB7	86°	5.64m	3.7m	601-549-529-483-386-371-375-415-714-464	1.67～2.10m	
SB8	92°	6.04m	3.48m	615-392-698-344-*-362-383-414-455-405,*-368-418-447	1.74～2.07m	
SB9	90°	6.96m	3.81m	291-270-258-245-238-*,-309-*	1.50～1.86m	
SA1	82°	11.47m		126-130-134-136-137-138-155-151	1.13～2.57m	
SA2	-22°	3.59m		98-120-129	1.79～1.80m	
SA3	89°	6.16m		646-268-254-241	1.94～2.14m	
SA4	93°	9.12m		621-297-292-272-262-248	1.64～2.03m	
SA5	4°	5.29m		381-527	5.29m	

※主軸は真北から東への角度

別表３　黒部古屋敷遺跡　土器・陶磁器・漆器観察表　※〔括弧内数字は小破片から推定した法量〕

No.	出土地点	層位	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	その他
1	SK165	下位	土師器	壷	〔22〕			石英	浅黄橙	やや軟質	口縁部小片。端部欠損。外面に薄く煤。有段口縁。肥前陶器共伴。
2	SE365	中央床直上	土師器	甕	〔19〕			砂利少量	橙	やや軟質	口縁部小片。破断部・器面摩耗。
3	SK165		土師器	甕	〔18〕			小礫やや多い。砂粒細かい。	橙	軟質	口縁部破片。器面摩耗。
4	SE2	上層	須恵器	有台杯		6.4		密・長石粒多い	灰	還元硬質	底部小片。高台は底部外縁やや内側、内屈し外端接地。小泊窯跡群産。
5	SK377	上面	須恵器	有台杯		〔8.2〕		精良。砂粒細かい。長石。	灰	還元硬質	底部小片。高台は底部外縁付近にほぼ垂直、外端設置、端部尖り気味。
6	SP264		須恵器	無台杯	〔12〕			長石	灰	還元硬質	口縁部小片。小泊窯跡群産か。
7	SE334	水溜	須恵器	無台杯		8.0		密・長石	暗青灰	還元硬質	小泊窯跡産。
8	SP151		須恵器	無台杯		7.8		石英	灰	還元硬質	底部全形残る。破断面摩耗。内外面被熱により劣化。
9	SP265		須恵器	無台杯		8.0		やや粗い粘土。白色石少量混じる。	灰白	還元硬質	底部から体部下位小片。破断部摩耗見られず。
10	SE365	床直上	須恵器	無台杯		7.0		小石やや多く、気泡目立つ。	灰白	還元硬質	底部破片。破断面・器表摩耗する。
11	SE334	第3～4層	須恵器	甕				密。長石。	灰	還元硬質	体部破片。外面擬格子叩き目。内面摩滅で不鮮明。小泊産か。
12	SP373		須恵器	甕				白色礫・長石	灰	還元硬質	体部破片。破断部摩耗。外面擬格子叩き目。内面同心円当て具痕。
13	SD493		須恵器	甕				やや粗い。白色の小石やや多い。	外:灰 内:灰黄	還元硬質。内還元不良	体部破片。外面打痕深い平行叩き目、内面放射状当て具痕。
14	SE334	下層	須恵器	甕				密・長石	灰	還元硬質	肩部破片。外面擬格子叩き目のちカキメ。内面同心円当て具痕、弱くナデ消し。内面摩耗して滑らか。小泊窯跡群産か。
15	SD493		土師器	有台皿		〔11〕		やや粗い。小石・雲母。	橙	普通	口縁部小片。器面剥落。16と胎土が類似し、同一個体とみられるが、小片のため口径が揃わず。
16	SD493		土師器	有台皿		7.6		粗い砂質。赤色粒多い。雲母	橙	普通	底部から脚部の破片。底部厚い。破断部摩耗著しい。
17	SD493		土師器	有台皿		6.0		礫・雲母・石英	橙	普通	底部から高台の破片。破断部・器面摩耗。
18	SD493		土師器	有台皿				雲母・石英	浅黄橙	普通	底部破片。高台端部と体部欠損。内定面も剥離。破断面摩耗。
19	SD493		土師器	有台皿				やや粗い。赤色礫多。	にぶい橙	普通	高台は貼り付け。端部欠損。
20	SD493		土師器	無台皿		4.0		砂質粗い。雲母・小石	にぶい橙	普通	底部厚手。破断部摩耗。
21	SD493		土師器	無台皿		4.8		やや砂質。チャート	浅黄橙	やや良好	底部破片。回転糸切り。摩耗少ない。
22	SD493		土師器	無台皿		4.4		礫・雲母・石英	にぶい橙	やや軟質	底部小片。破断面摩耗。
23	SD493		土師器	無台皿		5.6		粒子粗い。雲母・チャート	にぶい橙	普通	回転糸切り痕残る。
24	SP394		土師器	無台皿		〔6〕		精良。砂粒細かい。	浅黄橙	やや軟質	底部小片。外底面摩耗。
25	44-66-オ	地山直上	土師器	無台皿	8.6	3.6	2.4	雲母多い・砂粒やや粗い	外:にぶい褐 内:にぶい黄橙	やや良好	口縁部1/6程度、底部全周残存。破断部はやや摩耗。
26	SD493		土師器	皿	〔10〕			粗い。小礫多い。長石。	橙	良	口縁部小片。ロクロナデ丁寧。焼成良好堅緻。
27	SD493		土師器	柱状高台皿	8.2	3.0	2.1	小礫。やや砂質	にぶい橙	普通	破断面摩耗。器表剥離。口縁部3/4欠損。
28	SD493		土師器	柱状高台皿	8.4	4.4	2.5	雲母。砂質	浅黄橙	普通	破断部・器面摩耗。口縁部2/3欠損。
29	SD493		土師器	柱状高台皿		4.0		雲母・海綿骨針・小礫	にぶい橙	良好	口縁部欠損。破断面摩耗。
30	SD493		土師器	柱状高台皿		4.8		密。雲母・石英	橙	やや軟質	底部破片。体部大きく開く。
31	SP364		珠洲	片口鉢	〔25〕			緻密。海綿骨針・長石吹き出しともに少ない。	灰	還元硬質	口縁部小片。破断面の摩耗少ない。珠洲Ⅴ期。
32	SE145	第4層	珠洲	片口鉢	21.7	10.8	8.2	粗・小石やや多い・長石・海綿骨針	外:青灰 内:灰	還元やや軟質	口縁部から底部にかけ幅3cm程度欠損。底部中央劣化により4.5cm×2.5cmの穴。内面特に下位で摩耗顕著、卸目が消える。卸目原体幅3.4cm14目。珠洲Ⅴ期
33	SE279		珠洲	片口鉢		〔11〕		粗い。礫多く含む。海綿骨針。気泡多い。	灰	還元硬質	底部破片。底部糸切り後に荒い削り。内面摩耗激しい。目の粗い卸目。
34	SE145	第4層	珠洲	片口鉢				密・白色礫やや多い・海綿骨針	灰 器表:青灰	還元硬質	体部破片。幅2.6cm9目卸目。下半内面煤、下半外面墨。
35	SP428		珠洲	片口鉢				粗い。海綿骨針多い。小礫多い。	灰 外器表:青灰	還元硬質	体部破片。幅1.6cm7目の卸目隙間無く施す。
36	SP447		珠洲	壷・甕				海綿骨針。長石吹き出し細かい。	灰	還元硬質	体部破片。幅3cm8目叩き目。破断部やや摩耗。

No.	出土地点	層位	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	その他
37	SE534	第1層	珠洲	壺・甕				長石吹き出し多い。	灰	還元硬質	体部破片。3cm14目叩き目、打痕浅い。
38	SE279	上層	珠洲	甕		〔12〕		長石・海綿骨針	青灰	還元硬質	底部から体部下位。幅3cm7目の叩き目。内面・外底面にナデ。
39	SE87		越前	擂鉢	〔34〕	〔13〕	12.0	小石やや多い	にぶい黄橙	良好・硬質	大型破片2、小破片3点。幅3cm10目卸目。卸目見込みに及ばず。口縁内面やや下に沈線。越前V-1。
40	SE365	中層	土器	皿	14.0	8.4	2.4	精良・長石	浅黄橙	良好	口縁部から体部の破片。破片3点接合。底部境の破断部摩耗。外面口縁部下浅い凹線めぐる。
41	SE467	第2層	瀬戸美濃	丸皿	〔9〕			やや粗い	にぶい黄橙 釉:淡緑	良好	口縁部小片。灰釉。
42	SE467	第6層	瀬戸美濃	丸皿	9.9	5.3	2.5	緻密。白色礫含む	灰釉:濃緑	良好	底部糸切り痕。高台端部露胎。2/3残存。ロクロナデの凹凸顕著。破断面摩耗なし。全面灰釉。外底面焼台痕の釉剥がれる。大窯第3段階。
43	SE334		瀬戸美濃	天目	〔12〕			精良・密	灰白 釉:黒、褐	良好	口縁部小片。口縁部くびれる。
44	SE377	上面	瀬戸美濃	天目	11.0			やや粗い	灰白 釉:黒、褐	良好	口縁部小片。口縁部くびれ、外へ開く。
45	SP621	東西ベルト	青花	皿	11.0	6.0	2.5	精良	白	良好	B1Ⅳ類。外面:界線・牡丹唐草・界線、内面:界線・十字花文。
46	SP292		肥前磁器	碗				精良	白 釉:無色	良好	体部破片。内面圏線に草花文か。
47	SK165	床面	肥前磁器	碗		3.2		精良	白 釉:灰白	良好	底部小片。高台端部欠損
48	旧別山川	44-66-ア	波佐見	皿	12.8	4.8	4.4	精良	にぶい橙 釉:白	良	見込み蛇の目釉剥ぎ。内面圏線に草花文。焼成不良の磁器か。波佐見V-1期
49	旧別山川	44-66-ア	肥前陶器	皿		4.8		精良	にぶい褐色 釉:濃緑	良	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面体部下半以下露胎。肥前Ⅳ期。
50	SP262	掘り方	肥前陶器	皿	〔10〕			精良	灰白 釉:淡緑	良好	口縁部破片。内面から口縁部外面まで銅緑釉。外面体部無色釉。18c前半。肥前Ⅳ期。
51	旧別山川	44-66-ア	肥前陶器	皿		4.8		精良	白 釉:淡緑	良	畳付け露胎。肥前Ⅳ期。
52	旧別山川	44-66-エ	肥前陶器	皿		5.4		精良	にぶい褐 釉:内鉄釉		高台以下露胎。肥前Ⅱ期。
53	旧別山川	44-66-ア	肥前陶器	碗	10.0			精良	にぶい褐 釉:無色	良	
54	旧別山川	44-66-ア	肥前陶器	擂鉢	〔24〕				赤褐	良好	口縁部鉄釉。極細い卸目。肥前Ⅱ期
55	旧別山川	44-66-エ	肥前陶器	擂鉢	〔22〕				にぶい褐	良好	口縁部鉄釉。肥前Ⅱ期。
56	SE279		漆器	皿	7.9	5.5	2.0	横木取り			内外面赤色漆。高台内黒色系漆に赤色漆で文様描く。
57	SE279		漆器	皿	9.4	6.3	2.9	横木取り			内赤色外黒色系漆。外面に赤色漆で漆絵を描く。内外面とも赤色漆は大部分で剥離。
58	SE279		漆器	皿		8.3		横木取り			底部のみ残存。高台も付け根から全て欠損する。内赤色漆外黒色系漆。

別表４　黒部古屋敷遺跡　木製品観察表

No.	出土地点	層位	器種	長径	短径	厚さ	気取	その他
59	SE279		鍋蓋	16.5	〔10.9〕	0.9	板目	1/5欠損。隅丸方形に近い形状。中央につまみ接合の径1cmの孔あり。
60	SE467	黒色腐植層	蓋	21.5	〔5.0〕	1.1	柾目	円形板の一部。大部分欠損。中央に径2mmの穴が、1.4cm間隔で2ヶ所あり。
61	SE467	黒色腐植層	籠物結桶	21.8	18.5	17.9		タガ欠損、個別分離。底板は3枚をホゾでつなぐ。側板15枚。幅、長さとも均一ではない。
62	SE467		籠物側板	17.9	2.7	0.7	柾目	一枚完形。緩く湾曲。外面階に籠痕跡有り。上部に径3mmの孔あり。
63	SE467		籠物側板	18.3	6.4	0.7	柾目	一枚完形。緩く湾曲。外面階に籠痕跡有り。
64	SE467		板状部材	〔6.8〕	3.8	0.7	板目	桶側板か。上欠損。表面炭化。
65	SE334	水溜	部材(不明)	〔7.9〕	2.4	0.7	柾目	上下欠損。大部分焦げる。
66	SE534		板状部材	〔10.8〕	4.4	1.1	柾目	上下欠損。
67	SE467		板材	16.1	〔5.0〕	0.5	柾目	両側欠損。上下端炭化部分あり。
68	SE334	水溜	角材	〔14.7〕	4.6	2.8	柾目	上下欠損。
69	SE467		部材	〔12.6〕	8.7	3.2	板目	下欠損。ホゾ穴あり。片面炭化。
70	SE467		棒状部材	〔30.6〕	6.4	5.4	芯持ち	上欠損。下部切断される。
71	SE534		部材(不明)	31.7	7.5	3.2		左側欠損。他の部材と組み合わせて使用するものと想定される。用途不明。ホゾ孔3ヶ所。ホゾ3本。クサビ2本。
72	SP381		柱根	18.2		27.1	芯持ち	下端鋸による切断。
73	SP527		柱根	〔8.3〕	〔8.1〕	〔10.8〕	芯持ち	柱根。大部分は腐植して消失。検出時の腐植土の状態から方形柱であったことが判明。

別表５　黒部古屋敷遺跡　金属製品・石製品・製鉄関連遺物観察表

No.	出土地点	層位	種類	器種	長径	短径	厚さ	重量	その他
74	SE279		鉄製品	鋸身	17.3	4.1	2.0		大部分腐食により欠損、素歯、あさりあり。刃部やや湾曲する
75	SD231	調査区 南壁付近	鉄製品	不明・棒状	6.7	2.1	1.3	26g	磁着あり。
76	SP613		鉄製品	不明・板状	5.4	3.6	1.7	11g	薄い鉄板を折り曲げ、2枚重ねとなる。
77	SK523	上面	銭貨	元豊通寶 ほか2枚	2.34	1.86	0.12		3枚が重なり、融着している。最上面が元豊通寶(1078)。
78	SK367		石製品	砥石	〔8.3〕	4.1	3.9	255g	上欠損。頁岩。使用面2面。
79	SE376	中層	石製品	砥石	8.2	4.0	3.2		ほぼ完形。凝灰岩。使用面2面。上部に紐通しの穴。
80	SE467		石製品	粉挽き臼 上臼	30.9		10.6		ほぼ完形。煤・コゲ有り。臼面溝8分画、やや摩耗。
81	SE467		石製品	粉挽き臼 上臼					縁部の一部。下面にコゲ痕。
82	SE467		石製品	石鉢	28.2	23.4	15.1		1/2弱残存。内面は摩耗して滑らか。見込みにコゲ。外面体部下位から底部外縁に煤。
83	SP246		鉄滓	鍛冶滓	2.8	2.1	1.7	7g	磁着なし。
84	SD493	27	鉄滓	鍛冶滓	3.8	2.0	1.5		
85	SD493	28	鉄滓	鍛冶滓	2.8	1.8	1.3		
86	SE467	第2層	鉄滓	鍛冶滓	4.4	3.4	1.9	34g	メタル度M。磁着ややあり。表面の大部分は錆。図左上欠損。
87	SD493	43-64-ソ	鉄滓	鍛冶滓	5.9	4.5	3.3		
88	SD493	20	鉄滓	鍛冶滓	5.1	4.0	2.6		
89	SP388		鉄滓	鍛冶滓	4.8	3.8	2.8	76g	メタル度M。磁着ややあり。裏面に凹凸・気泡有り。
90	SD493	2	鉄滓	鍛冶滓	8.3	4.9	3.9		
91	SX658		鉄滓	鍛冶滓	5.5	3.0	1.6	34g	メタル度M。磁着ややあり。裏面に凹凸・気泡多い。
92	SD493	7	鉄滓	鍛冶滓	7.8	6.4	3.6		椀型鍛冶滓
93	SD493	4	鉄滓	鍛冶滓	9.7	7.2	3.4		椀型鍛冶滓

別表６　遺構図版土層注記

図版７

ＳＰ285

1　灰黄褐色土。にぶい黄色土ブロック含む。炭化物粒やや多い。酸化鉄混じる
2　灰黄褐色土。にぶい黄色土粒少量混じる。
3　にぶい黄褐色土。炭化物極少量混じる。

ＳＰ333

1　灰黄褐色土。にぶい黄色土ブロックやや多い。炭化物混じる。
2　にぶい黄褐色粘質土。炭化物多く含む。

ＳＫ523・ＳＰ524

ＳＫ523

1　にぶい黄褐色土。浅黄色土とにぶい黄褐色土が混じる。炭化物極少量混じる。
2　灰黄褐色土。にぶい黄色土まだらに混じる。炭化物少量混じる。

ＳＰ524

3　浅黄色土ブロック主体。にぶい黄褐色土が隙間に入る。
4　3層と同様。にぶい黄褐色土が多い
5　灰黄褐色土。下位は粘質強い

図版８

ＳＰ529

1　灰黄褐色土。しまり弱い。赤褐色擬礫少量含む。灰黄色土少量混じる。
2　にぶい黄褐色土。やや粘質。炭化物極少量含む。

ＳＰ415

1　にぶい黄褐色土。褐灰色土粒少量・炭化物少量混じる。下位ににぶい黄橙色土まだらに混じる。
2　褐灰色土。にぶい黄色土ブロック多く混じる。
3　暗褐色土。にぶい黄色土粒・炭化物粒混じる。

ＳＰ463

1　灰黄褐色土。明黄褐色土ブロック多く混じる。1㎝前後の炭化物多く混じる。
2　黒褐色土。2㎝前後の炭多く、粉状の炭も多く黒く混じる。
3　暗灰黄色粘土。しまり弱い。
4　にぶい黄褐色土。地山土粒少量混じる。
5　灰黄褐色土。
6　にぶい黄色粘土。締まりやや強い。
7　にぶい黄褐色土。明黄褐色土粒少量混じる。

図版９

ＳＰ405

1　灰黄褐色土。明黄褐色土ブロック多く混じる。
2　にぶい黄褐色土。
3　にぶい黄褐色やや粘質土。
4　褐色土

ＳＰ383・ＳＰ380・ＳＰ378

ＳＰ380

1　灰黄褐色土。浅黄色シルトブロックまだらに半分近く混じる。明黄褐色土少量混じる

ＳＰ378

2　灰黄褐色土。浅黄色土まだらに大半を占める。黒褐色土粒少量混じる。
3　にぶい黄褐色粘質土。浅黄色土粒少量混じる。

ＳＰ383

4　灰黄褐色土。浅黄色土粒混じる。
5　にぶい黄褐色粘質土。浅黄色土粒少量混じる。
6　にぶい黄褐色土。浅黄色土小ブロックやや多い。
7　灰黄褐色土。にぶい黄色粘質土ブロック半分占める。
8　灰黄褐色粘土。しまりやや弱い。

図版10

ＳＰ621

1　灰黄褐色土。
2　褐灰色土。にぶい黄色土ブロック。
3　褐灰色土。にぶい黄色土薄い層状に混じる。

ＳＰ297

1　にぶい黄褐色土。
2　褐灰色土。灰黄色土まだらに混じる。
3　褐灰色土。灰黄色土まだらに多く混じる。

ＳＰ292

1　灰黄褐色土。灰黄色土粒多く混じる。
2　褐灰色土。にぶい黄色土ブロック混じる。

ＳＰ272

1　灰黄褐色土。下位は粘土で、しまり弱い。灰白色土小ブロック極少量混じる。
2　褐灰色土から黄灰色土に遷移。にぶい黄色土ブロック多く混じる。
3　にぶい黄色粘質土ブロック層。

ＳＰ262

1　にぶい黄褐色土　やや粘質。しまりやや弱い。下位は粘質強い。
2　灰黄褐色土。灰白色土ブロック少量混じる。
3　褐灰色土。やや粘質。灰黄色土小ブロック多く混じる炭化物極少量混じる。しまりやや強い。

ＳＰ248

1　にぶい黄褐色土。
2　にぶい黄褐色土。締まりやや弱い。
3　灰黄褐色土。半分以上はまだら状の灰白色土。
4　にぶい黄色土。褐灰色土がまだらに入る。
5　灰黄褐色土。3層の灰白色土に似る
6　にぶい黄褐色土。やや粘質。

ＳＰ381・ＳＰ382

ＳＰ381

1a　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土少量混じる。しまり強い。炭化物極少量混じる。
1b　褐灰色粘土。
2　灰黄褐色土。酸化鉄少量混じる。にぶい黄橙色土薄くまだらに混じる。炭化物小量混じる。
3　にぶい黄橙色土ブロック層。間に2層が入る
4a　灰黄色粘土。灰黄褐色土ブロック少量混じる。
4b　にぶい黄色粘土。黄灰色粘土粒状に混じる。

ＳＰ382

5　灰黄褐色土。灰黄色土ブロック多く混じる。炭化物多く混じる。
6　5層同質。灰黄褐色土多い
7　黄灰色粘土。しまり強い。

ＳＰ527

1　にぶい黄褐色土。上面付近に微小な炭化物少量混じる。
2　灰黄褐色粘土。炭化物少量混じる
3　にぶい黄色シルト。灰黄色シルト少量混じる。黄灰色粘土ブロック少量混じる。
4　灰黄色粘質土。にぶい黄褐色土まだらに多く混じる。

図版11

ＳＥ279

1　にぶい黄褐色土。やや粘質。
2　浅黄色粘土。暗灰黄色粘土が混じる。微小な炭化物極少量混じる。
3　黄灰色粘土。炭化物ほとんど混じらず。

ＳＥ313

1　灰黄褐色土。にぶい黄橙色や灰黄色のブロック土混じる。炭化物有り
2　浅黄色粘質土ブロック層。暗灰黄色土が間に入る
3　暗灰黄色粘質土。
4　細かく砕けた炭層。
5　黄褐色粘質土。

ＳＥ278

1　浅黄色粘質シルト大型ブロック層。黄灰色土が隙間を埋める。
2　暗灰黄色粘質土。にぶい黄色土少量混じる。
3　暗灰黄色粘質土。にぶい黄色土やや多く混じる。
4　暗灰黄色土。灰黄色土ブロック約半分混じる。
5　黒褐色粘質土。しまり強い。
6　灰黄色粘質土ブロック。

ＳＥ334

1　灰黄褐色土。しまり強い。黒褐色土ブロックわずかに混じる。小炭化物粒混じる
2　にぶい黄褐色土。にぶい黄色砂質シルトブロックまだらに混じる。
3　暗灰黄色粘質土。炭化物は極少ない。にぶい黄色シルトブロック混じる。
4　暗灰黄色粘土。にぶい黄色シルトブロック混じる。
5　暗灰色粘土

ＳＥ467

1　褐色土。灰黄褐色土粒多く含む。小炭化物小量含む。
2　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土粒含む。小炭化物少量含む。
3　2層に似るが、灰黄褐色土がやや多い。

4　2層と同質。
5　黄灰色土。しまり強い。灰黄褐色土少量含む。炭化物少ない。

SE534
1　黄褐色粘質土。下位はにぶい黄褐色土。
2　暗褐色土。炭化物やや多い。赤褐色土粒混じる。褐灰色土少量まだらに混じる。
3　にぶい黄褐色土。にぶい黄色土ブロック混じる。炭・赤褐色土粒少量混じる。
4　灰黄褐色土。炭化物小量混じる。にぶい黄色土粒混じる。
5　植物繊維状の炭化物層。しまり弱い。
6　灰黄褐色粘質土。褐色土粒少量混じる。炭化物は極細かいものが少量混じる。
7　灰黄色粘土
8　7層と同様、ややにごる

図版12
SE79
1　にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色シルトブロック少量含む。
2　にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色シルトブロックが大半を占める。
3　にぶい黄色砂質シルト。暗灰黄色粘土ブロック含む
4　暗灰黄色粘土ブロック。
5　灰黄褐色粘質土。
6　黒褐色粘質土。灰黄色ブロック混じり。
7　灰黄褐色粘質土。灰黄色土ブロック混じり
8　灰黄褐色粘質土。
9　暗灰黄色砂質シルト。
10　暗灰黄色砂質シルト。
11　浅黄色粘土ブロック層。
12　暗灰黄色砂質シルト。浅黄色粘土ブロック混じり。
13　暗灰黄色砂質シルト。
14　暗灰黄色砂質シルト。浅黄色粘土ブロック混じり。
15　暗灰黄色粘土。浅黄色粘土ブロック混じり。

SP1・SE2
SP1
1　褐灰色土。しまりやや弱い。
2　灰黄褐色粘質土。
3　黄褐色砂混じり粘土。
SE2
1　灰黄褐色粘質土。にぶい黄橙色土ブロック少量混じる。
2　灰黄褐色粘質土。にぶい黄橙色土ブロックが大半を占める。
3　にぶい黄褐色粘質土。
4　灰黄褐色粘質土。にぶい黄橙色土ブロック少量混じる。
5　にぶい黄褐色粘土。
6　灰黄褐色粘土。明黄褐色砂混じる。
7　灰黄褐色粘土。

SE87・SE90
SE87
1　褐灰色土。地山土ブロック少量混じる。小炭化物・焼土粒混じる。
2　黄灰色粘質土。地山土ブロックやや多く混じる。炭化物含む。
3　灰黄褐色粘土。
4　にぶい黄色砂質シルト。地山土に似る。
5　黄灰色粘質土。地山土ブロックやや多く混じる。炭化物含む。
6　にぶい黄色砂質シルト。
7　灰黄褐色粘土。
8　にぶい黄橙色砂質シルト。
9　灰黄色粘土。
10　灰黄色粘土。しまり弱い。
11　黒褐色腐植物層。大型の炭化物混じる。大部分はワラなどの腐植物。
12　灰黄色粘土。

SK76・SE145
SK76
1　灰黄褐色土。しまり強い。
2　灰黄褐色土。
3　黄褐色土。
4　黄褐色土。地山ブロック多い。
SE145
1　灰黄褐色土。にぶい黄橙色土小ブロックまばらに混じる。小炭化物含む。
2　暗灰黄色粘土。しまり強い。
3　暗灰黄色粘土。しまり弱い粘土。
4　にぶい黄色粘土。しまり強い。
5　黄灰色粘土。

図版13
SE406　南北
1　灰黄褐色土。にぶい黄褐色土・褐灰色土がまだらに混じる。
2　灰黄褐色土。にぶい黄色土まだらに入る。
3　灰黄褐色土。
4　にぶい黄色粘質土。赤褐色土粒多く混じる。
5　黒褐色土。にぶい黄橙色土粒・赤褐色土粒混じる。炭化物粒少量混じる。
6　褐灰色土。浅黄色土粒・炭化物粒多く混じる
7　黄灰色土。褐色土まだらに混じる。
8　にぶい黄色土。褐色土が筋状に混じる

SE406　東西
1　灰黄褐色土。褐色土ほぼ同量混じる。炭化物多い。
2　灰黄褐色土。1層同様の褐色土混じるが、少ない
3　黄灰色土。灰黄色土少量まだらに混じる。
4　3層同様。砂粒やや粗い。上位に明褐色土多く、まだらに混じる。
5　灰黄褐色土。黄褐色土ブロック多く混じる。炭化物少ない
6　にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色土ブロック多い。炭化物少ない。
7　浅黄色土。黄灰色土や明褐色土がまだらに混じる。炭化物少ない。
8　灰黄褐色土。灰黄色土混じり。炭化物少ない
9　明褐色土ブロック。灰黄褐色土。炭化物が多く混じる
10　9層に似る。灰黄褐色土が大部分占める。
11　灰黄褐色土。明褐色土がまだらに混じる。
12　明灰黄色粘質土。灰黄色土極少量まだらに混じる。
13　12層同様でやや明るい。
14　12層同様で灰黄色土がやや多い。
15　浅黄色砂質シルトブロック。
16　にぶい黄色砂質シルト。　明オリーブ灰色砂質シルト混じる。
17　16層同様で粘土混じる。
18　17層に灰黄褐色土粒多く混じる。
19　暗灰黄色粘土。植物繊維少量含む。
20　灰黄褐色粘土。褐灰色粘土少量含む。
21　浅黄色砂質シルト。明緑灰色砂質シルト少量混じる。
22　灰黄色粘土。明緑灰色粘土極少量混じる。
23　灰黄色粘土。22層より明るい。
24　オリーブ灰色年度
25　緑灰色粘土。
26　25層と同質。
27　灰黄色粘土。

SP407
1　にぶい黄褐色土。明黄褐色土ブロック少量混じる。
2　灰黄褐色土。にぶい黄橙色土少量混じる。黒褐色土ブロック少量混じる。

SP404
1　にぶい黄褐色土。
2　灰黄褐色土。
3　暗灰黄色粘土。
4　灰黄褐色粘土。

SE376
1　灰黄褐色土。細かい炭化物がまばらに入る。
2　黄灰色粘土。炭化物少ない。
3　黄灰色粘質土。浅黄色シルト大ブロックが大部分占める。
4　浅黄色やや砂質シルト。
5　灰黄色粘質シルト。
6　浅黄色粘質シルト。黒褐色粘土ブロックが大部分占める。
7　黄灰色粘質土。浅黄色シルト大ブロックが大部分占める
8　灰黄褐色粘質土。
9　灰白色粘質シルト。黄灰色粘質シルトまだらに混じる。
10　9層同様。黄灰色が多い。
11　灰黄色シルト。
12　にぶい黄色シルト。炭化物混じる。
13　灰黄色シルト。

SP390
1　にぶい黄褐色土。焼土粒・微小な炭化物極少量混じる。
2　灰黄褐色土。灰黄色土ブロックやや多く混じる。
3　灰黄褐色土。灰黄色土ブロック少量混じる。

SK372
1　灰黄褐色土。浅黄色土ブロック少量混じる。炭化物小量混じる。
2　にぶい黄褐色土。浅黄色土ブロック・炭化物少量混じる。
3　灰黄褐色土。浅黄色土ブロック極少量混じる。炭化物少量混じる。

図版 14

ＳＥ365・ＳＰ368・ＳＰ369

ＳＥ365

1　暗灰黄色粘質土。灰白色粘土ブロック混じる。
2　にぶい黄褐色土。にぶい黄褐色土ブロック混じる。褐灰色土がまだらに混じる。炭化物少ない。
3　黄褐色土。やや大きめの灰黄色土ブロック多く混じる。
4　黄褐色土。やや大きめの灰黄色土ブロック少量混じる。
5　黄褐色土。やや大きめの灰黄色土ブロック少量混じる。
6　黄褐色土。やや大きめの灰黄色土ブロック多く混じる。
7　黄褐色土。やや大きめの灰黄色土ブロック多く混じる。
8　オリーブ褐色砂混じりシルト。
9　黄灰色粘土。灰白色シルトブロック混じる。しまり強い。
10　浅黄色シルト。

ＳＰ368

11　にぶい黄褐色土。灰白色シルトブロック混じる。
12　黄褐色粘質土。灰白色シルトブロック混じる。

ＳＰ369

13　灰黄褐色土。にぶい黄褐色土混じる。炭化物やや多い。

ＳＫ367

1　灰黄褐色粘質土。にぶい黄色土小ブロックまだらに混じる。
2　灰黄褐色粘質土。1層に似るが粘質強い。ブロックの混じりはほとんど見られない。
3　にぶい黄色砂質シルト。下位に同色の粘土塊混じる。
4　にぶい黄色砂。
5　黄褐色粘土混じり砂。

ＳＫ235

1　褐色土。灰黄褐色土多く混じる。
2　にぶい黄褐色土。
3　灰黄褐色土。褐灰色土混じる。
4　暗灰黄色土。やや粘質。
5　3層に似る。褐灰色土やや多い。明黄褐色土粒混じる。
6　5層に似る。明黄褐色土粒多い。
7　黄褐色土。にぶい黄褐色土混じる。
8　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土ほぼ半分混じる。
9　8層に似る。灰黄褐色土多い。
10　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土極少量混じる。

図版 15

ＳＫ165

1　にぶい黄褐色土。褐灰色土まだらに混じる。
2　黄褐色砂混じりシルト。褐灰色砂まだらに少量混じる。
3　灰黄褐色砂混じりシルト。褐色砂筋状に混じる。
4　灰黄褐色砂混じり粘土。褐色砂少量混じる。
5　にぶい黄褐色粘質土。
6　黄灰色粘土。
7　灰色砂混じり粘土。
8　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土まだらに混じる。
9　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土少量混じる。
10　暗灰黄色土。にぶい黄褐色土少量混じる。
11　褐灰色粘質土。

ＳＫ119

1　黒褐色土　しまり強い。にぶい黄橙色砂質土ブロック。小炭化物・焼土粒混じる。

ＳＫ644・ＳＫ645

1　暗灰黄色粘質土。
2　灰色粘質土。
3　褐色土。明黄褐色土ブロック少量混じる。炭化物粒少量混じる。

ＳＰ345・ＳＫ641

ＳＰ345

1　褐灰色土。にぶい黄橙色土勝負ロック少量混じる。
2　灰黄色粘質土ブロック。褐灰色土が薄く混じる。
3　褐灰色土。にぶい黄橙色土勝負ロック少量混じる。
4　黄灰色粘質土。明黄褐色土小ブロック少量混じる。
5　黄灰色粘土

ＳＫ641

6　灰黄褐色土。にぶい黄色土がまだらに混じる。
7　灰黄褐色土。細かい炭化物小量混じる

図版 16

ＳＫ67・ＳＫ68

ＳＫ67

1　灰黄色砂質シルト。にぶい黄褐色土まだらに混じる。
2　黄褐色砂質シルト。

ＳＫ68

3　にぶい黄褐色土。浅黄色土ブロックやや多く混じる。
4　浅黄色粘質土ブロック主体。にぶい黄褐色土混じる。
5　暗灰黄色粘質土。灰黄色粘質シルト小ブロックがほぼ同量混じる。
6　暗灰黄色粘質土。
7　灰黄褐色粘質土。にぶい黄色粘質土ブロック混じる。

ＳＫ96・ＳＰ95

ＳＫ96

1　灰黄褐色土。小炭化物・にぶい黄橙色土ブロック少量混じる。
2　にぶい黄褐色土。にぶい黄橙色土ブロックやや多く混じる。炭化物少ない。
3　にぶい黄色粘質土ブロック主体。にぶい黄褐色土混じる
4　灰黄褐色粘質。にぶい黄橙色土粒少量混じる

ＳＰ95

5　灰黄褐色土。
6　にぶい黄褐色粘質土。炭化物極少量混じる。
7　にぶい黄橙色粘質シルト。
8　灰黄色粘土。

ＳＫ316

1　にぶい黄褐色土。炭化物極少量、明黄褐色や灰白色のシルト大ブロック混じる。
2　褐色土。にぶい黄橙色粘質土まだらに混じる。
3　灰黄褐色土。にぶい黄褐色土が大半を占める。
4　3層と同様だが、灰黄褐色土が多い。
5　灰黄褐色土。にぶい黄橙色土粒混じる。炭化物まだらに混じる。
6　にぶい黄褐色土。炭化物は5層同様。
7　灰黄色粘土。地山に類似。にぶい黄色粘土・炭化物わずかに混じる。
8　7層に似る。にぶい黄色土は混じらない。

ＳＫ132

1　灰黄褐色土。にぶい黄橙色土ブロック多く混じる。
2　黄灰色粘質土。

ＳＫ296

1　灰黄褐色土。にぶい黄橙色や灰白色のシルトブロック多く混じる。
2　1層と同質。シルトブロックが半分以上を占める。
3　褐灰色土。シルトブロック少ない

ＳＰ399・ＳＰ400

ＳＰ399

1　褐灰色土。明黄褐色土・にぶい黄橙色土のブロックがまだらに混じる。
2　1層に似る。明黄褐色土少ない。にぶい黄橙色土のまだらが多い

ＳＰ400

3　灰黄褐色粘質土。柱根。
4　灰黄褐色土。にぶい黄橙色土がまだらにやや多く混じる。
5　4層に似る。黄褐色土多く混じる。

ＳＰ410

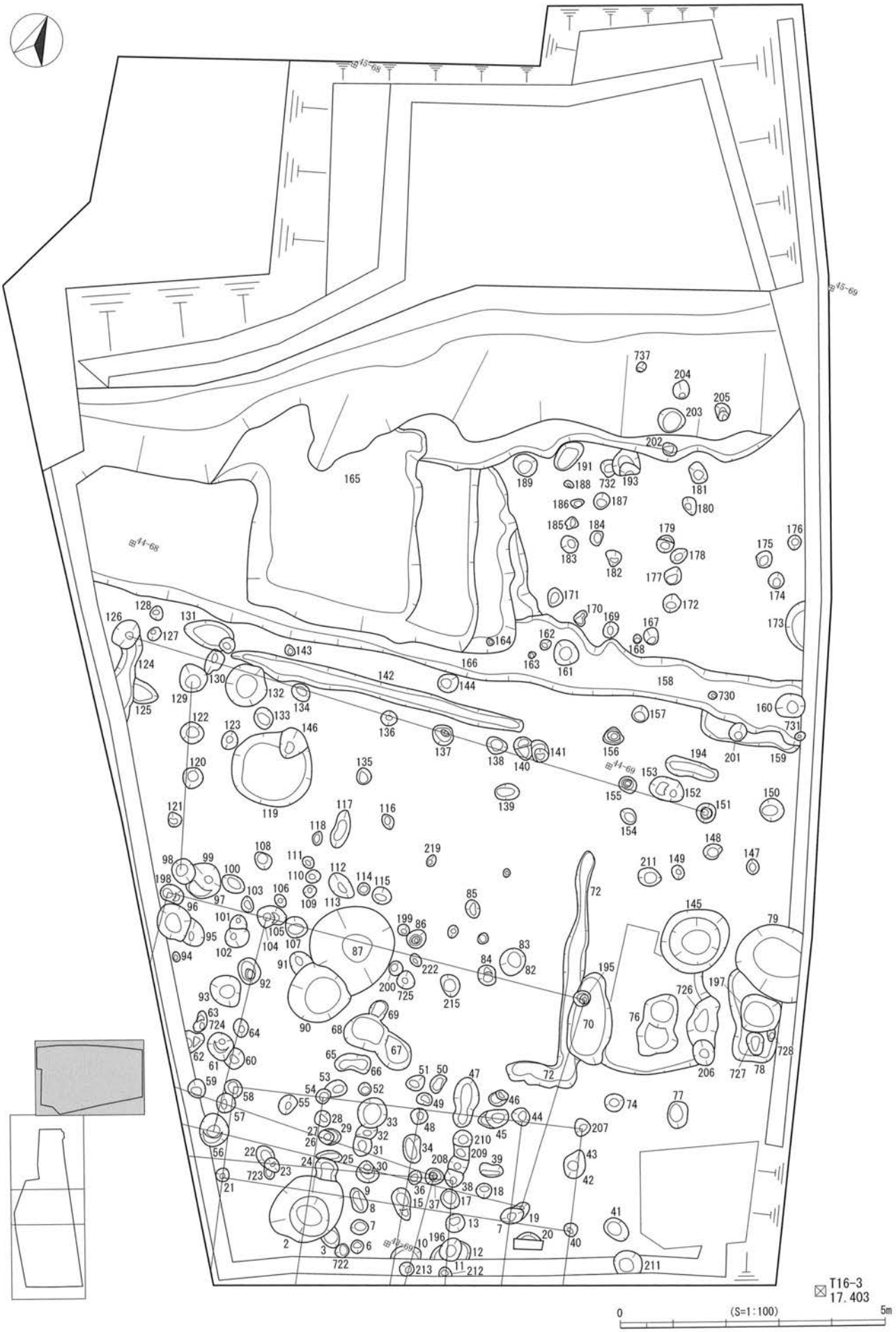
1　褐色土。にぶい黄色土大型のブロック。
2　灰黄褐色土。にぶい黄色土粒状少量混じる。炭化物小量混じる。
3　灰黄褐色土。にぶい黄色土・黒褐色土ブロック少量混じる。
4　3層に似るが、色調やや明るい。

ＳＰ263

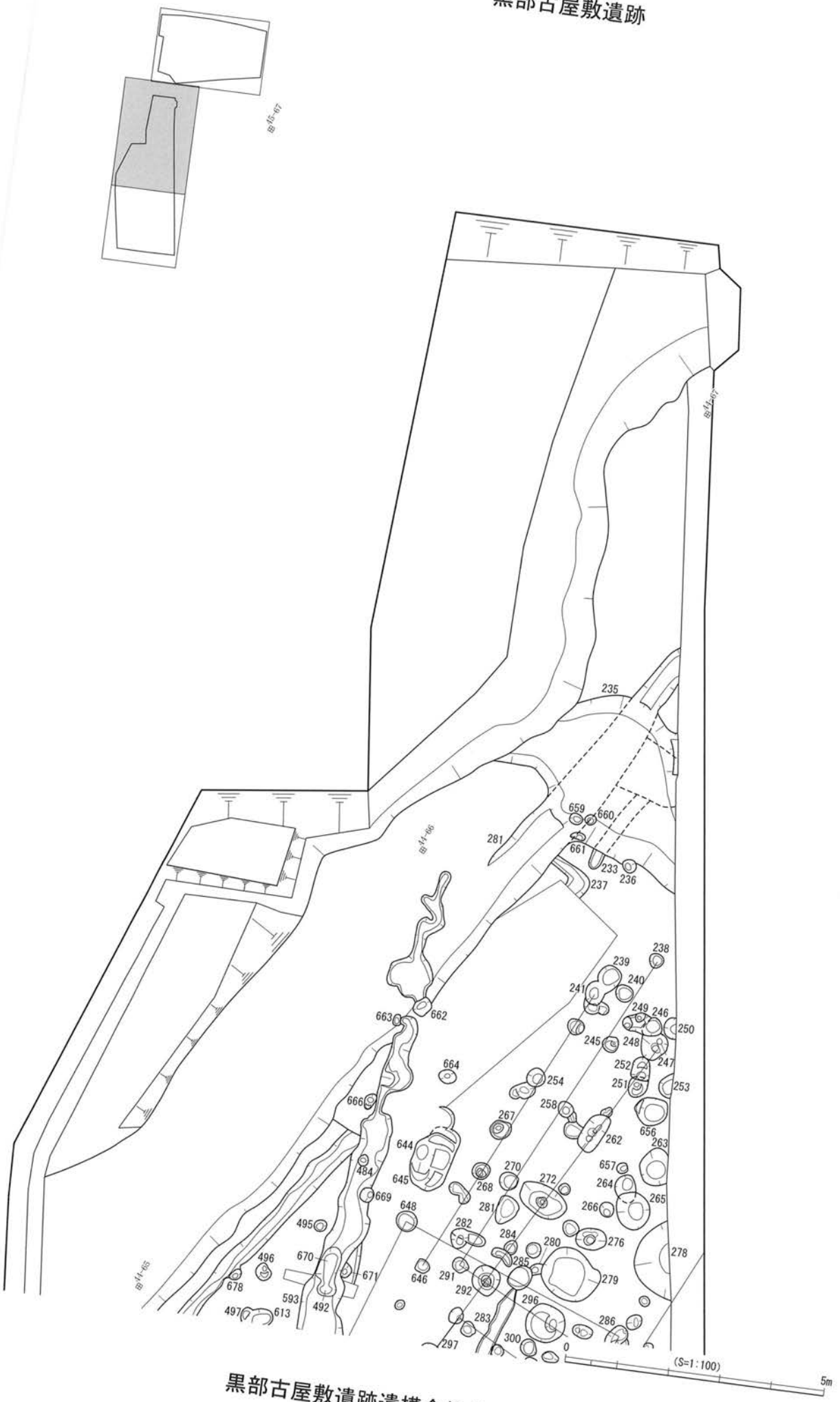
1　灰黄褐色土。にぶい黄色土粒少量混じる。炭化物極少ない。
2　灰黄褐色土。にぶい黄色土粒少量混じる。炭化物少ない。
3　にぶい黄褐色土。明黄褐色土粒少量混じる。炭化物少ない。
4　褐灰色土。浅黄色土ブロック1/4程度混じる。しまり強い。
5　褐灰色土。明黄褐色土ブロックがまだらに混じる。

黒部古屋敷遺跡遺構全体図

黒部古屋敷遺跡



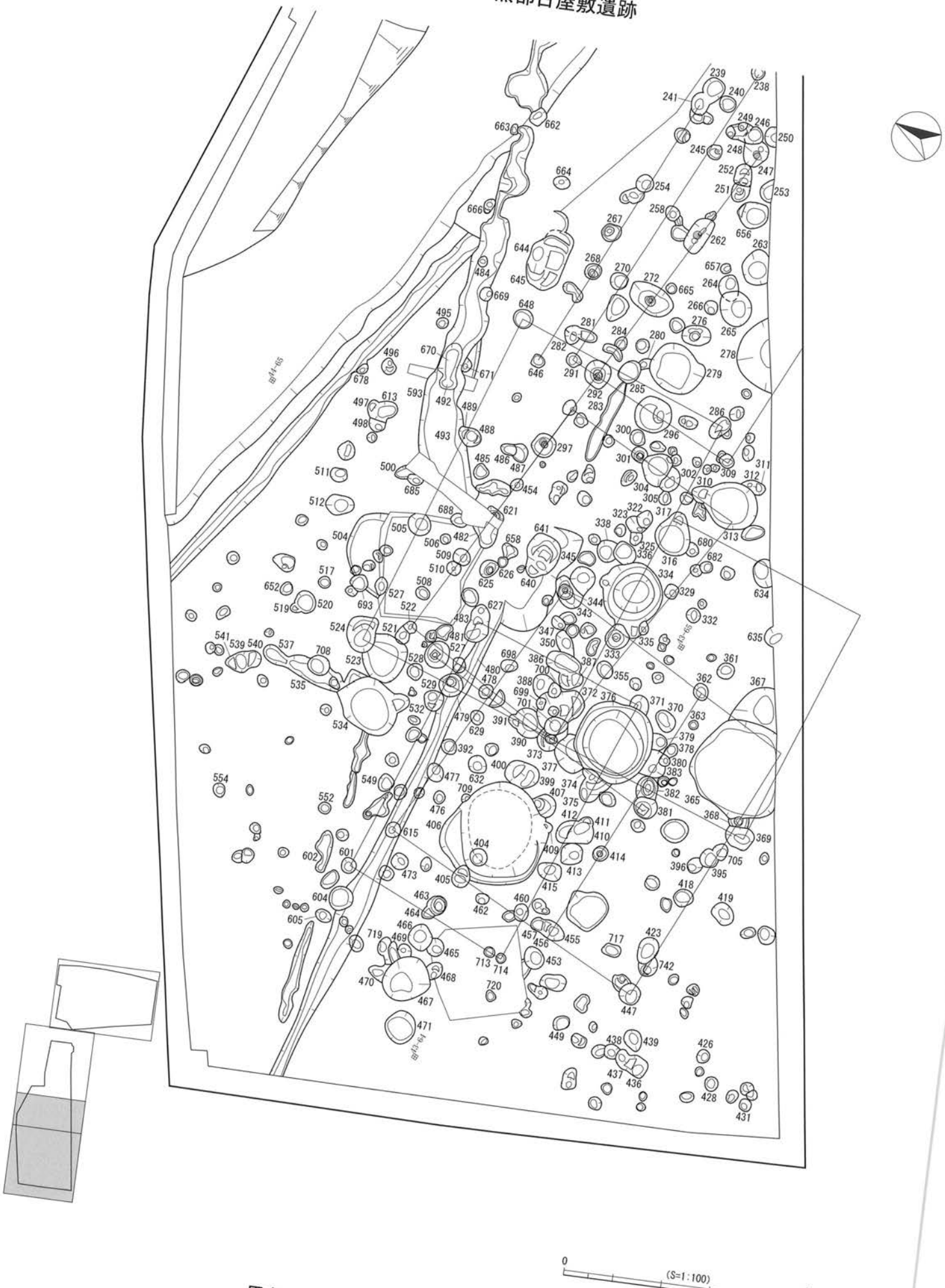
黒部古屋敷遺跡遺構全体分割図１



黒部古屋敷遺跡遺構全体分割図２

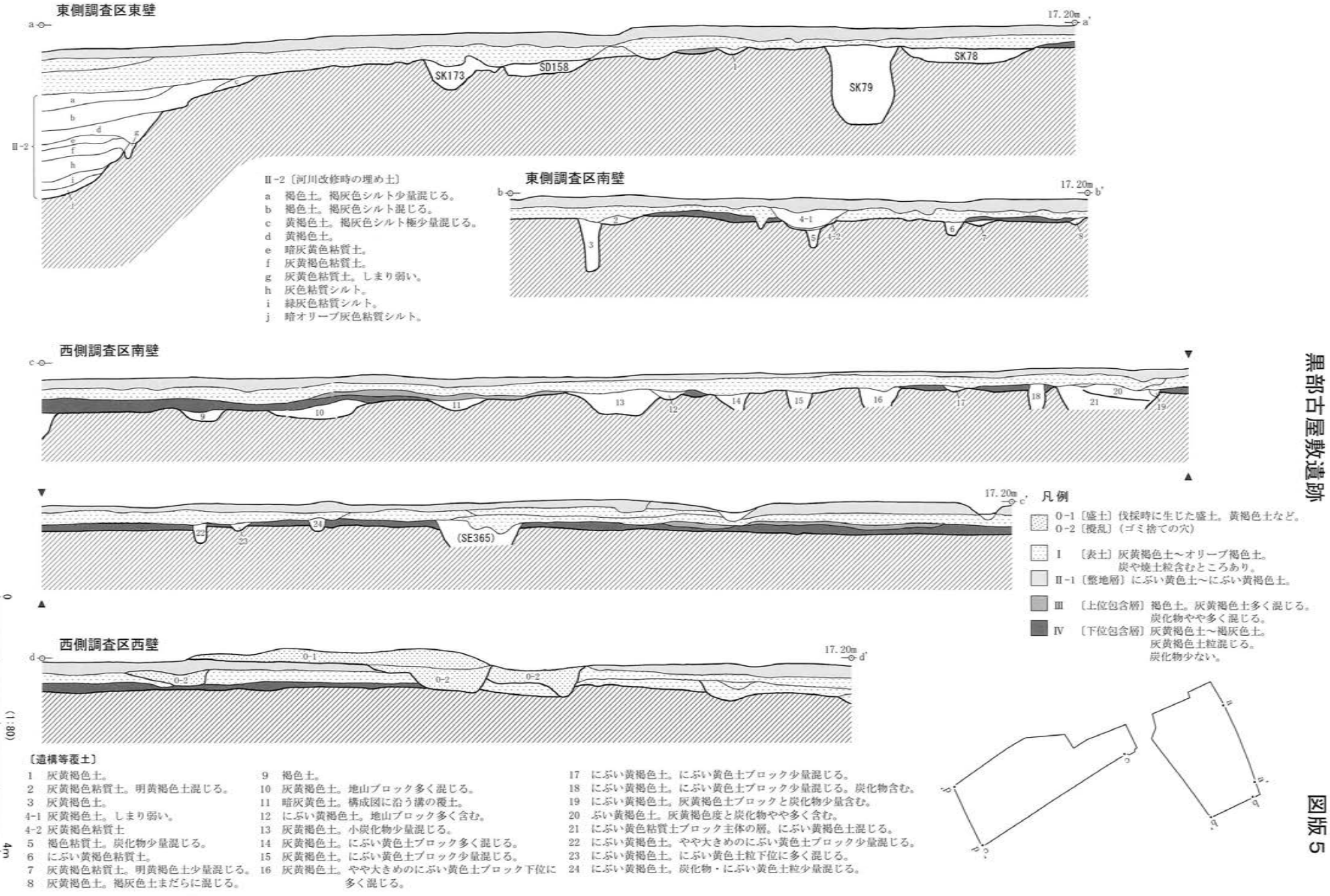
図版４

黒部古屋敷遺跡



黒部古屋敷遺跡遺構全体分割図３

黒部古屋敷遺跡基本土層図



Ⅱ-2〔河川改修時の埋め土〕
- a　褐色土。褐灰色シルト少量混じる。
- b　褐色土。褐灰色シルト混じる。
- c　黄褐色土。褐灰色シルト極少量混じる。
- d　黄褐色土。
- e　暗灰黄色粘質土。
- f　灰黄褐色粘質土。
- g　灰黄色粘質土。しまり弱い。
- h　灰色粘質シルト。
- i　緑灰色粘質シルト。
- j　暗オリーブ灰色粘質シルト。

〔遺構等覆土〕
1　灰黄褐色土。
2　灰黄褐色粘質土。明黄褐色土混じる。
3　灰黄褐色土。
4-1 灰黄褐色土。しまり弱い。
4-2 灰黄褐色粘質土
5　褐色粘質土。炭化物少量混じる。
6　にぶい黄褐色粘質土。
7　灰黄褐色粘質土。明黄褐色土少量混じる。
8　灰黄褐色土。褐灰色土まだらに混じる。
9　褐色土。
10　灰黄褐色土。地山ブロック多く混じる。
11　暗灰黄色土。構成図に沿う溝の覆土。
12　にぶい黄褐色土。地山ブロック多く含む。
13　灰黄褐色土。小炭化物少量混じる。
14　灰黄褐色土。にぶい黄色土ブロック多く混じる。
15　灰黄褐色土。にぶい黄色土ブロック少量混じる。
16　灰黄褐色土。やや大きめのにぶい黄色土ブロック下位に多く混じる。
17　にぶい黄褐色土。にぶい黄色土ブロック少量混じる。
18　にぶい黄褐色土。にぶい黄色土ブロック少量混じる。炭化物含む。
19　にぶい黄褐色土。灰黄褐色土ブロックと炭化物少量含む。
20　ぶい黄褐色土。灰黄褐色度と炭化物やや多く含む。
21　にぶい黄色粘質土ブロック主体の層。にぶい黄褐色土混じる。
22　にぶい黄褐色土。やや大きめのにぶい黄色土ブロック少量混じる。
23　にぶい黄褐色土。にぶい黄色土粒下位に多く混じる。
24　にぶい黄褐色土。炭化物・にぶい黄色土粒少量混じる。

凡例
- 0-1〔盛土〕伐採時に生じた盛土。黄褐色土など。
- 0-2〔攪乱〕（ゴミ捨ての穴）
- Ⅰ　〔表土〕灰黄褐色土～オリーブ褐色土。炭や焼土粒含むところあり。
- Ⅱ-1〔整地層〕にぶい黄色土～にぶい黄褐色土。
- Ⅲ　〔上位包含層〕褐色土。灰黄褐色土多く混じる。炭化物やや多く混じる。
- Ⅳ　〔下位包含層〕灰黄褐色土～褐灰色土。灰黄褐色土粒混じる。炭化物少ない。

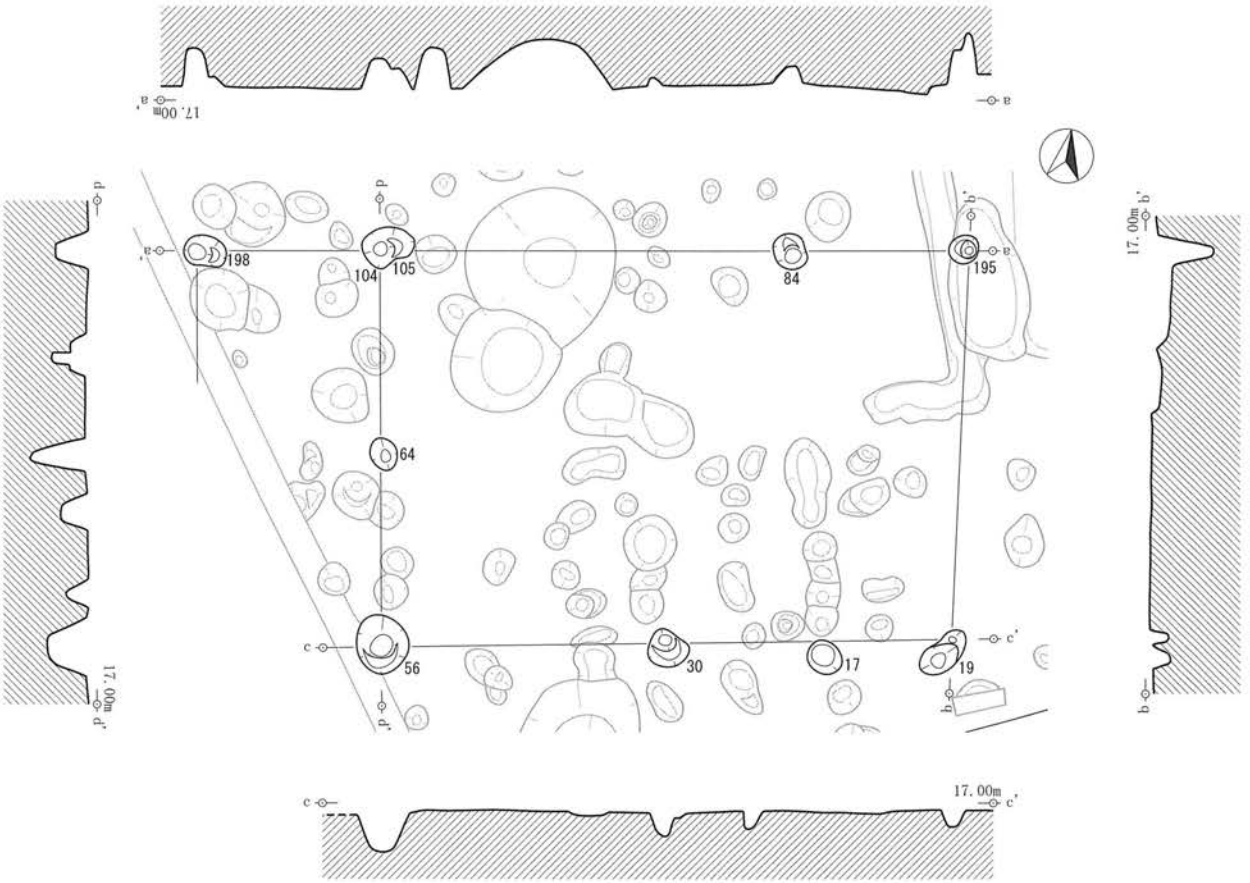
黒部古屋敷遺跡

図版5

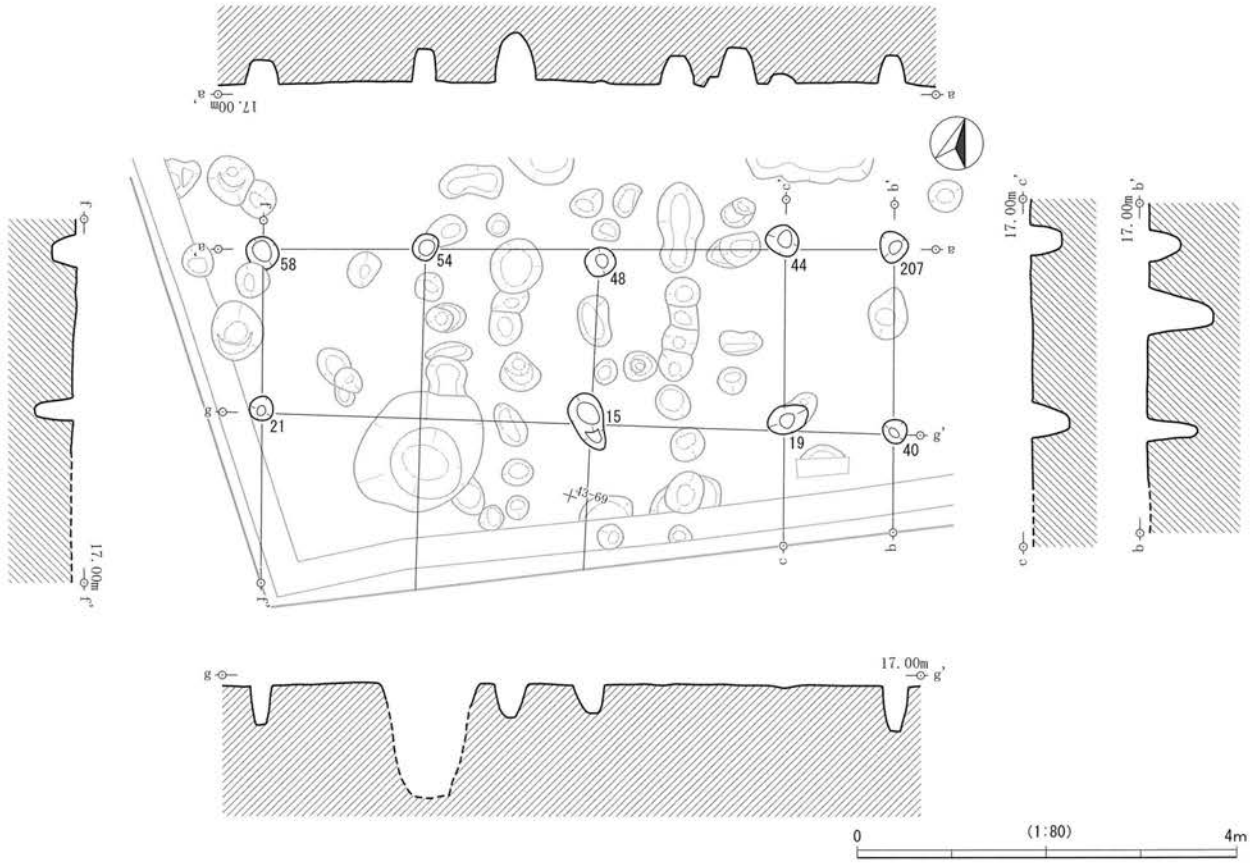
図版６

黒部古屋敷遺跡

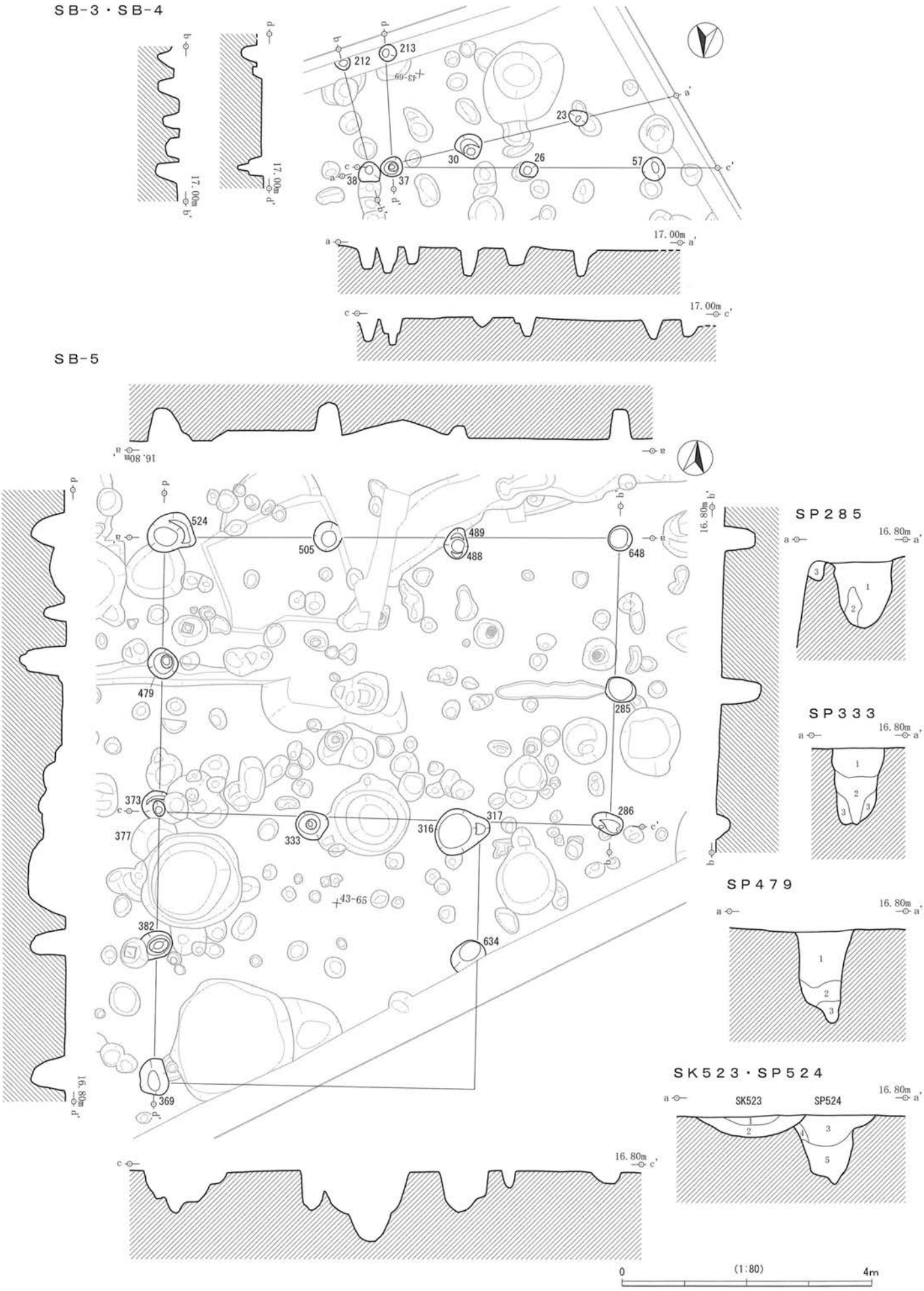
SB-1



SB-2

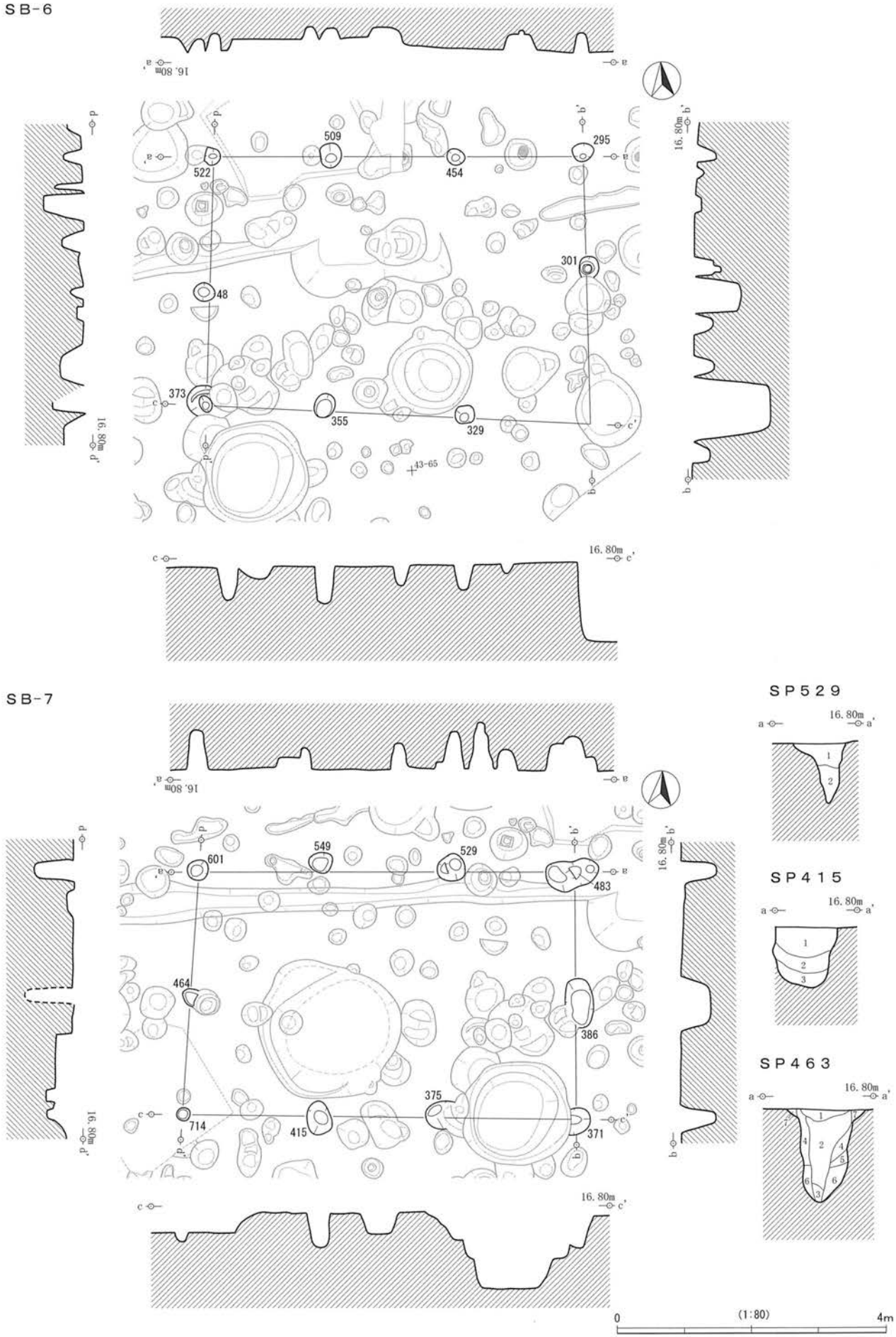


黒部古屋敷遺跡遺構個別図１

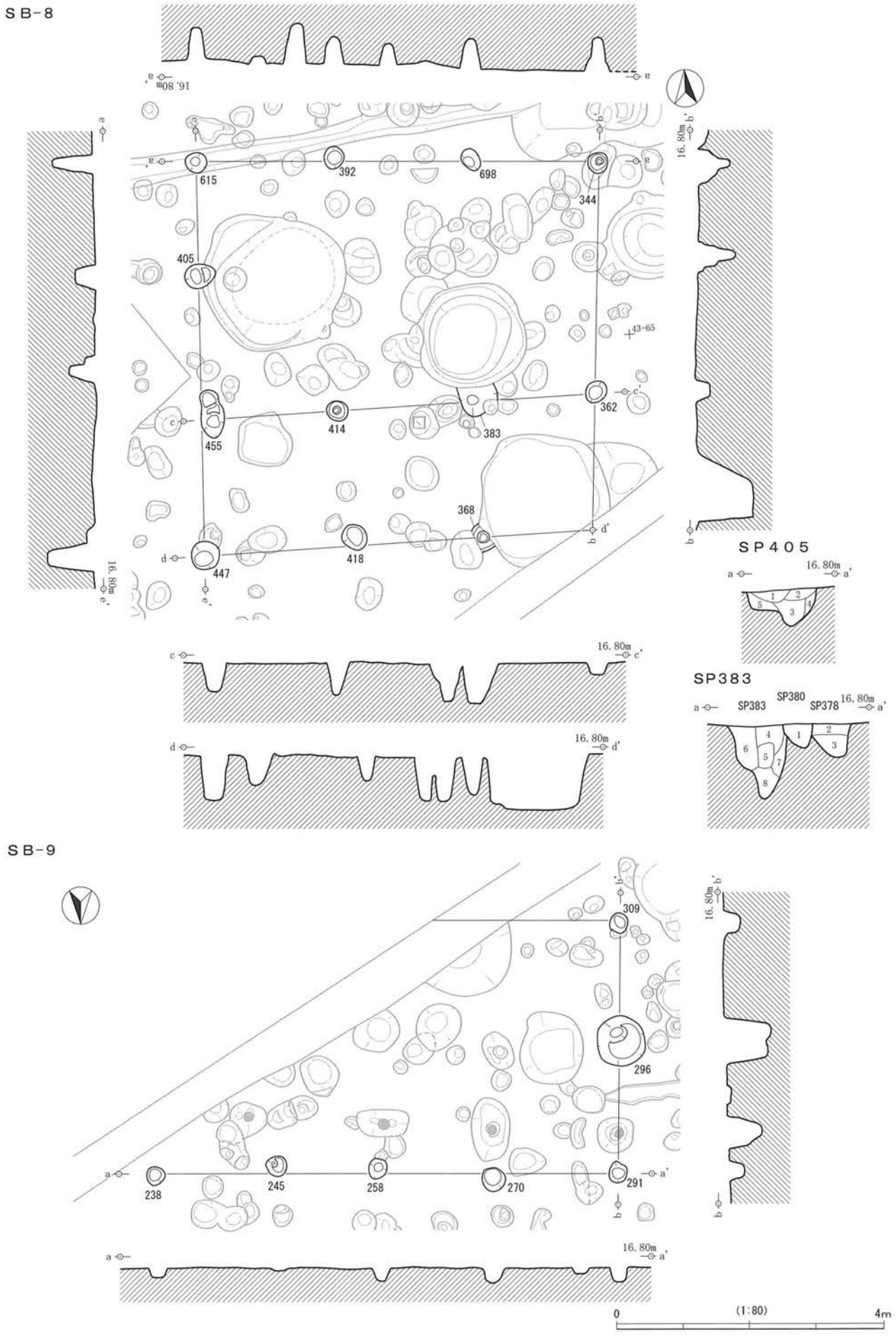


黒部古屋敷遺跡遺構個別図２

黒部古屋敷遺跡

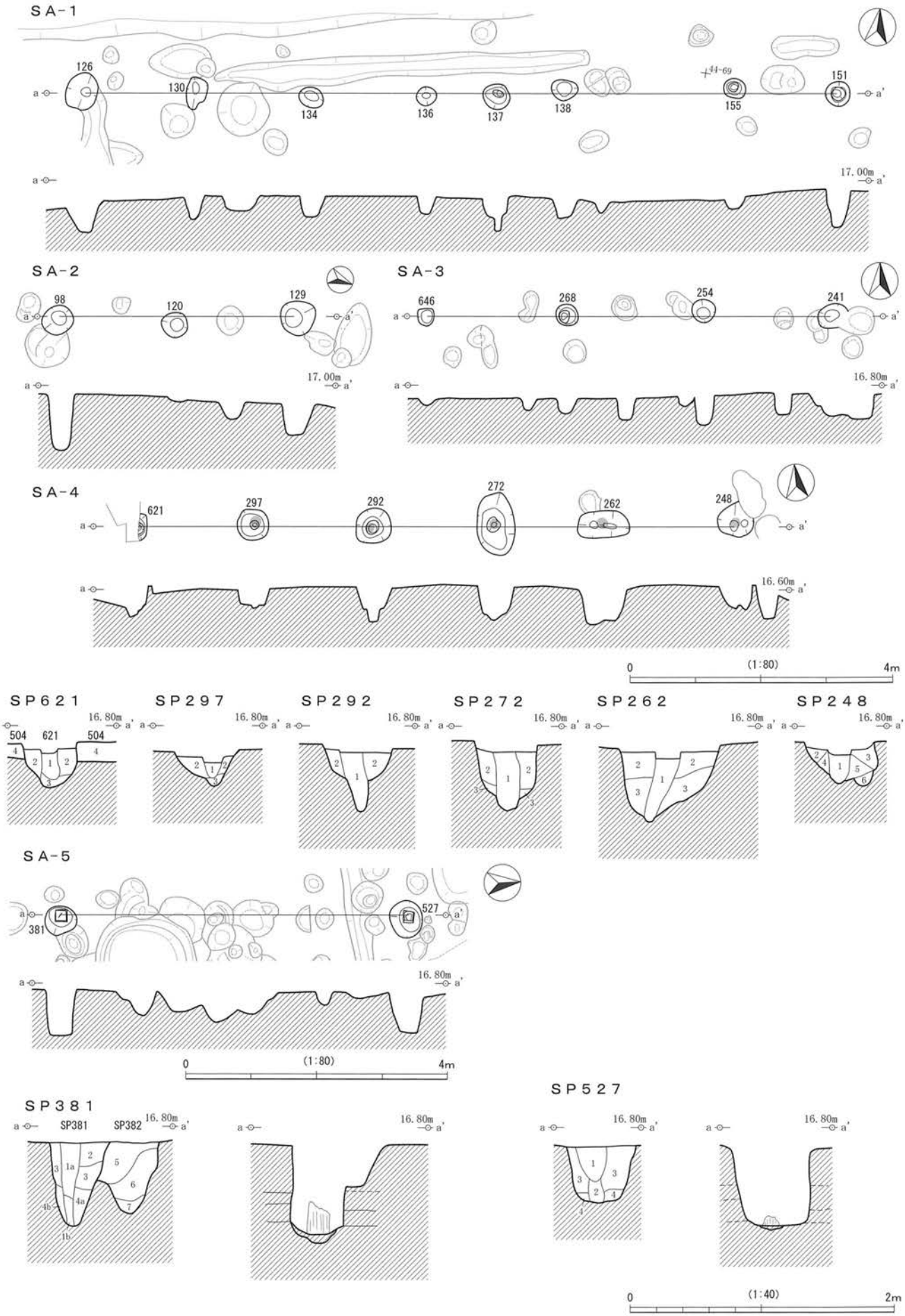


黒部古屋敷遺跡遺構個別図３



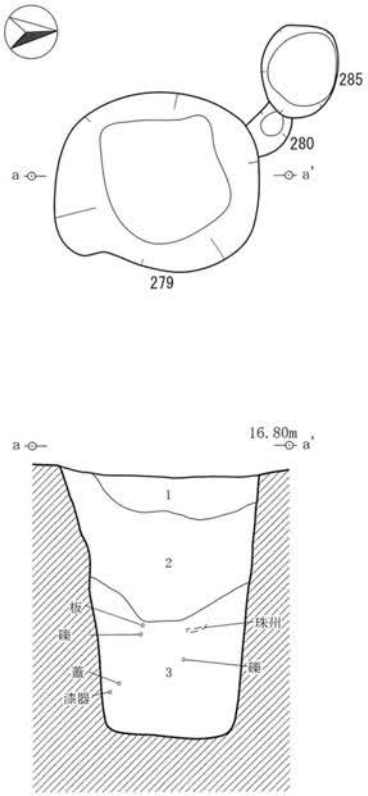
黒部古屋敷遺跡遺構個別図４

黒部古屋敷遺跡

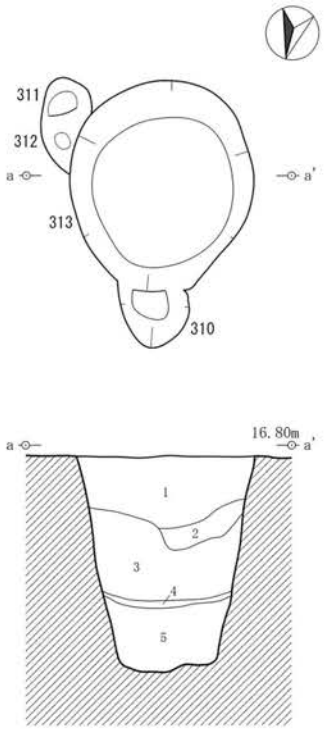


黒部古屋敷遺跡遺構個別図５

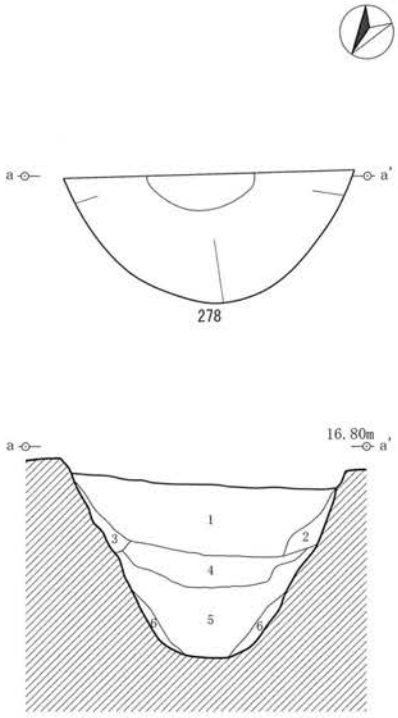
SE279



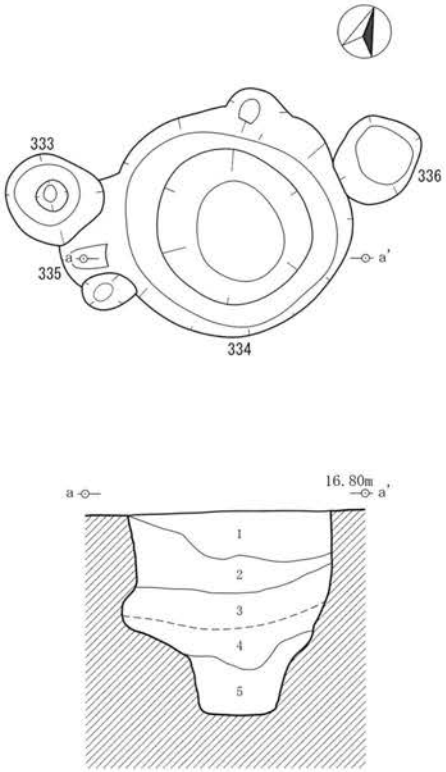
SE313



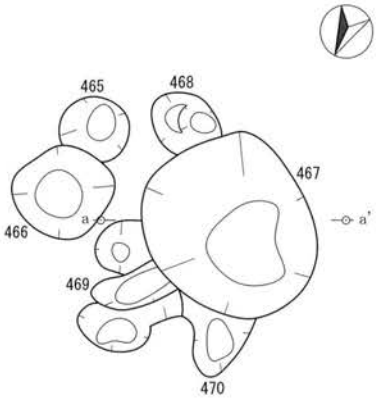
SE278



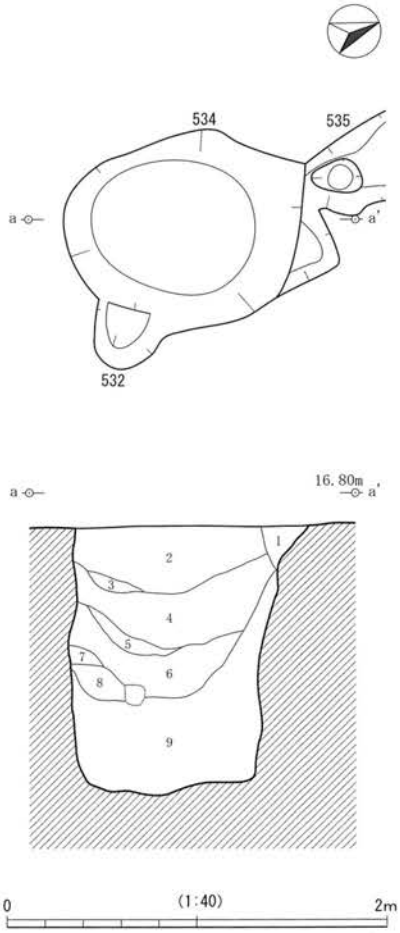
SE334



SE467



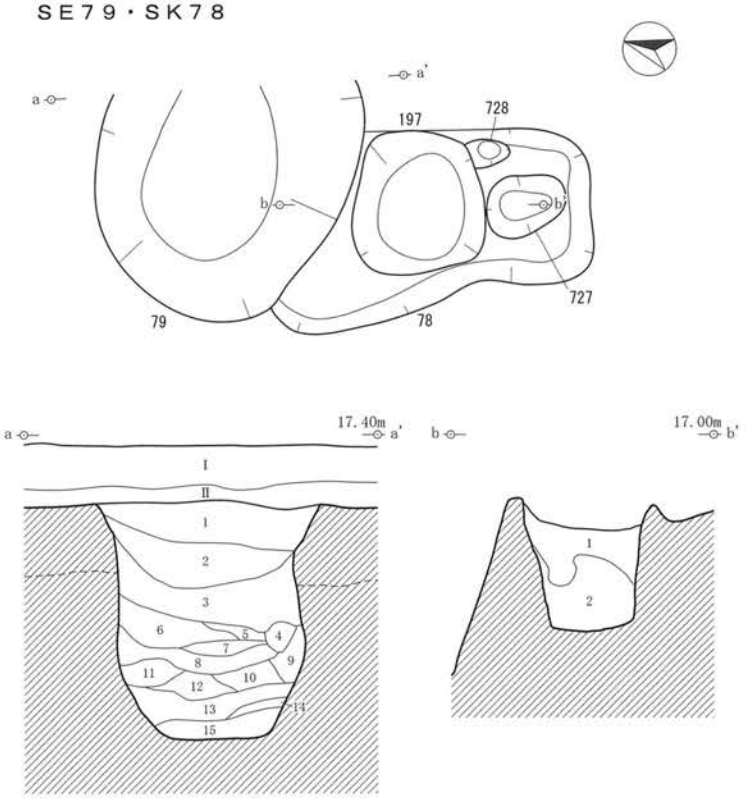
SE534



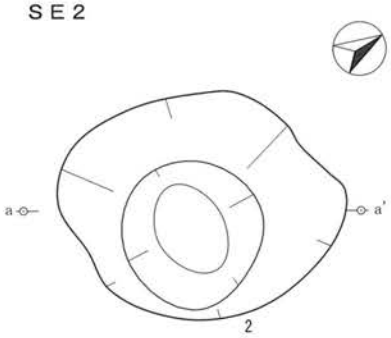
黒部古屋敷遺跡遺構個別図６

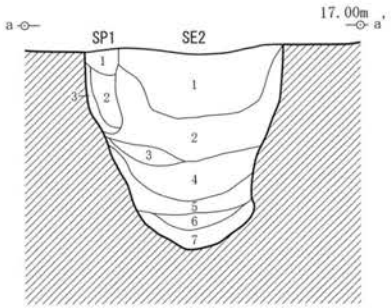
黒部古屋敷遺跡

SE79・SK78

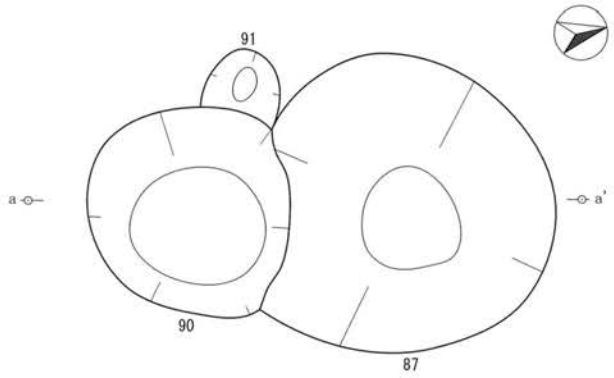


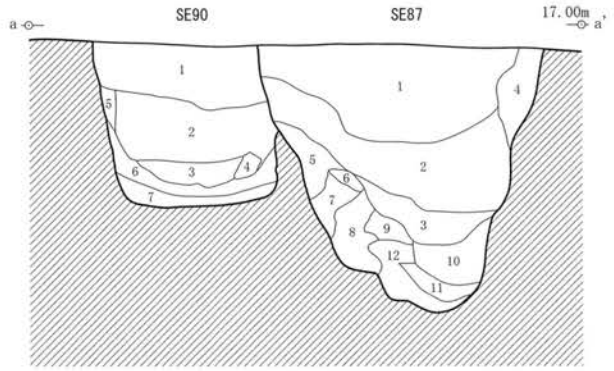
SE2



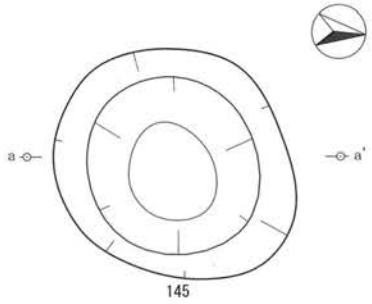


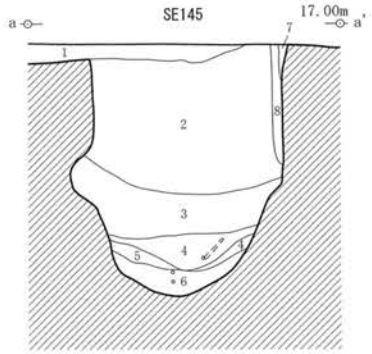
SE87・SE90

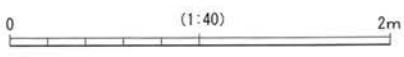




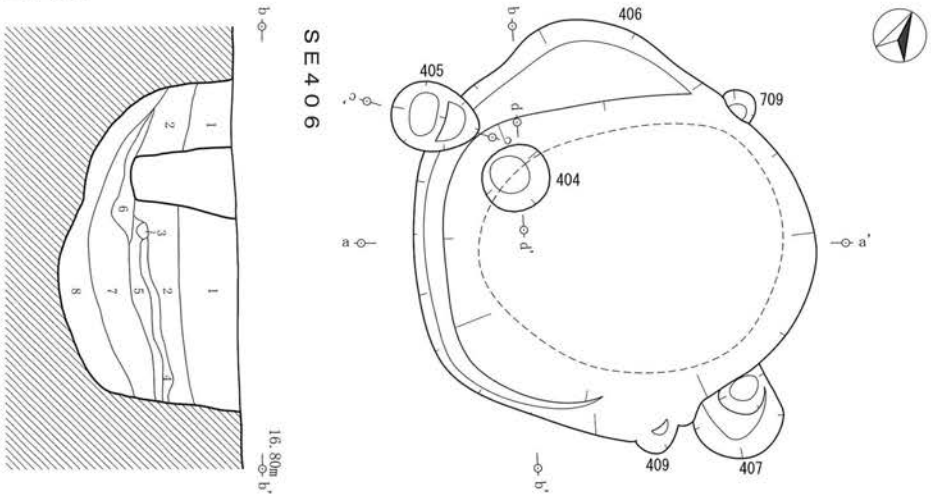
SE145



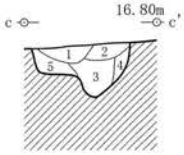




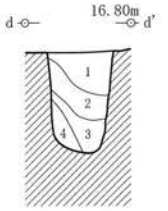
SE406



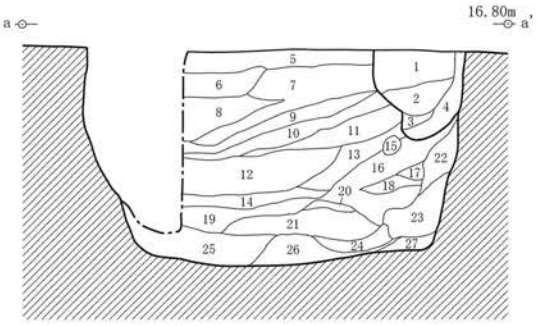
SP405



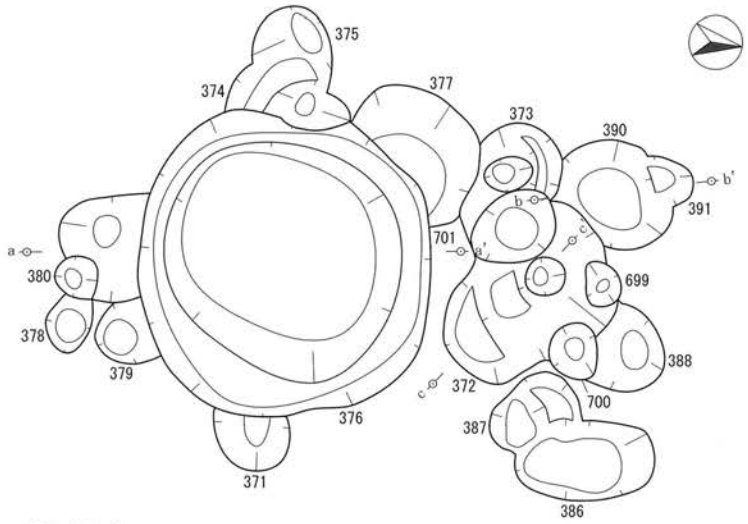
SP404



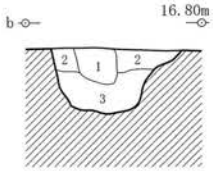
SE406



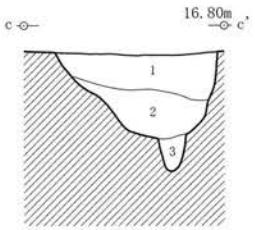
SE376



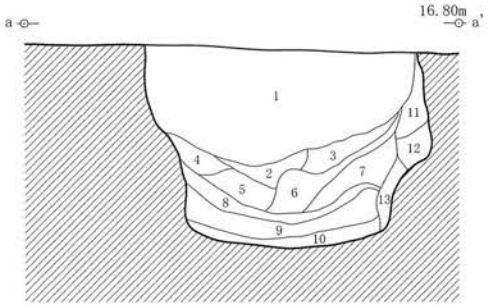
SP390



SK372



SE376

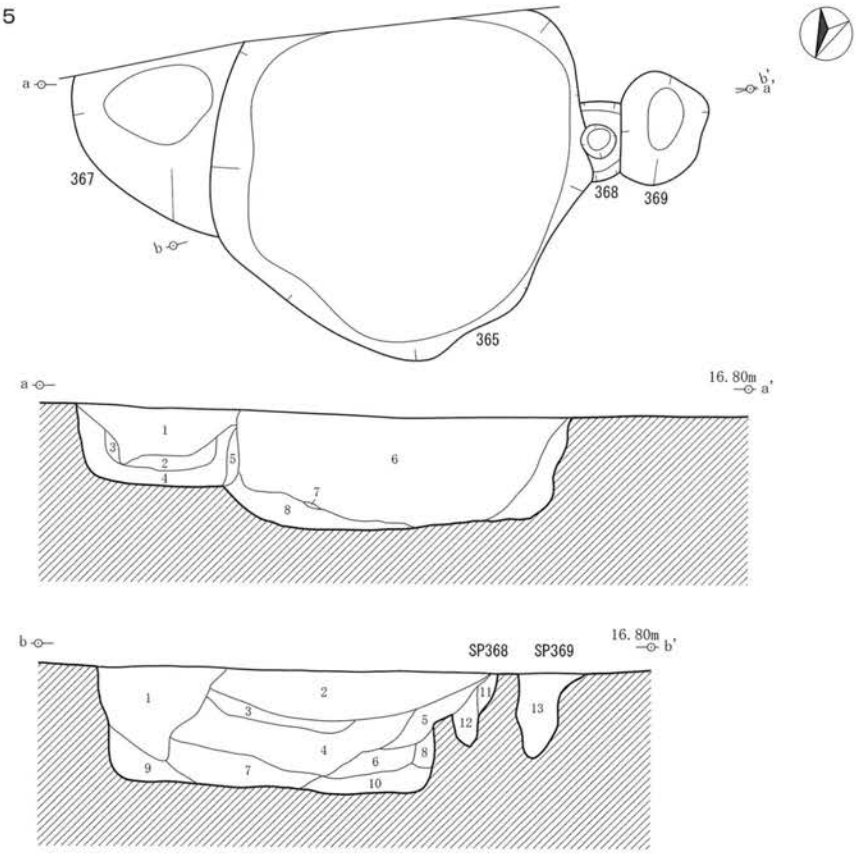


0　(1:40)　2m

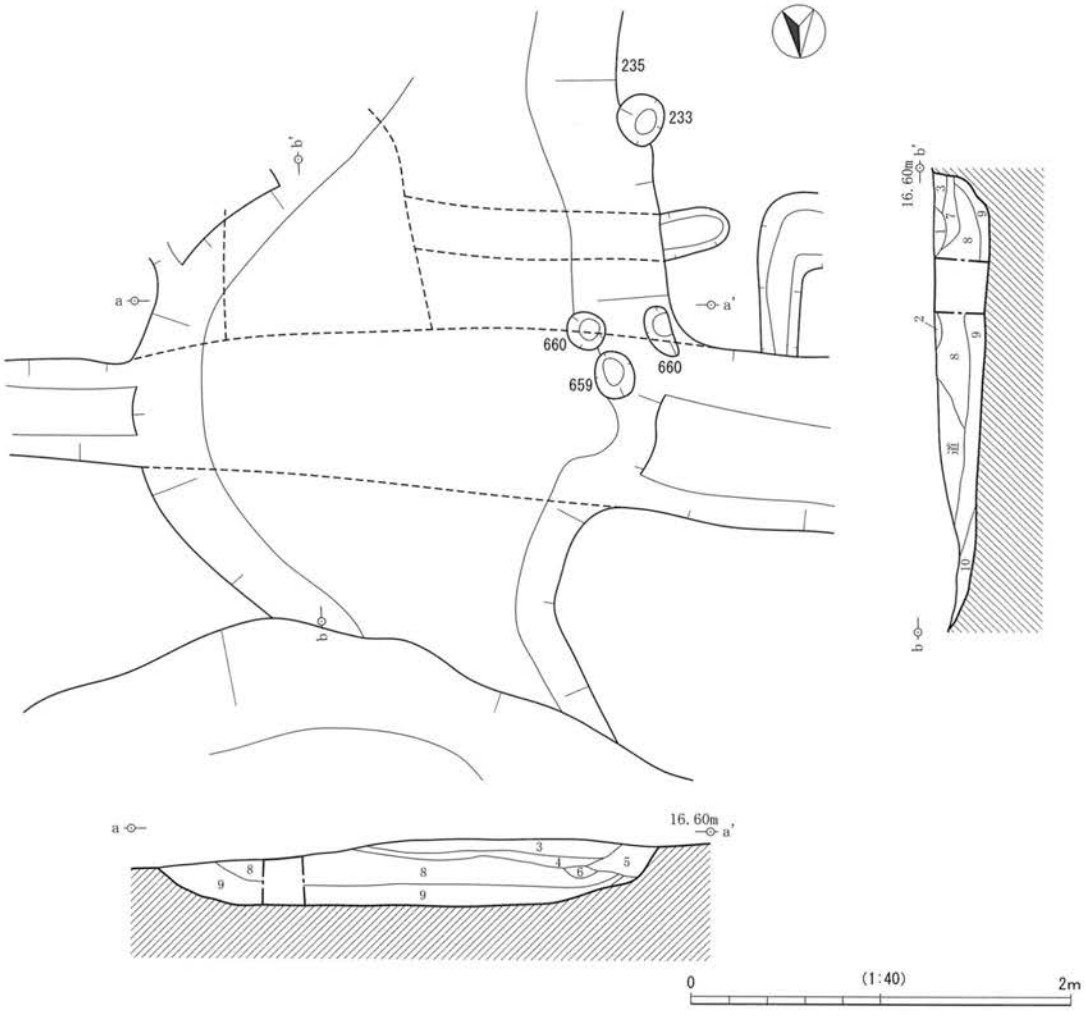
黒部古屋敷遺跡遺構個別図８

黒部古屋敷遺跡

SK367・SE365



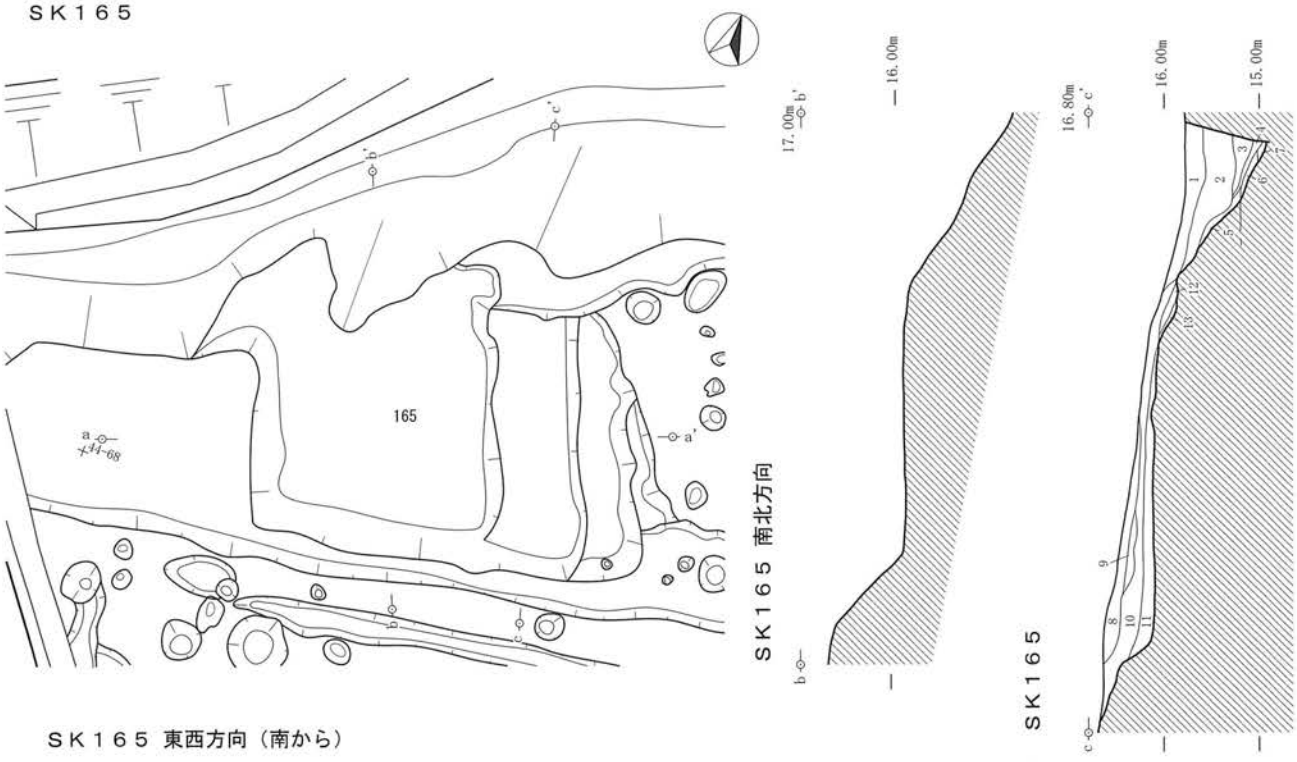
SK235



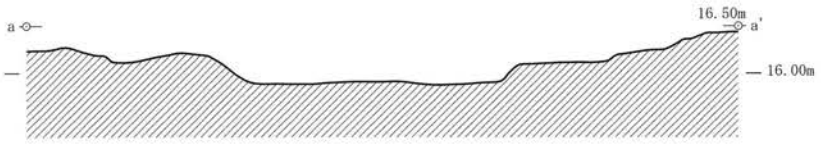
0 (1:40) 2m

黒部古屋敷遺跡遺構個別図９

SK165



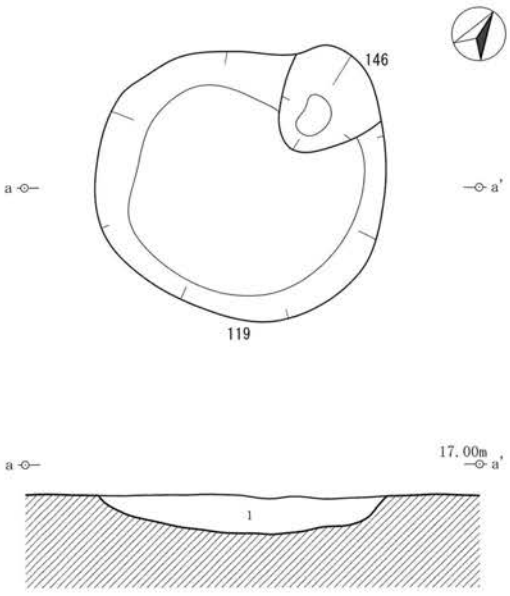
SK165 東西方向（南から）



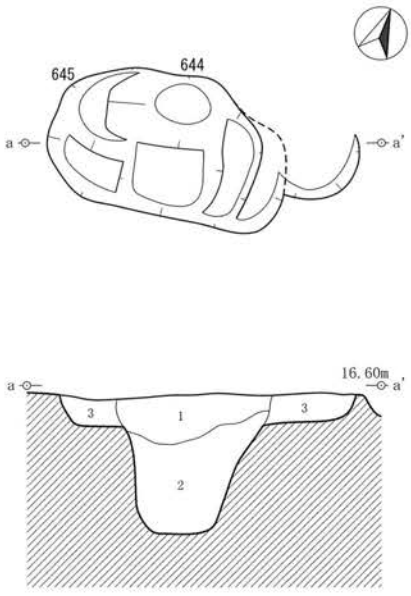
（平面図）
0　(S=1:100)　5m

（土層図）
0　(1:80)　4m

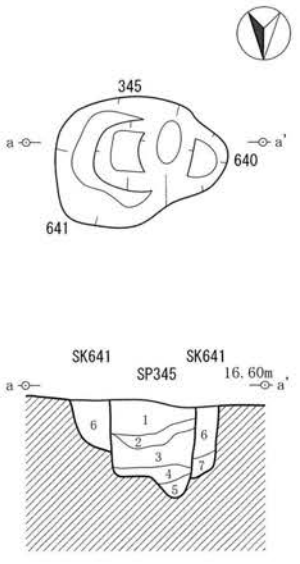
SK119



SK644・SK645



SP345・SK641

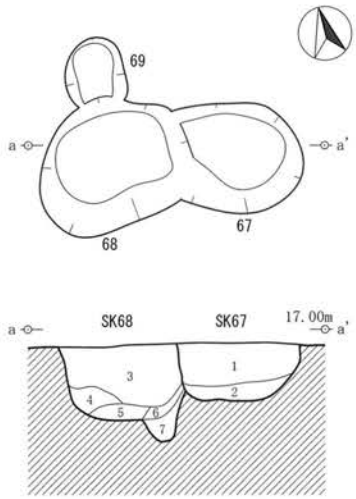


0　(1:40)　2m

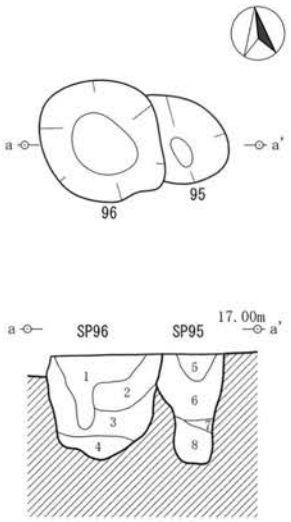
黒部古屋敷遺跡遺構個別図１０

黒部古屋敷遺跡

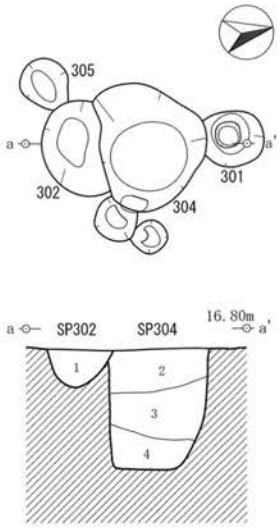
SK68・SK67



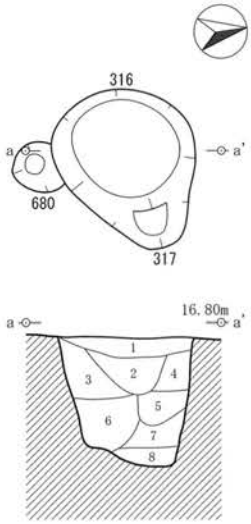
SP96・SP95



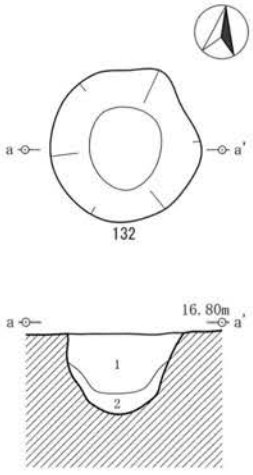
SP302・SP304



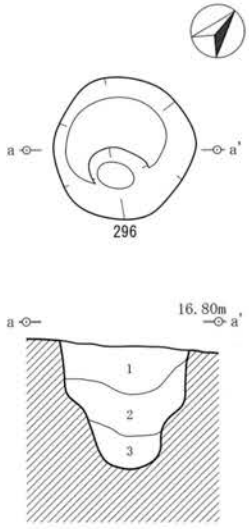
SP316



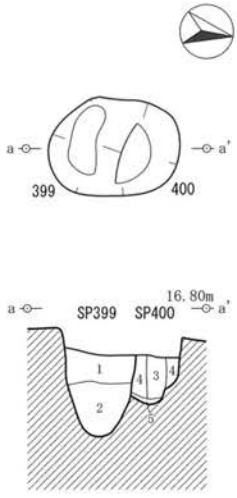
SK132



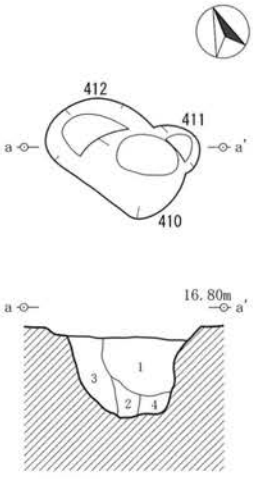
SP296



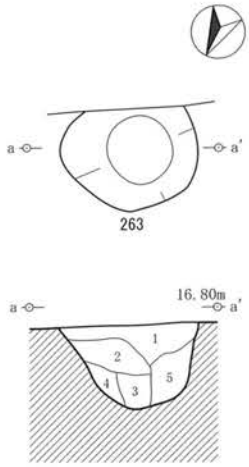
SP400

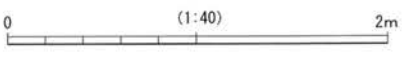


SP410

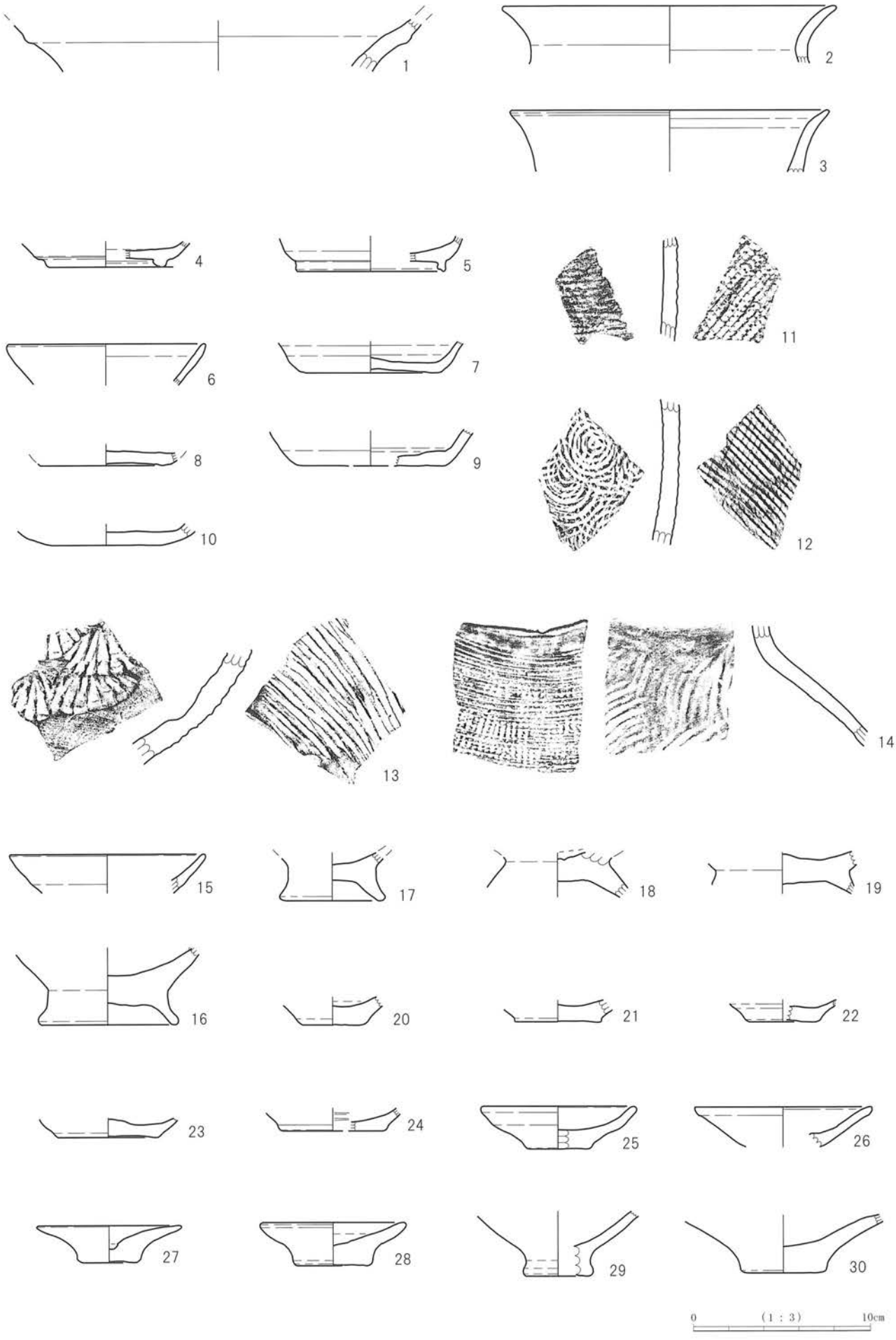


SP263

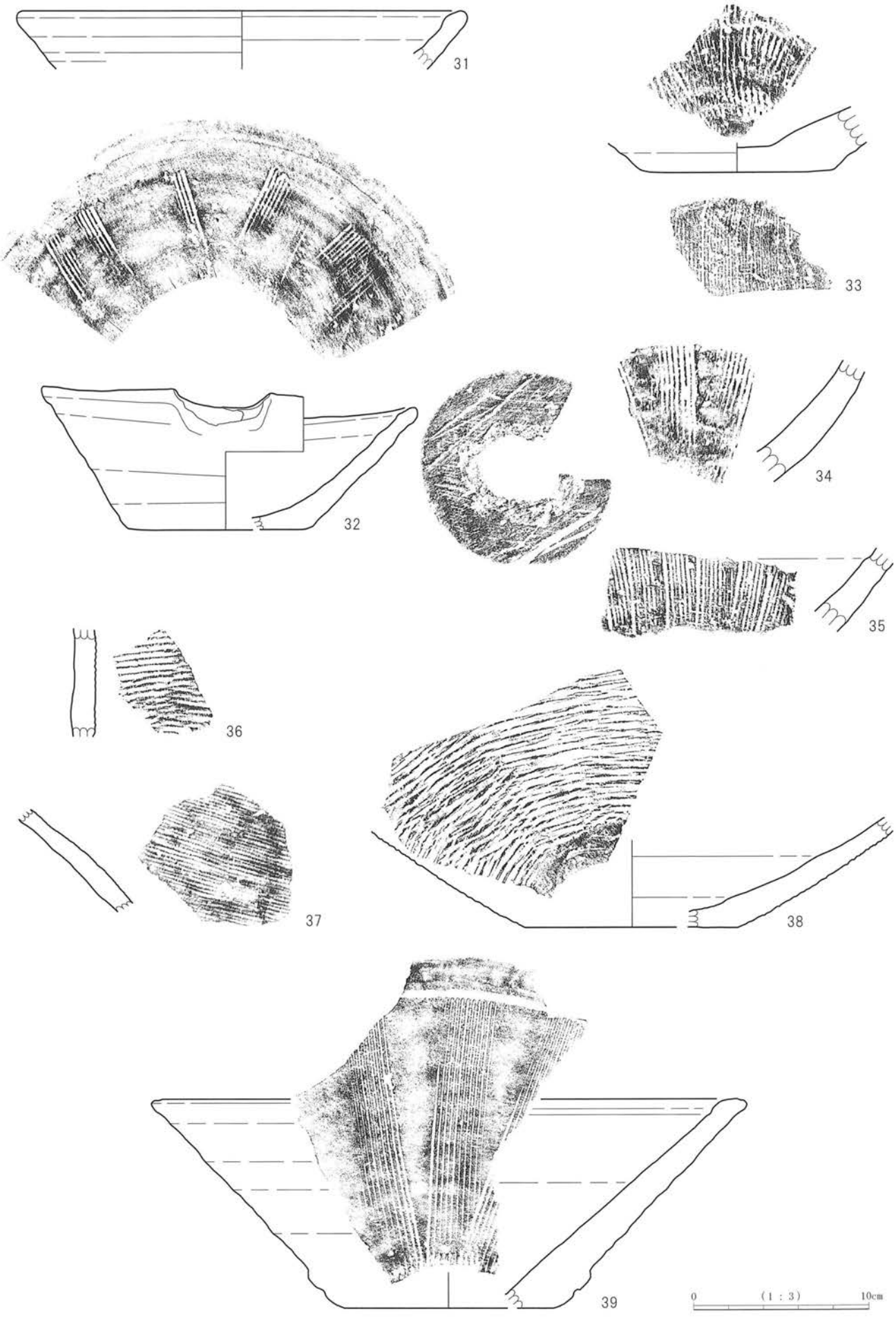


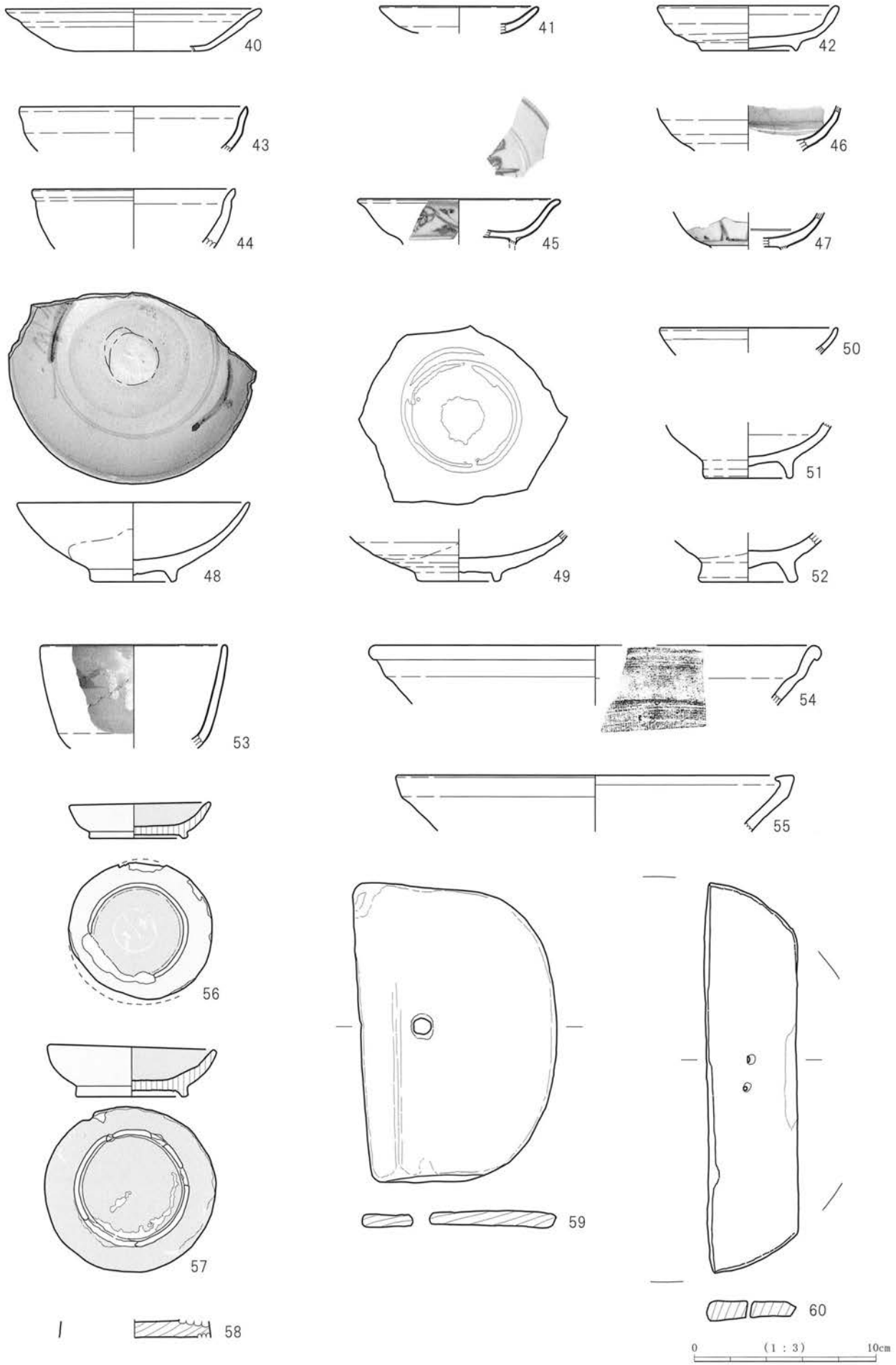


黒部古屋敷遺跡遺構個別図１１


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
17
18
19
16
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0 (1 : 3) 10cm

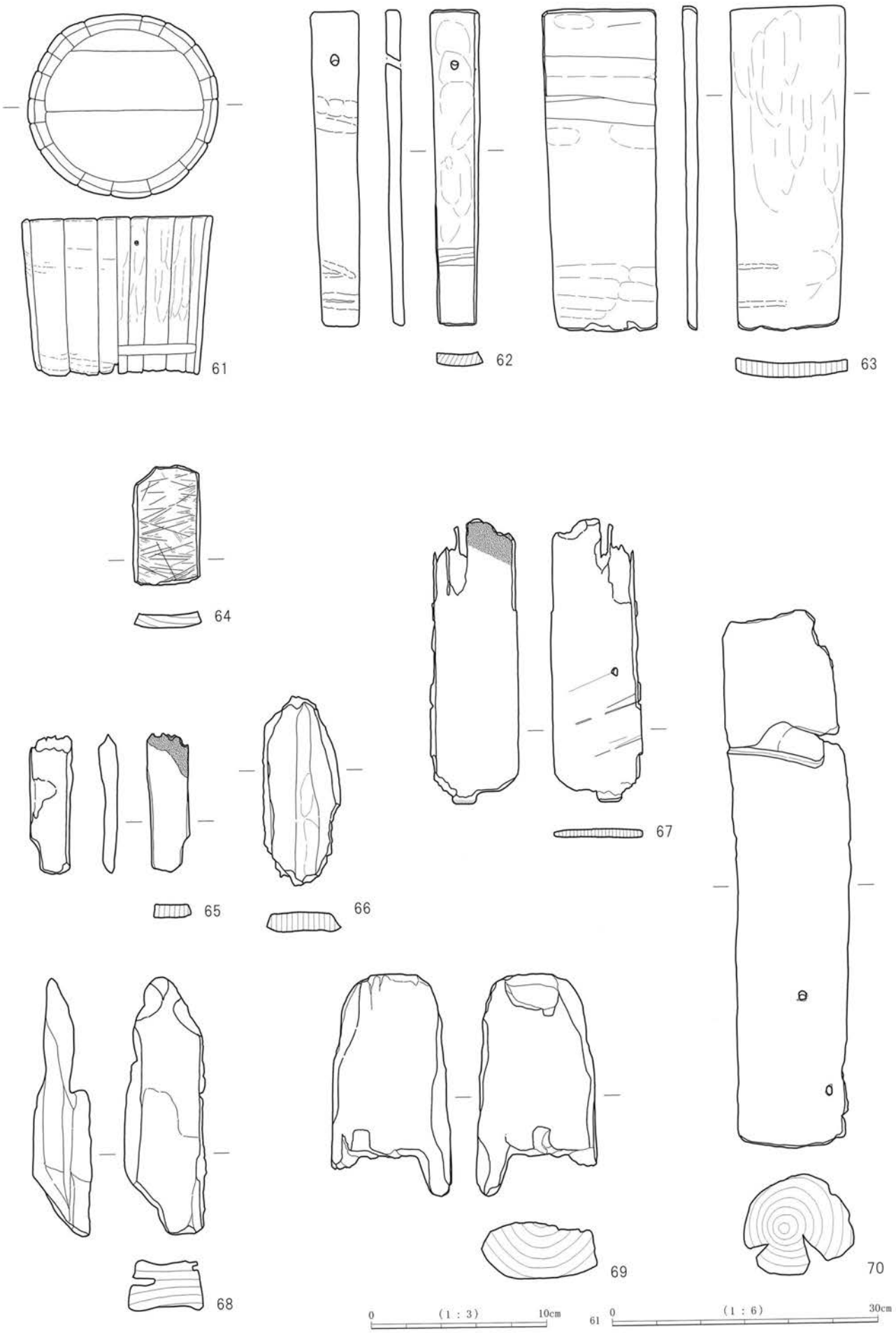
黒部古屋敷遺跡

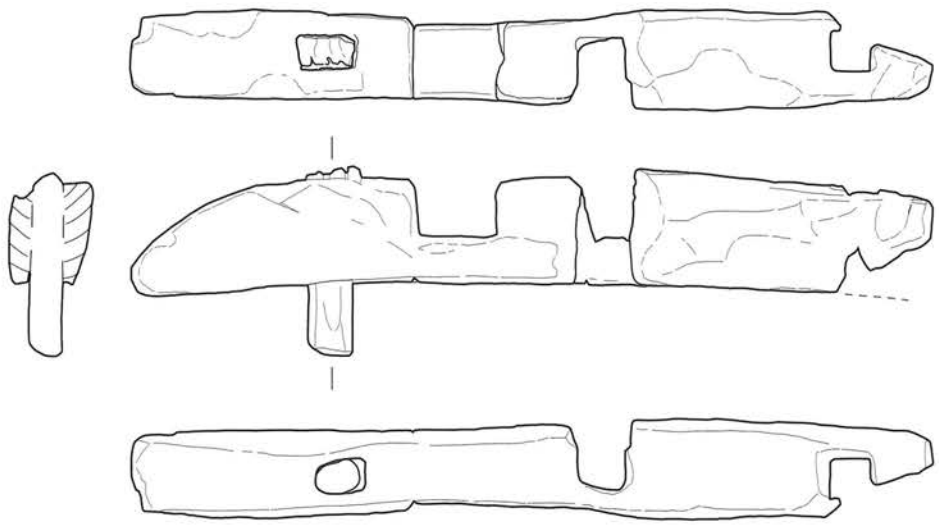


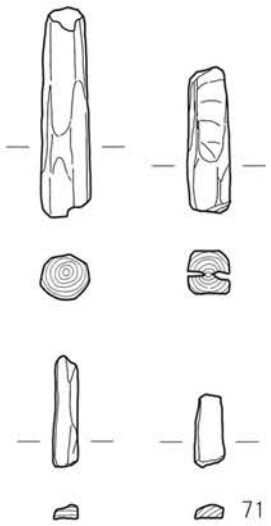

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
(1 : 3)
10cm

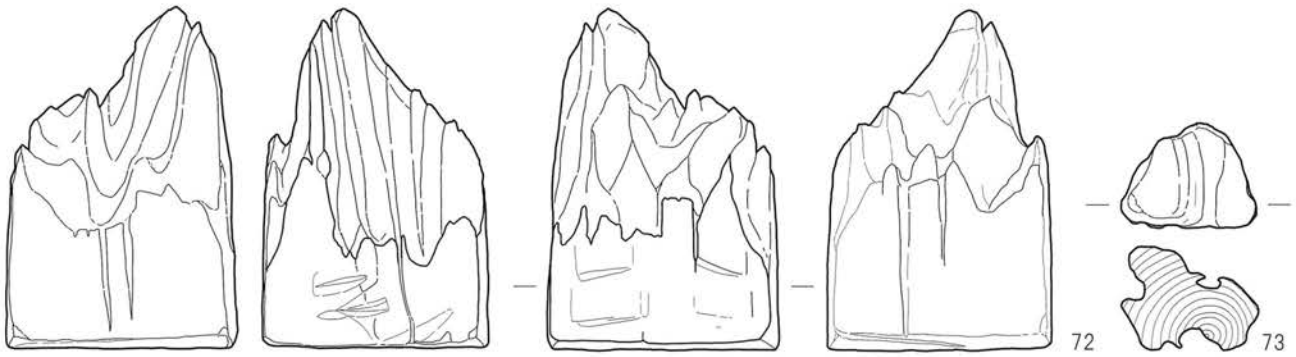
図版20

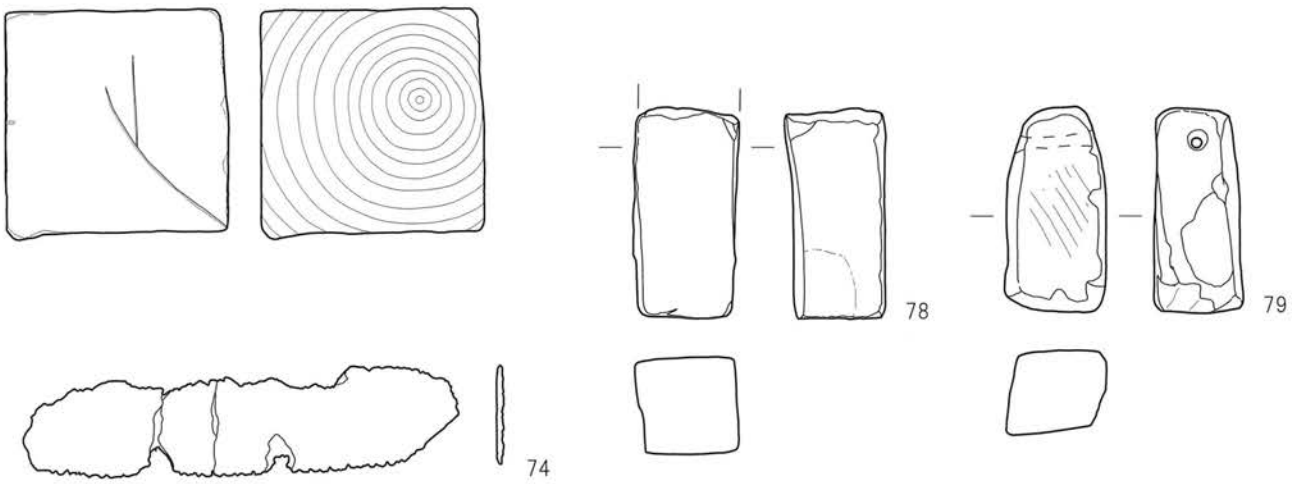
黒部古屋敷遺跡

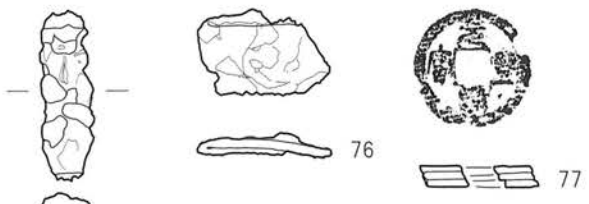






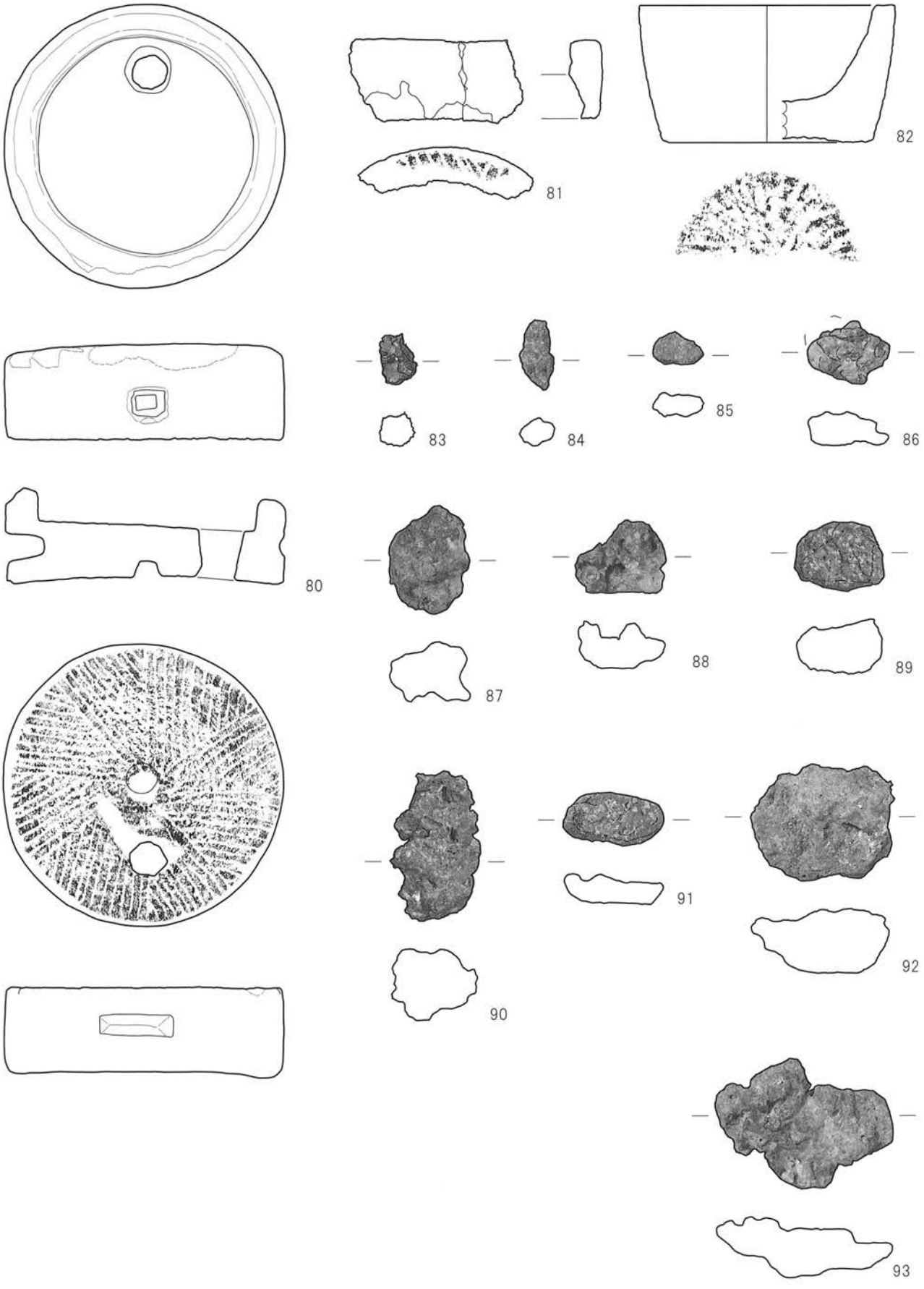


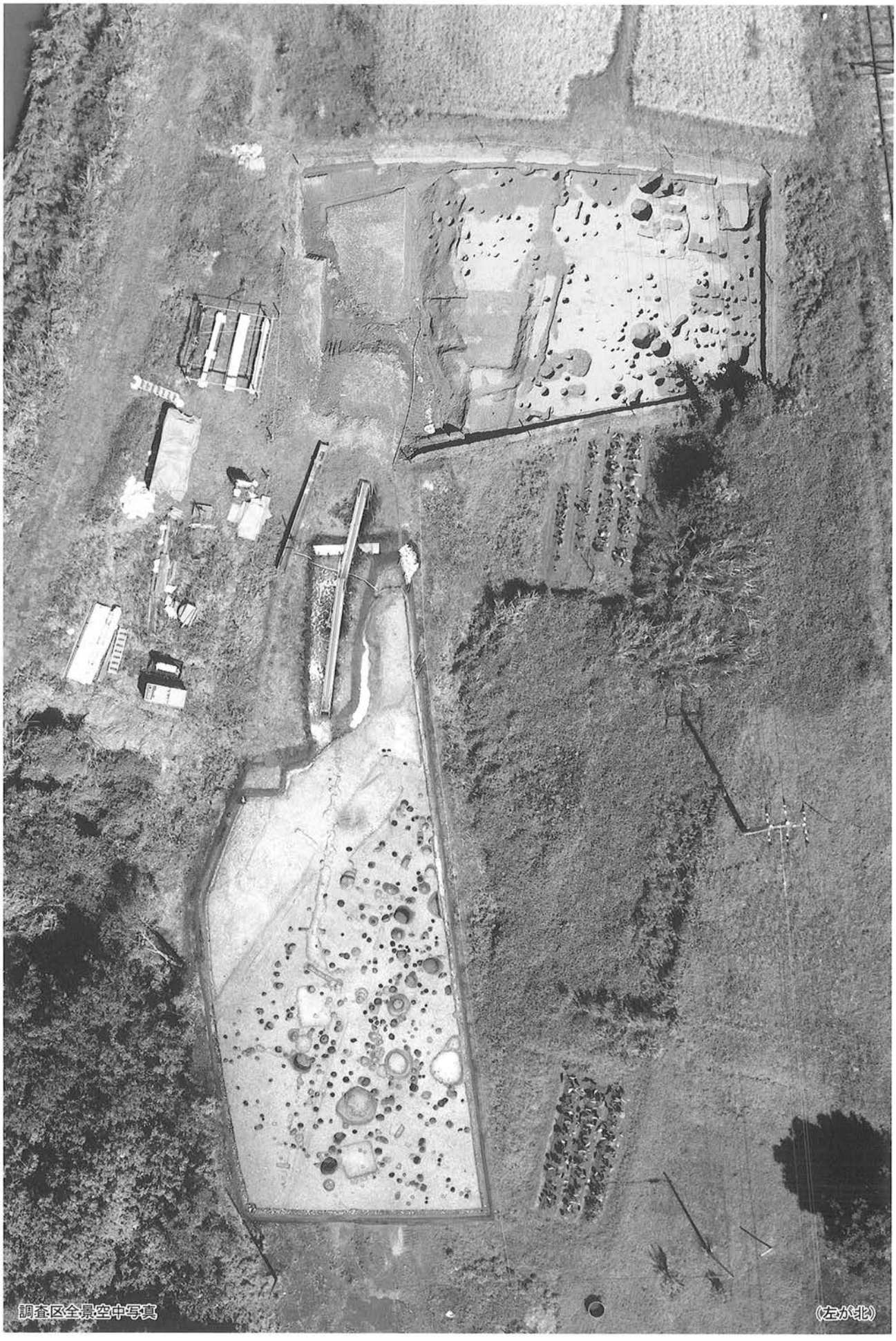




0　(1：3)　10cm　　0　77 (2：3)　5cm　　0　72 (1：6)　30cm

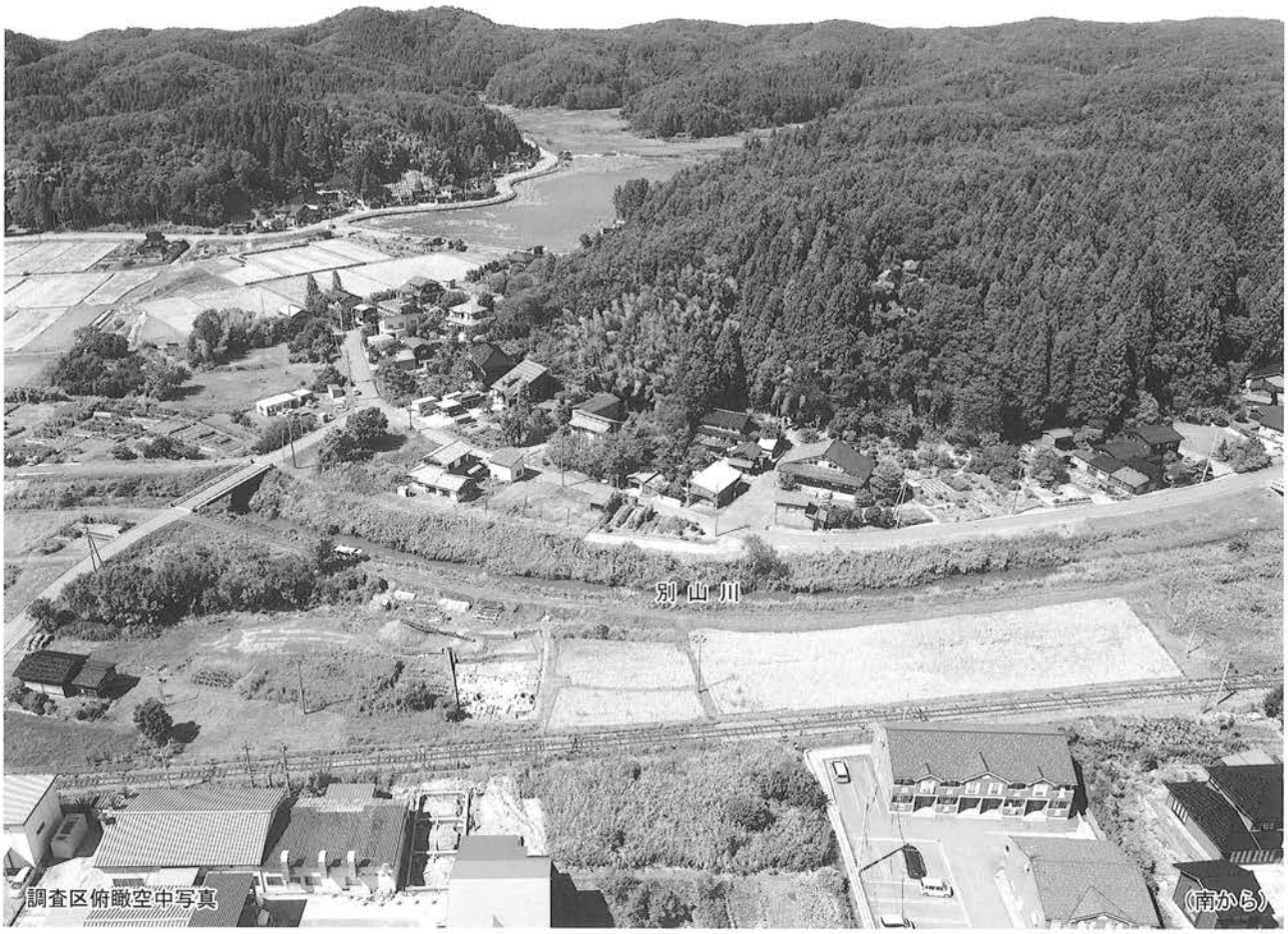
黒部古屋敷遺跡





調査区全景空中写真　(左が北)

図版24



東側調査区完掘近景　（北から）

東側調査区完掘近景　（東から）

東側調査区完掘近景　（東から）

東側調査区完掘近景　（南から）

西側調査区完掘近景　（南東から）

西側調査区完掘近景　（南東から）

西側調査区完掘近景　（西から）

西側調査区完掘近景　（南西から）

図版26

東側調査区東壁北部

東側調査区東壁中央部

東側調査区南壁

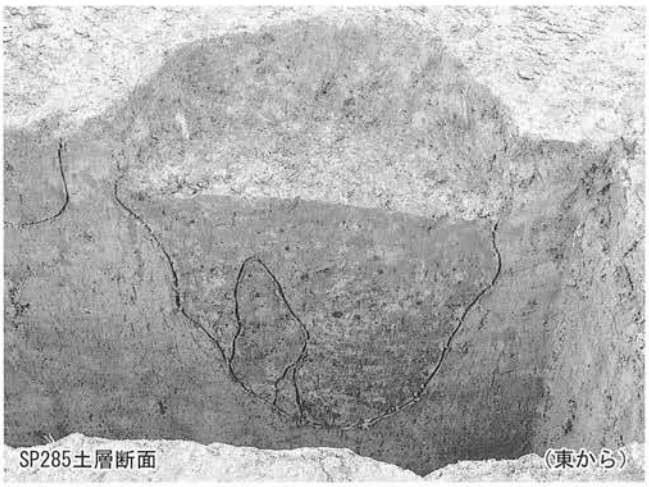
西側調査区南壁東部

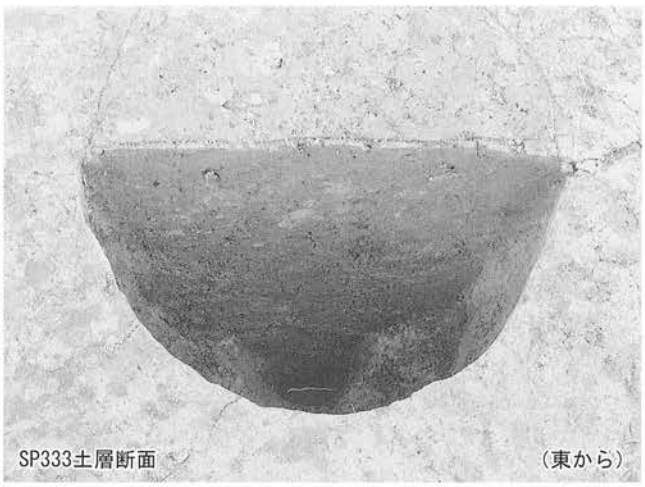
西側調査区南壁中央部

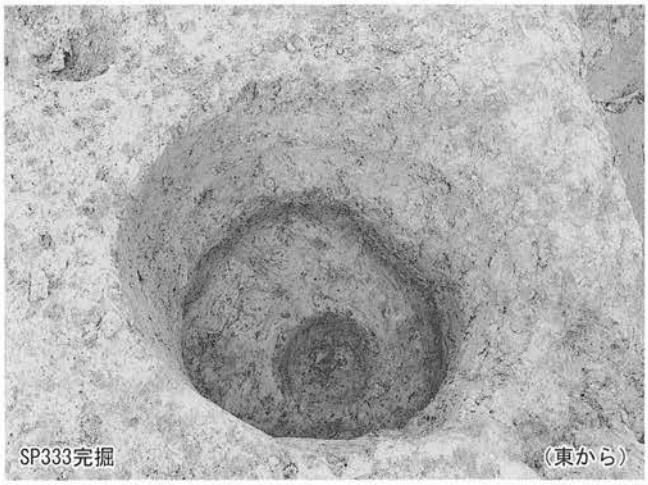
西側調査区南壁西部

西側調査区西壁南部

西側調査区西壁北部

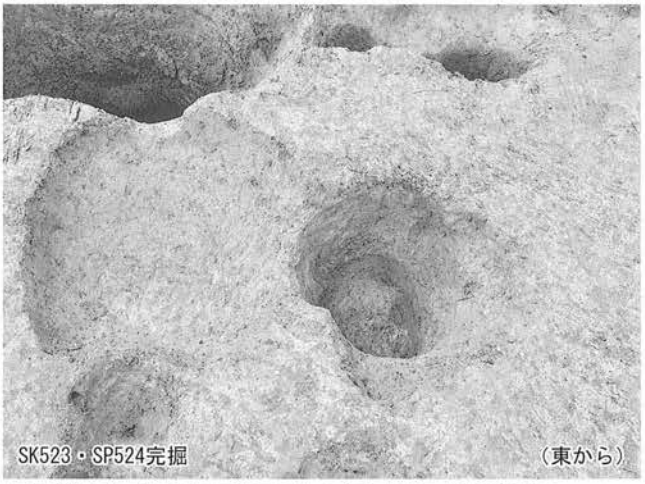

SP285土層断面 （東から）


SP333土層断面 （東から）


SP333完掘 （東から）

SK523・SP524土層断面 （東から）

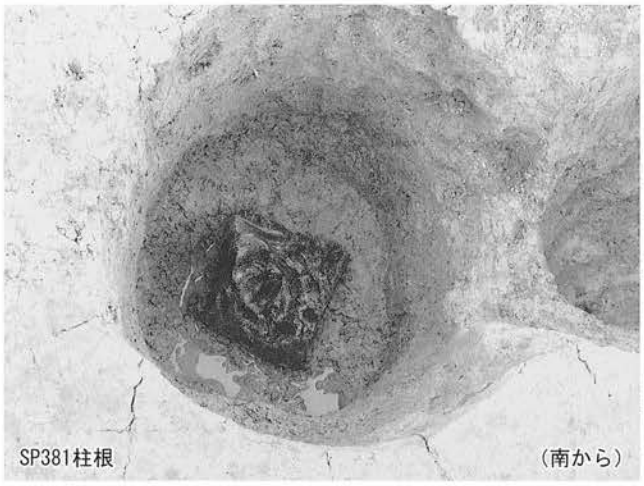
SP524土層断面 （東から）


SK523・SP524完掘 （東から）

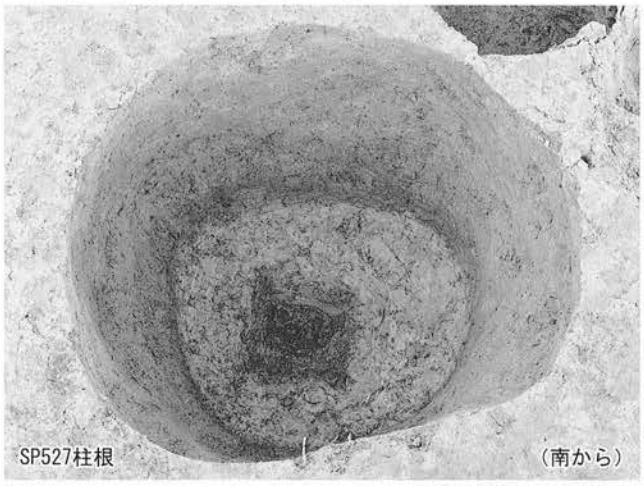
SP415土層断面 （東から）

SP463土層断面 （東から）

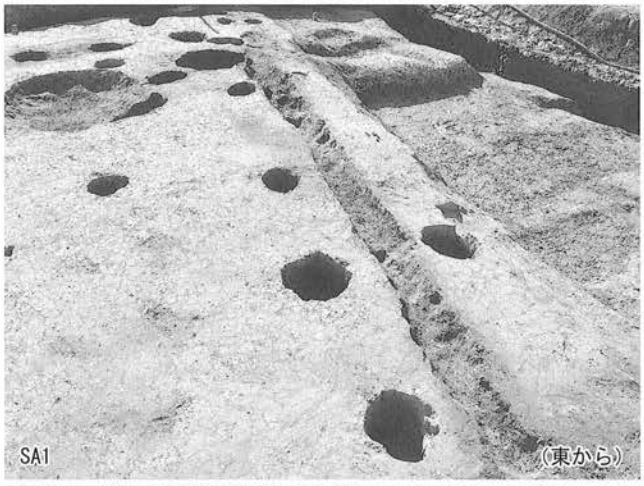
図版28


SP381柱根　（南から）

SP381断ち割り　（南から）


SP527柱根　（南から）

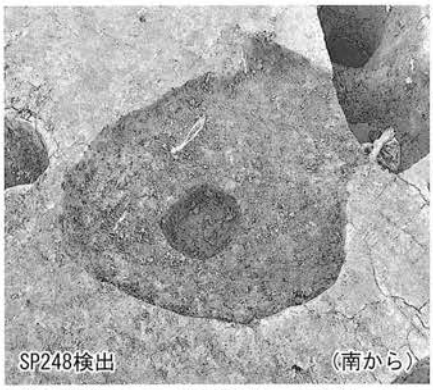
SP527断ち割り　（南から）


SA1　（東から）

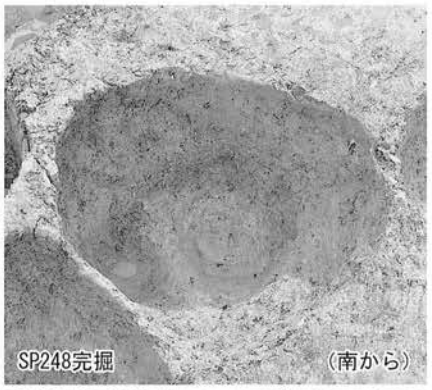
SA4　（西から）

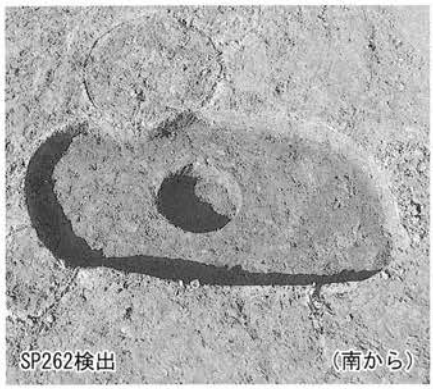
SB2・SB3　（南から）

SB8　（西から）


SP248検出 （南から）

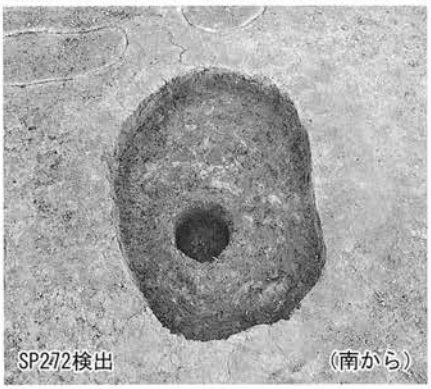
SP248土層断面 （南から）

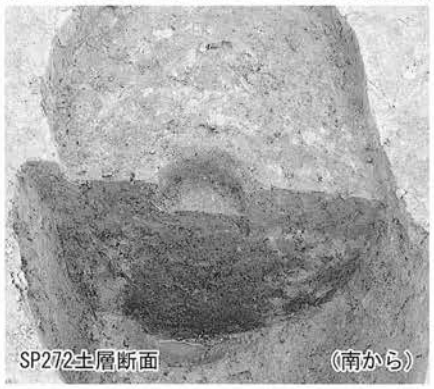

SP248完掘 （南から）

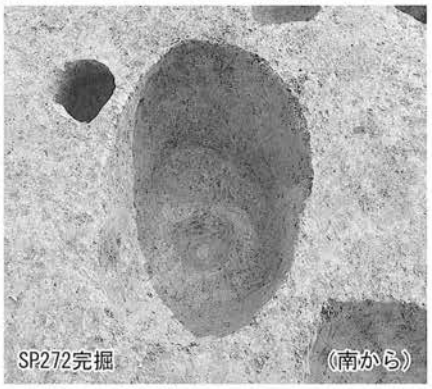

SP262検出 （南から）

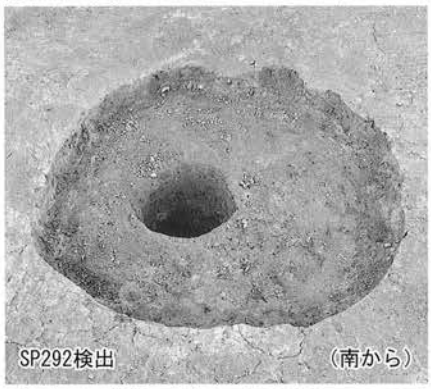
SP262土層断面 （南から）

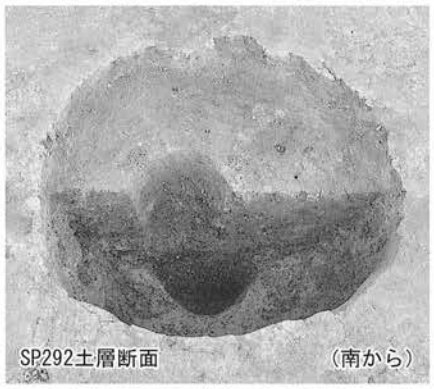
SP262完掘 （南から）

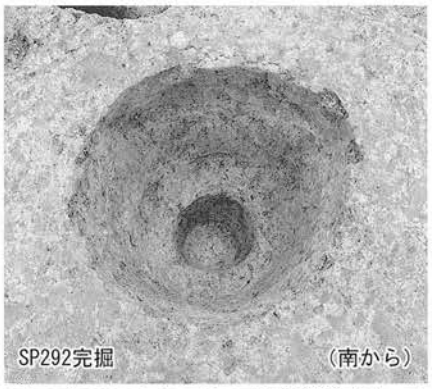

SP272検出 （南から）

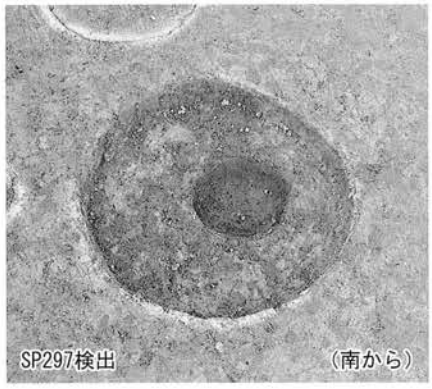

SP272土層断面 （南から）

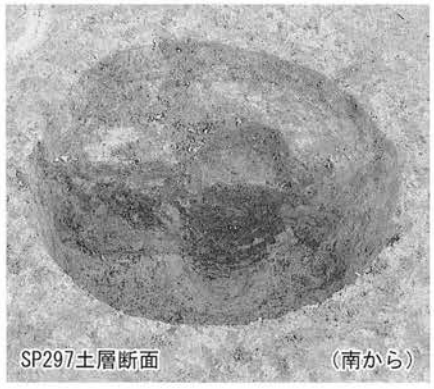

SP272完掘 （南から）


SP292検出 （南から）


SP292土層断面 （南から）

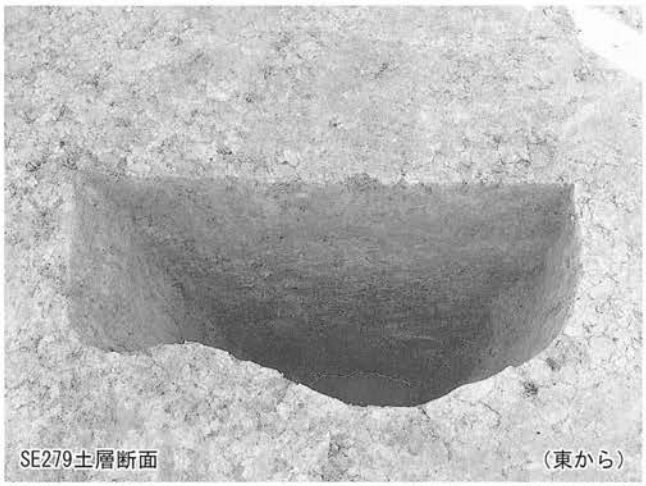

SP292完掘 （南から）

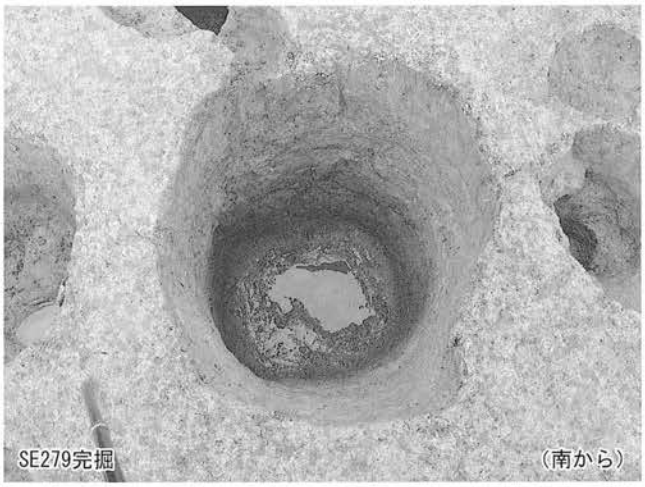

SP297検出 （南から）

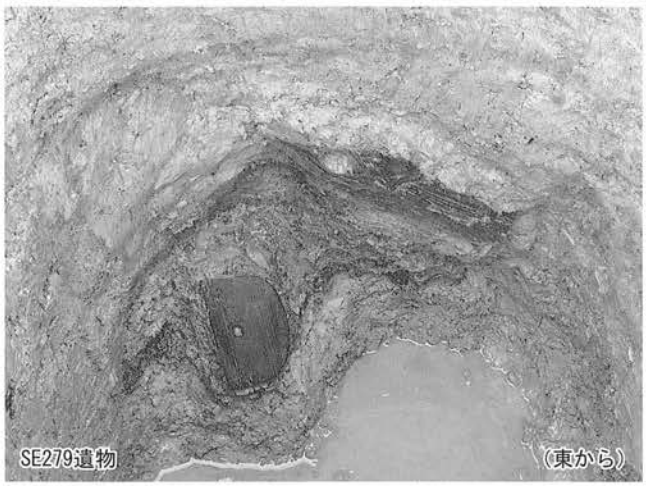

SP297土層断面 （南から）

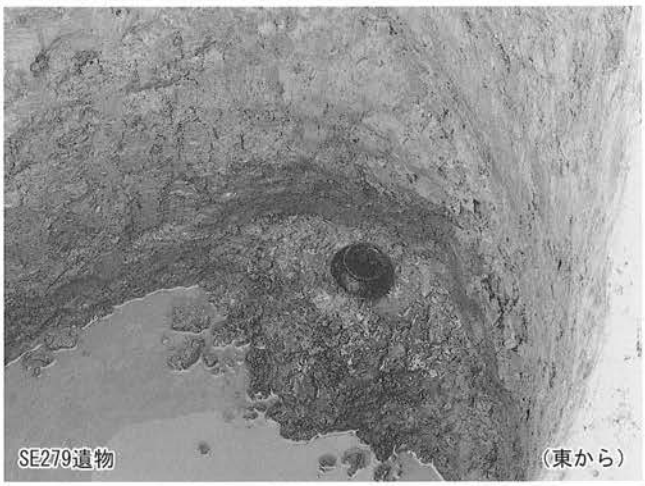
SP621土層断面 （西から）

図版30

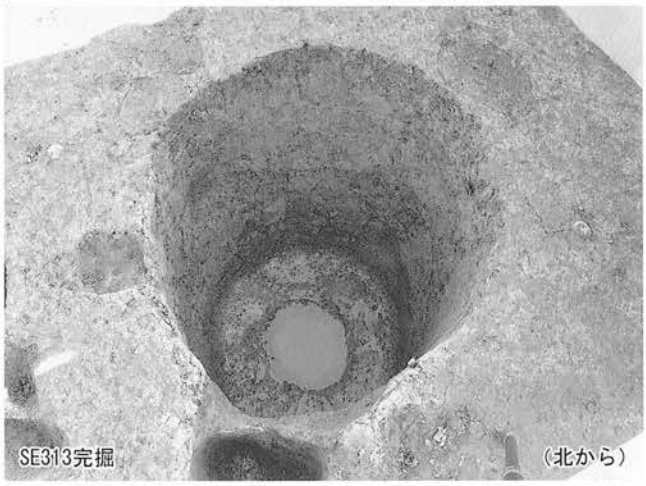

SE279土層断面 （東から）

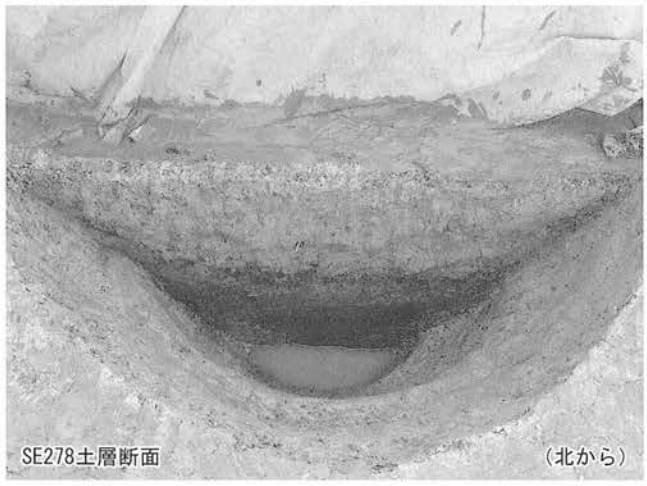

SE279完掘 （南から）

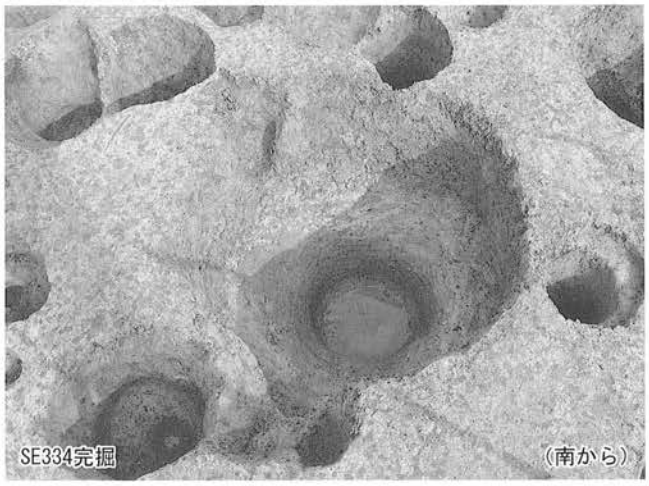

SE279遺物 （東から）

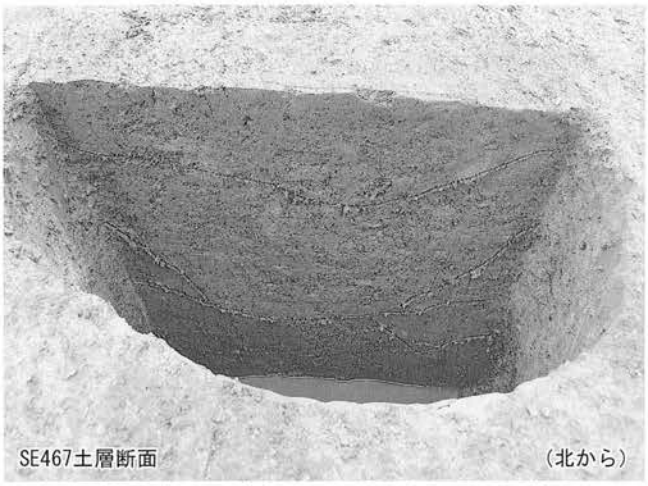

SE279遺物 （東から）

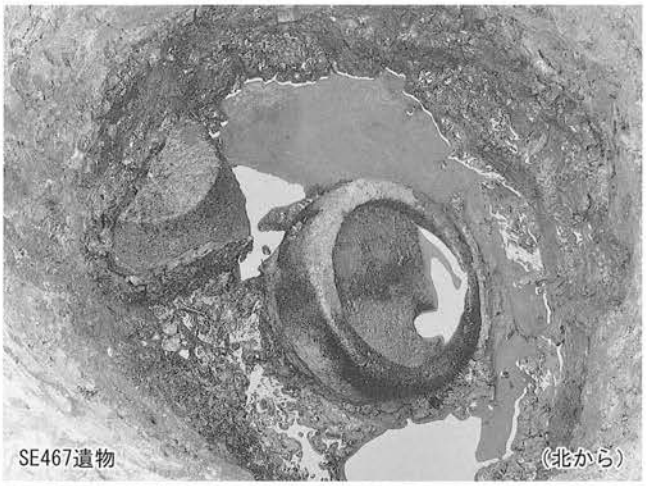
SE313土層断面 （北から）

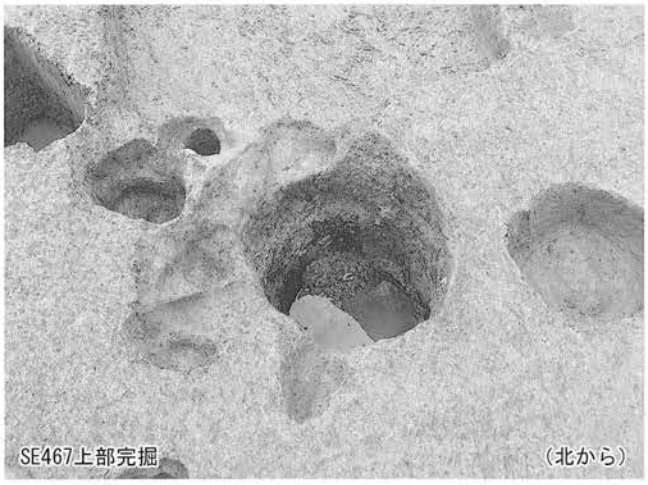

SE313完掘 （北から）


SE278土層断面 （北から）

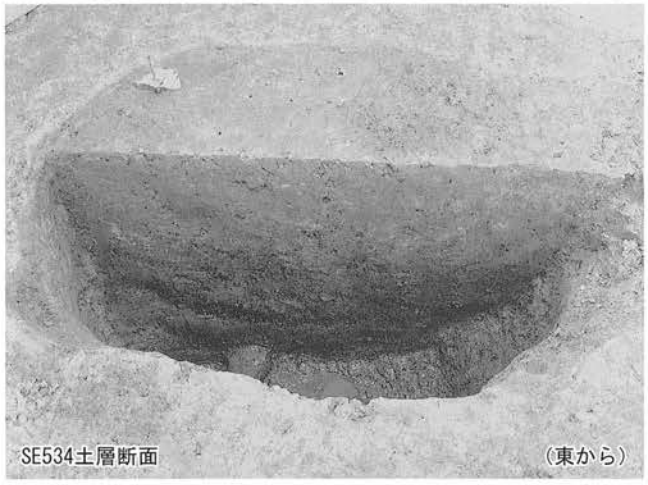

SE334完掘 （南から）

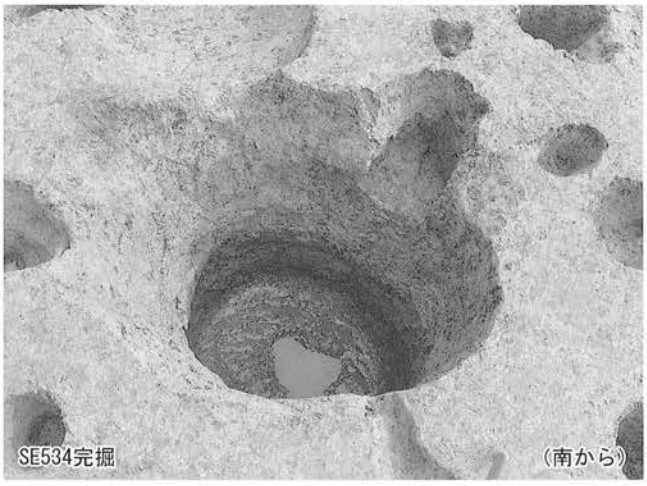

SE467土層断面 （北から）

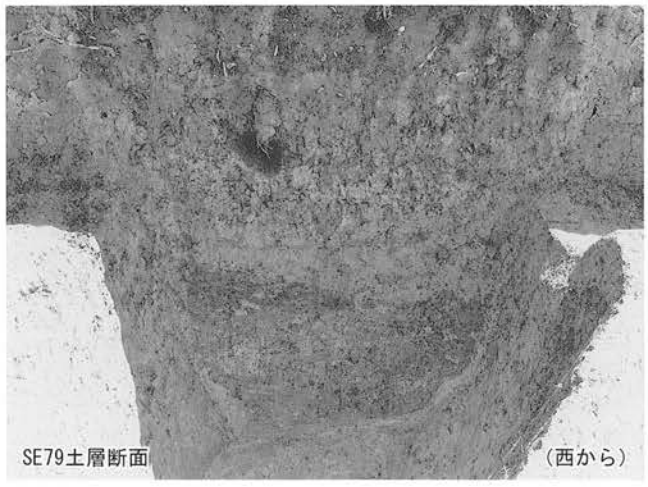

SE467遺物 （北から）

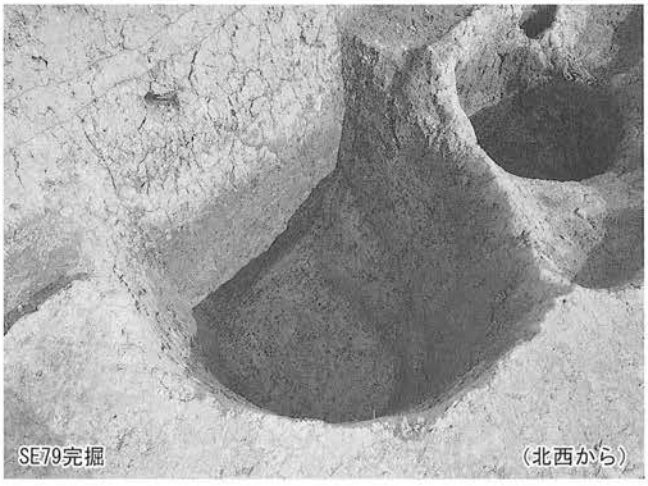

SE467上部完掘 （北から）

SE467基部完掘 （北から）


SE534土層断面 （東から）


SE534完掘 （南から）

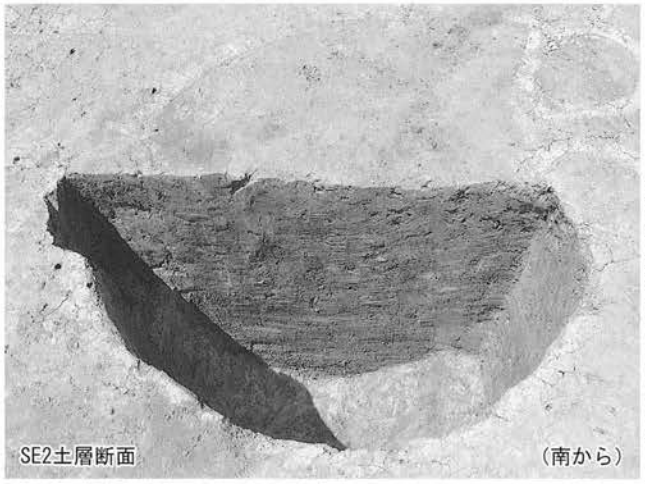

SE79土層断面 （西から）

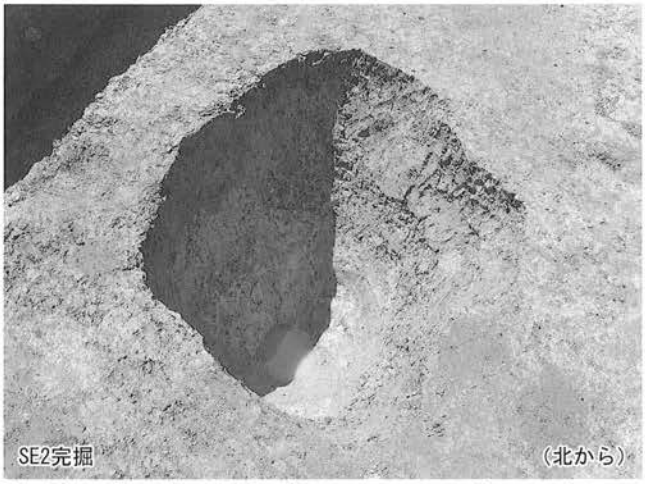

SE79完掘 （北西から）

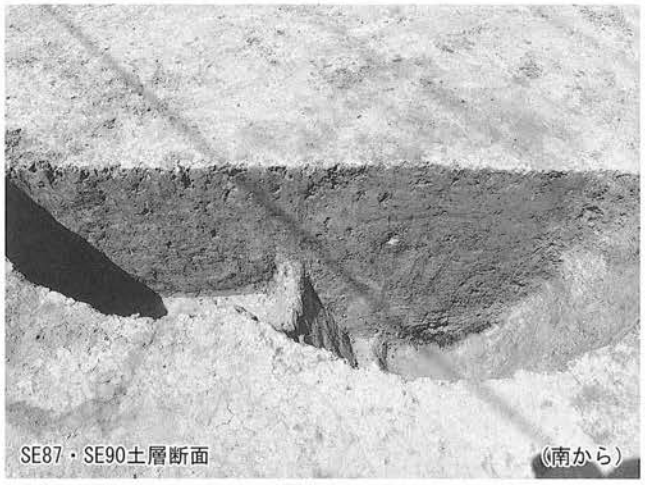
図版32

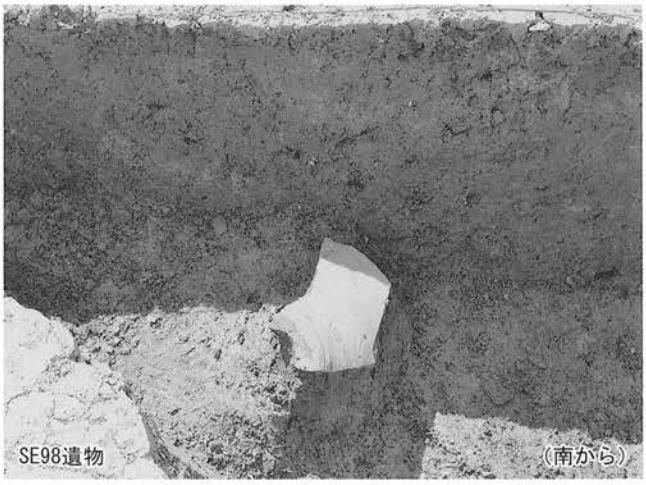
SE197土層断面　（西から）

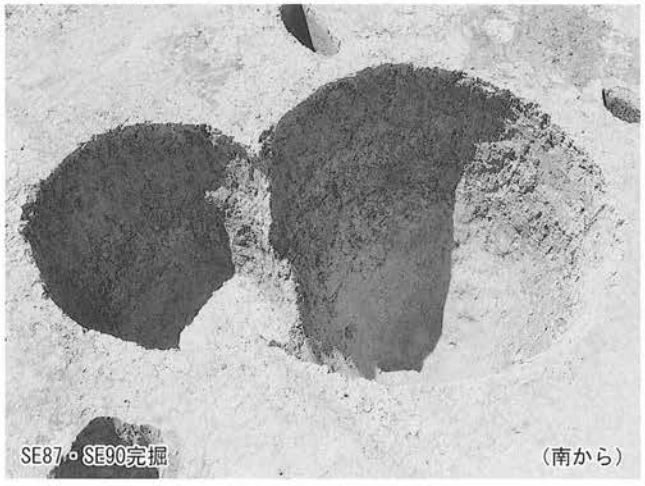
SE197完掘　（北西から）

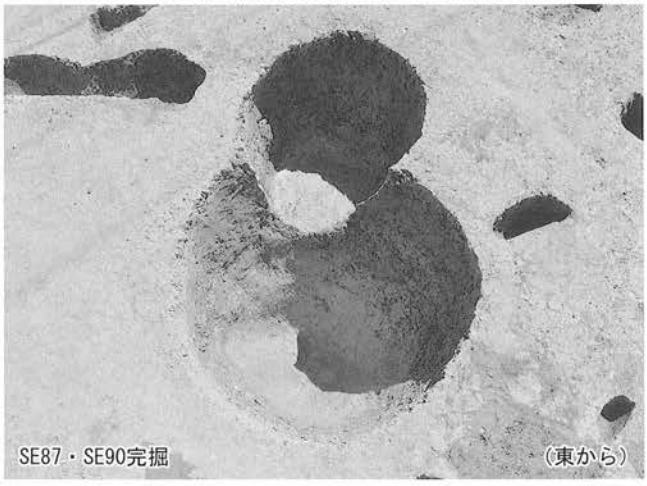

SE2土層断面　（南から）


SE2完掘　（北から）


SE87・SE90土層断面　（南から）

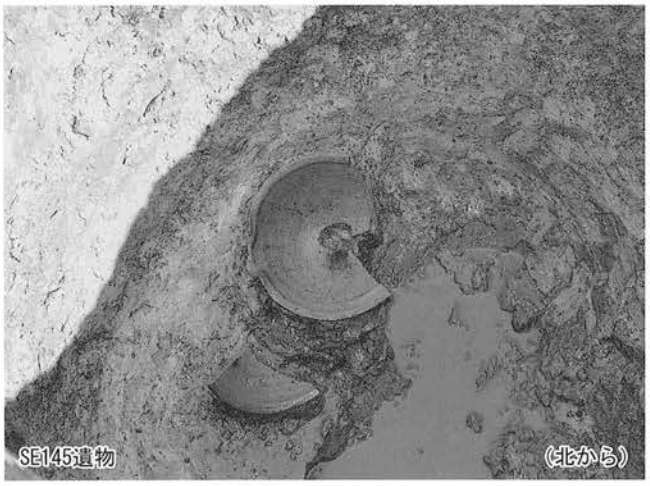

SE98遺物　（南から）

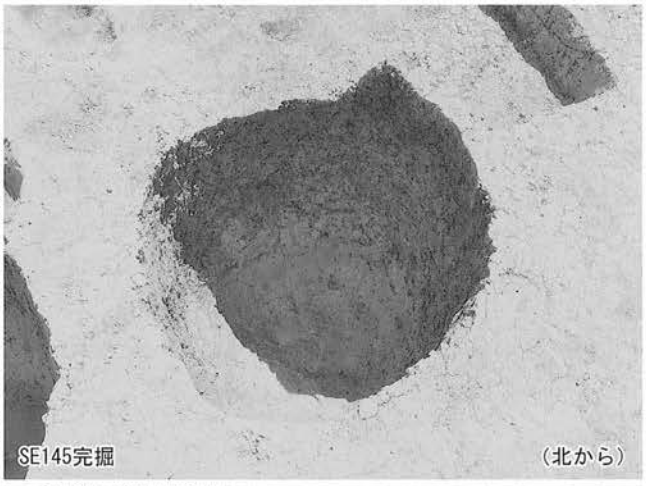

SE87・SE90完掘　（南から）

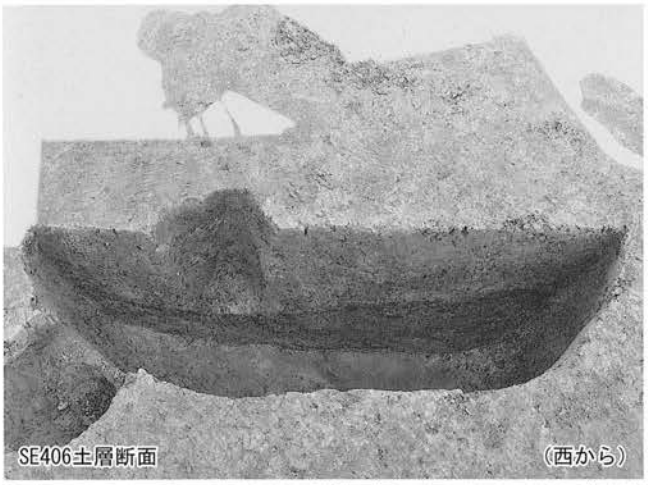

SE87・SE90完掘　（東から）

SE145土層断面 （東から）

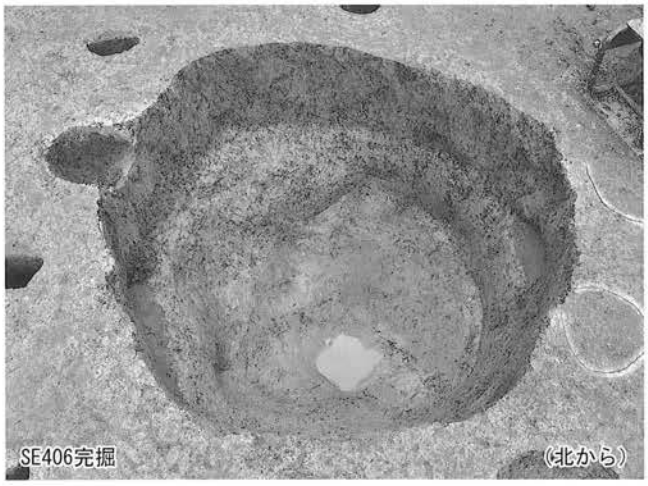
SE145遺物 （北から）

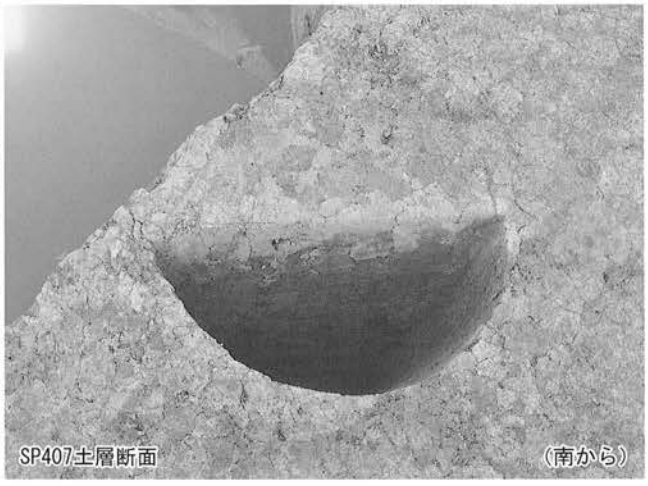

SE145遺物 （北から）


SE145完掘 （北から）

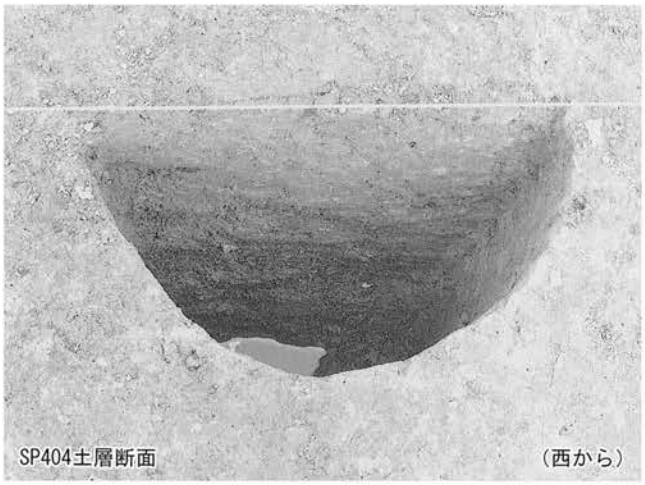

SE406土層断面 （西から）

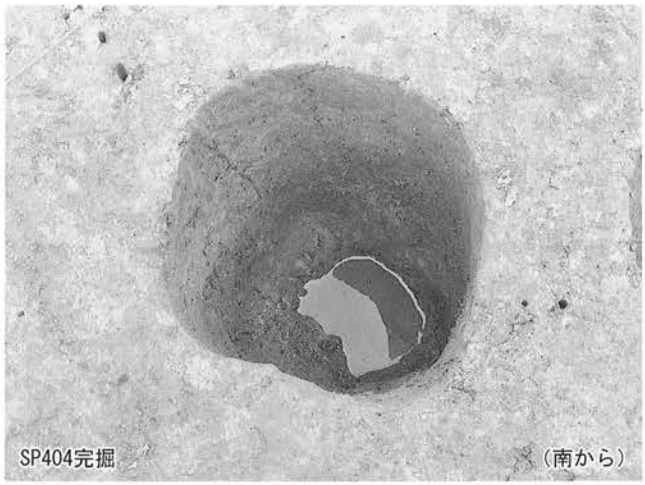
SE406土層断面 （南から）

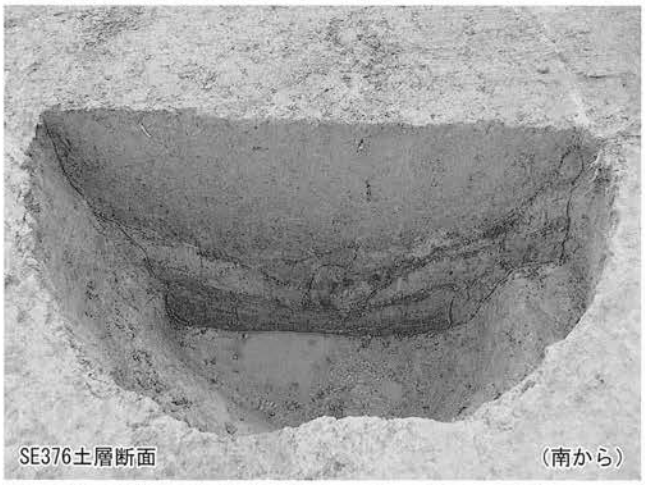

SE406完掘 （北から）

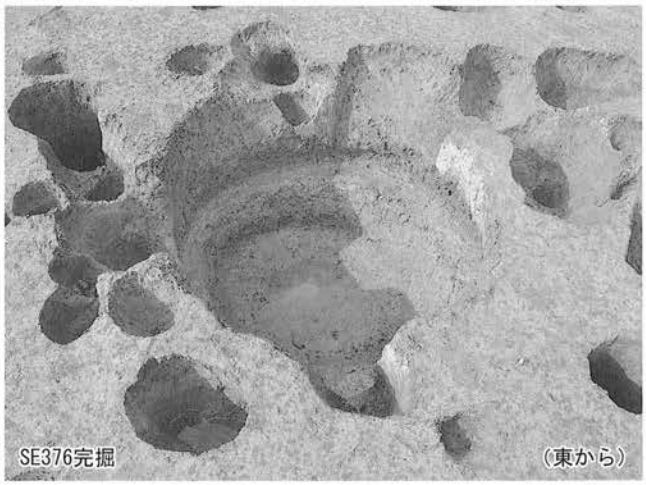

SP407土層断面 （南から）

図版34

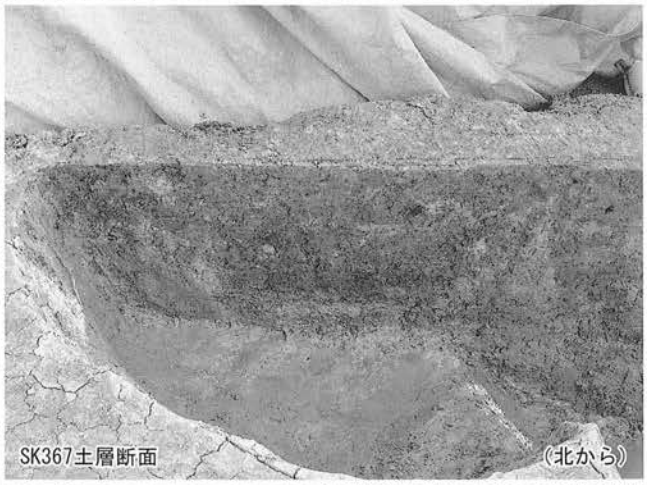

SP404土層断面 （西から）


SP404完掘 （南から）


SE376土層断面 （南から）


SE376完掘 （東から）

SK365土層断面 （北から）


SK367土層断面 （北から）

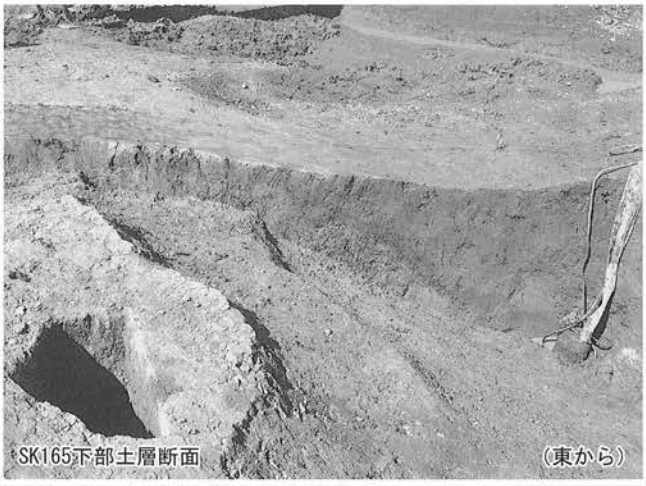
SK365・SK367完掘 （北東から）

SK365・SK367完掘 （西から）

SK235土層断面　（西から）

SK235完掘　（北から）

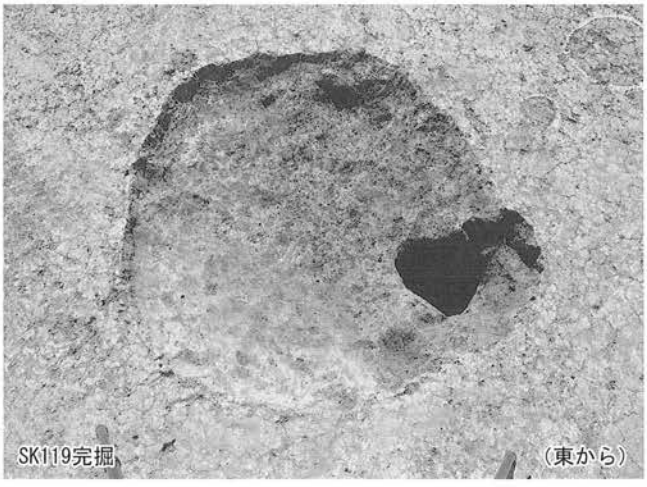
SK165下部土層断面　（東から）


SK165下部土層断面　（東から）

SK165完掘　（北から）

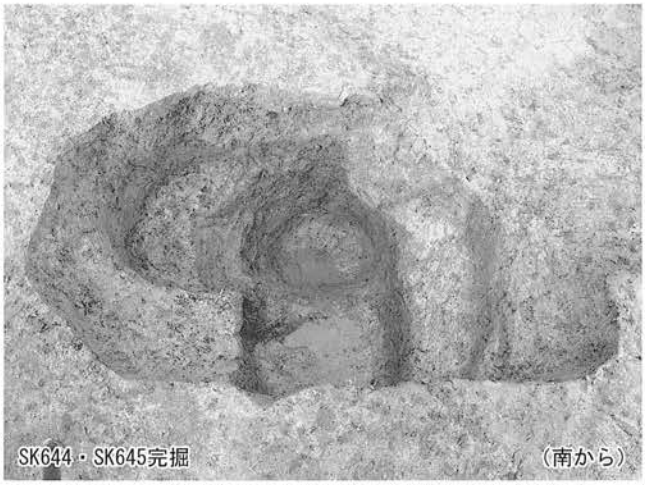
SK165完掘　（北西から）

SK119土層断面　（南から）

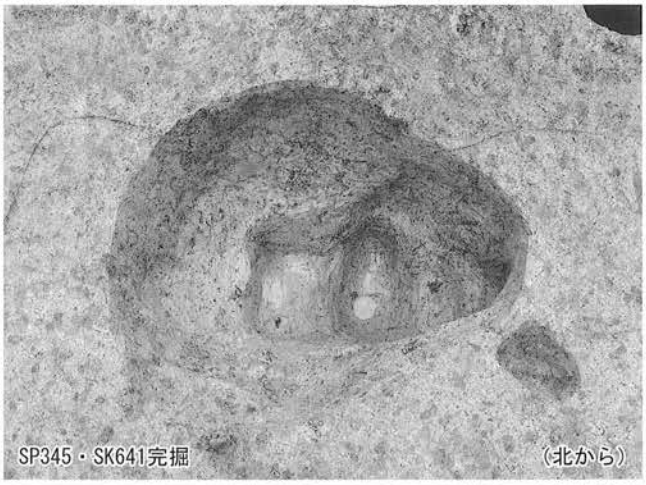

SK119完掘　（東から）

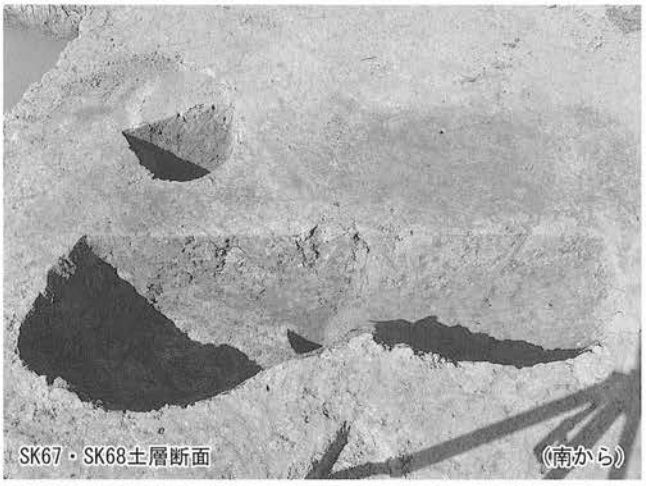
図版36

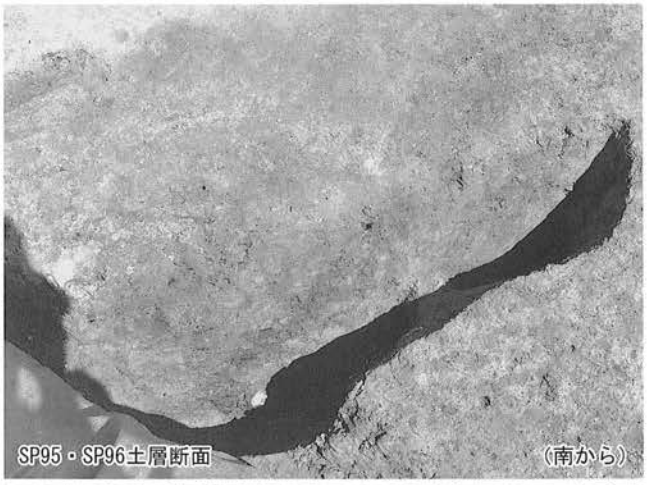
SK644・SK645土層断面　（南から）


SK644・SK645完掘　（南から）

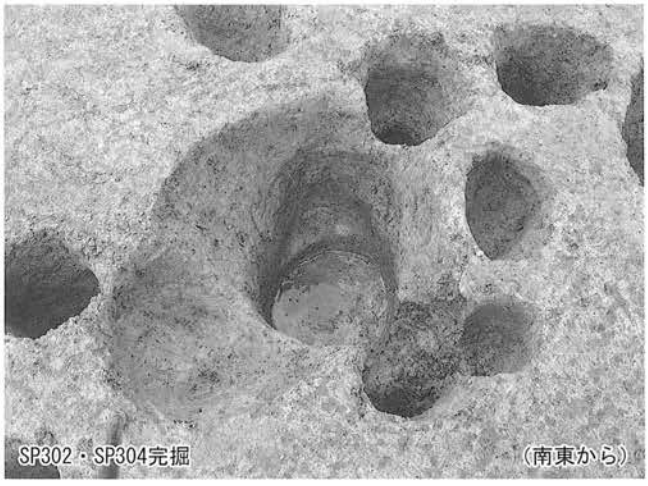
SP345・SK641土層断面　（北から）


SP345・SK641完掘　（北から）

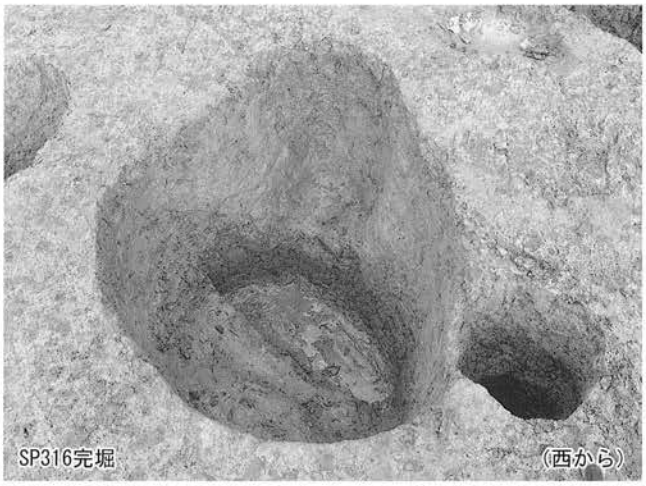

SK67・SK68土層断面　（南から）

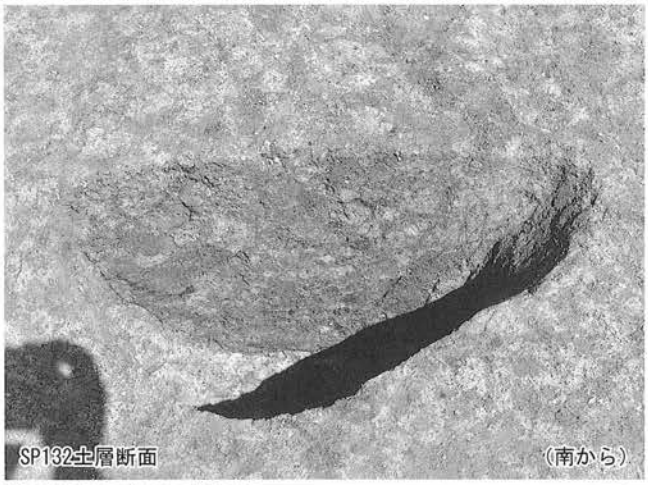

SP95・SP96土層断面　（南から）

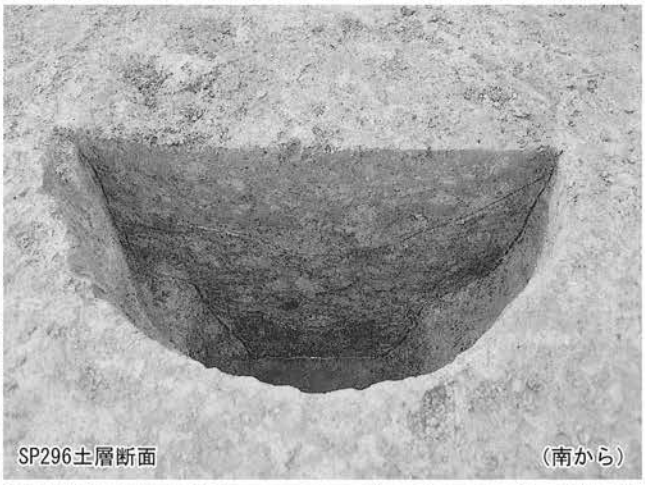
SP302・SP304土層断面　（東から）


SP302・SP304完掘　（南東から）

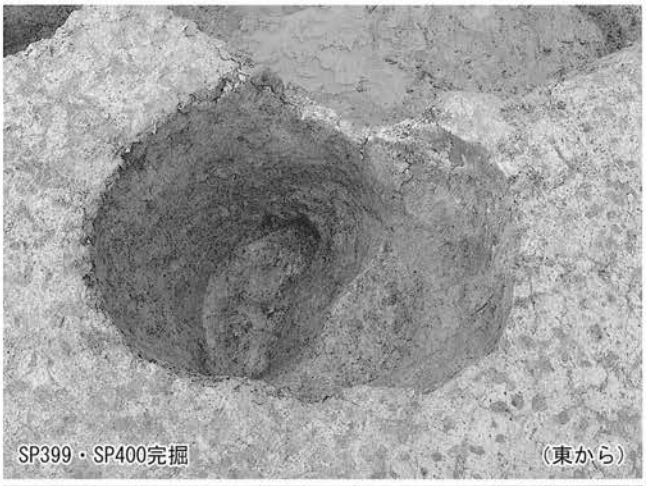
SP316土層断面 （東から）

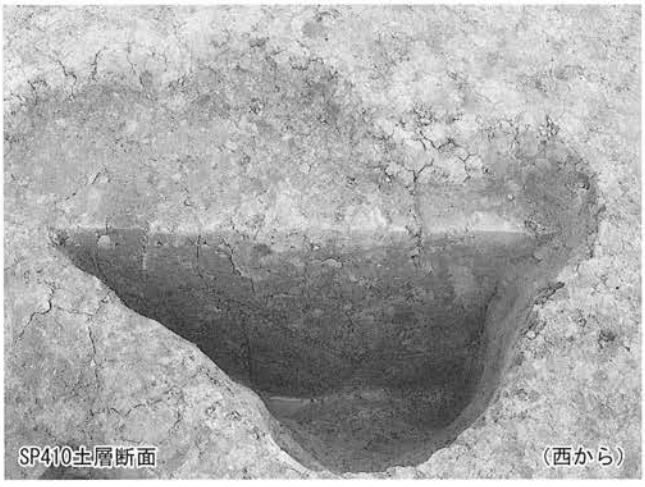

SP316完堀 （西から）

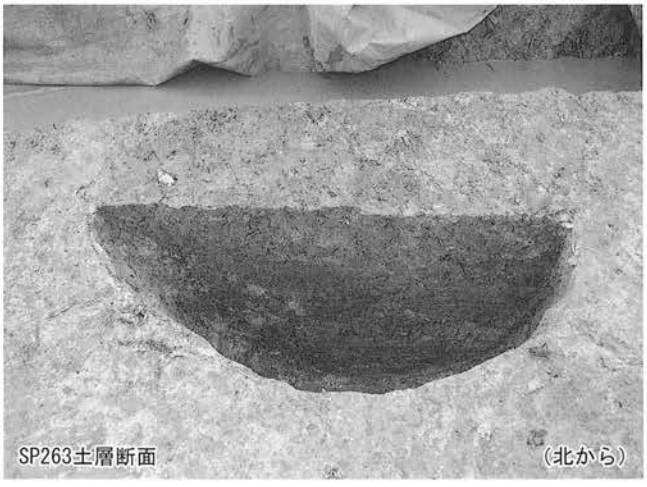

SP132土層断面 （南から）


SP296土層断面 （南から）

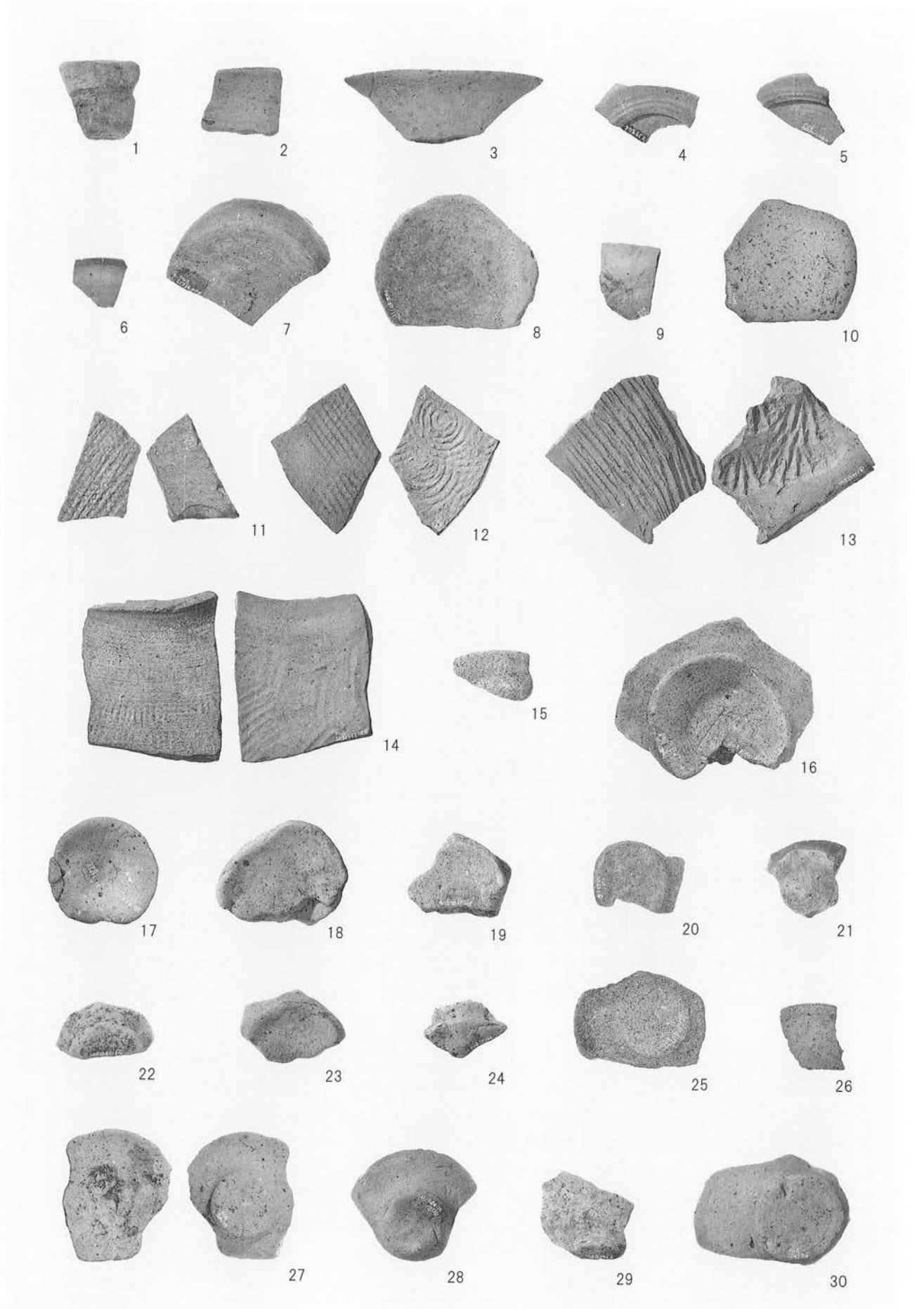
SP399・SP400土層断面 （東から）

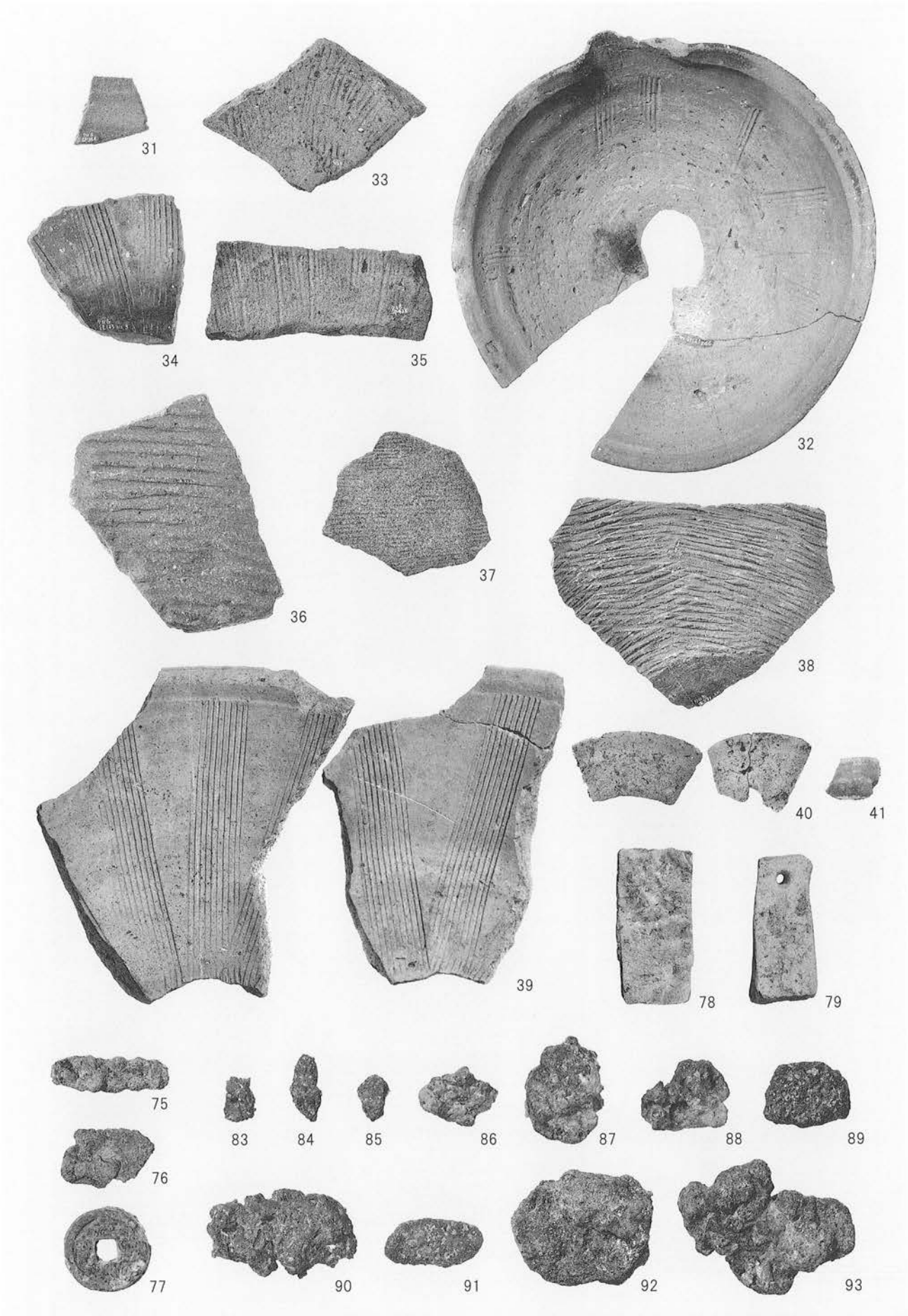

SP399・SP400完掘 （東から）


SP410土層断面 （西から）

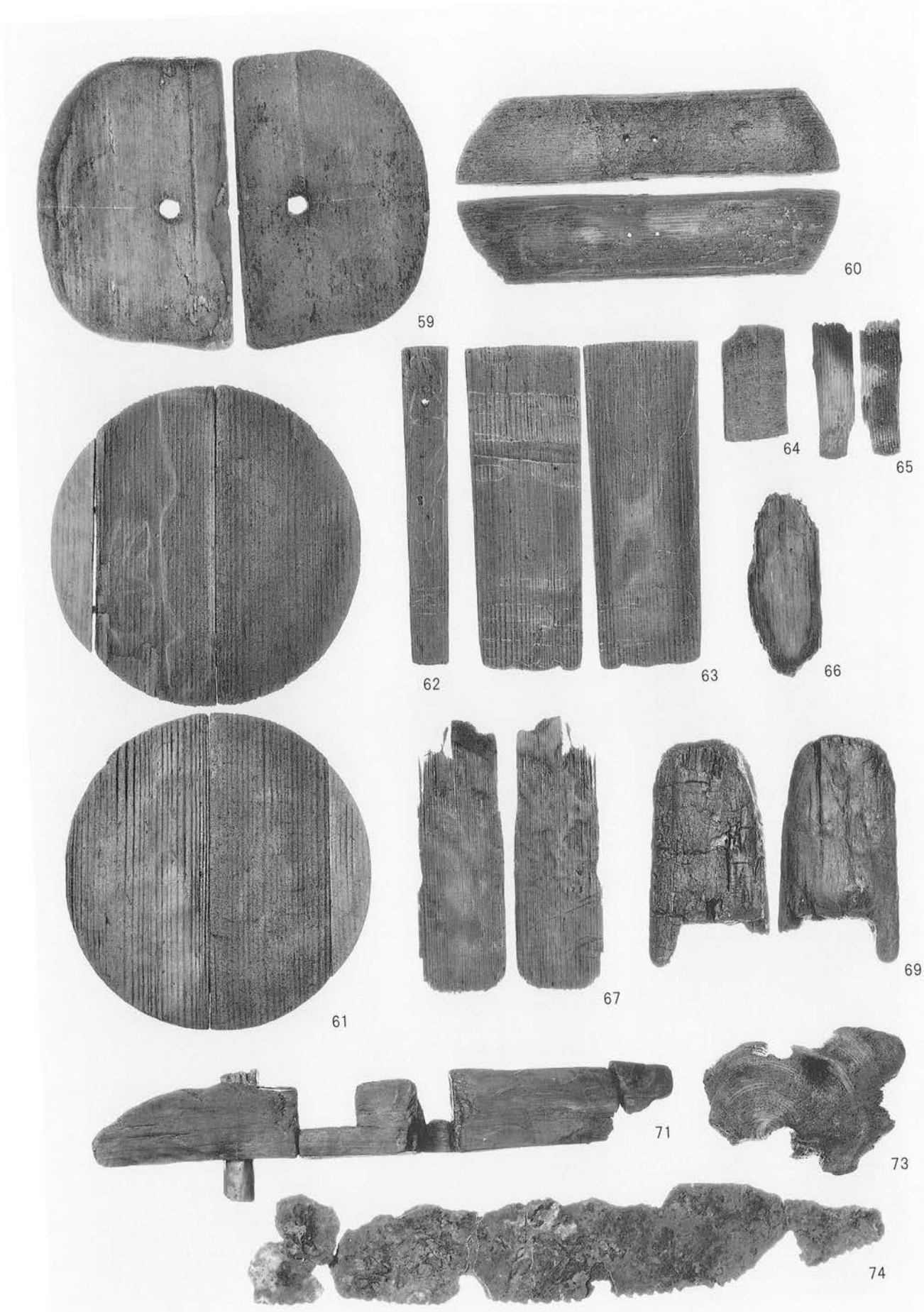

SP263土層断面 （北から）

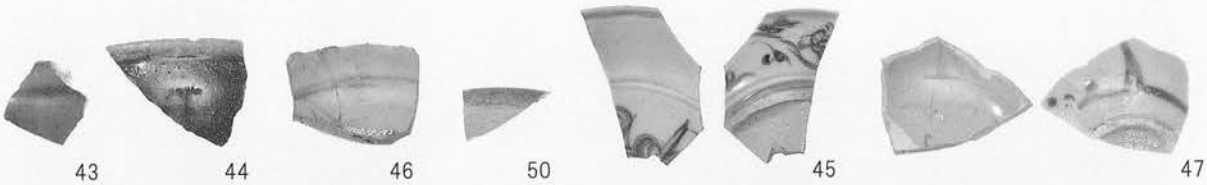
図版38

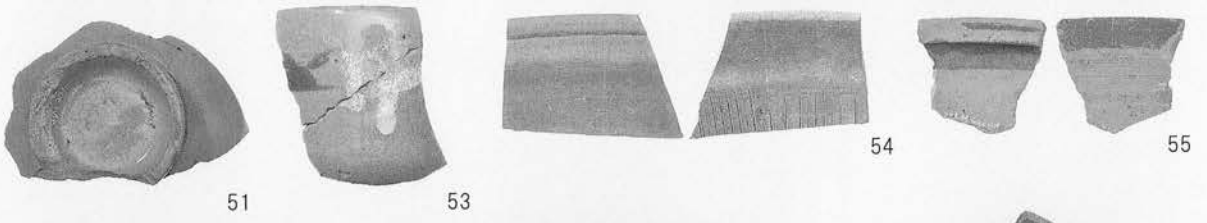


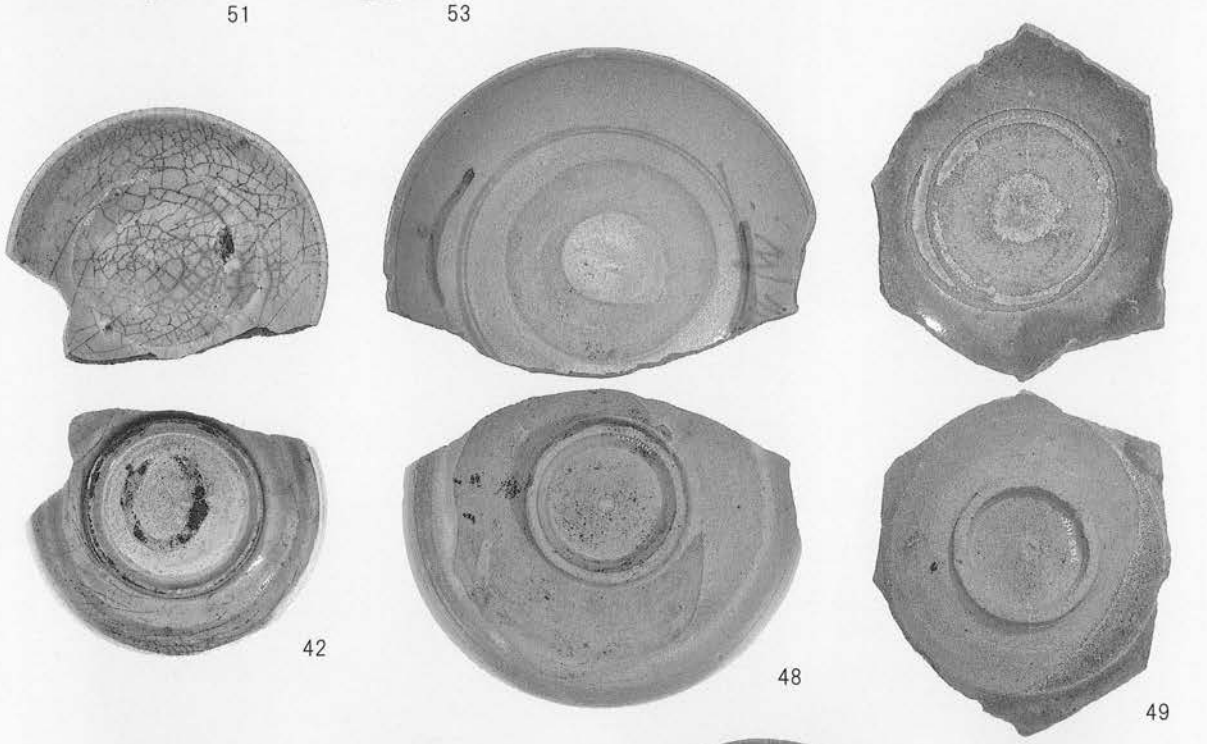

31
33
34
35
32
36
37
38
39
40
41
78
79
75
83
84
85
86
87
88
89
76
77
90
91
92
93

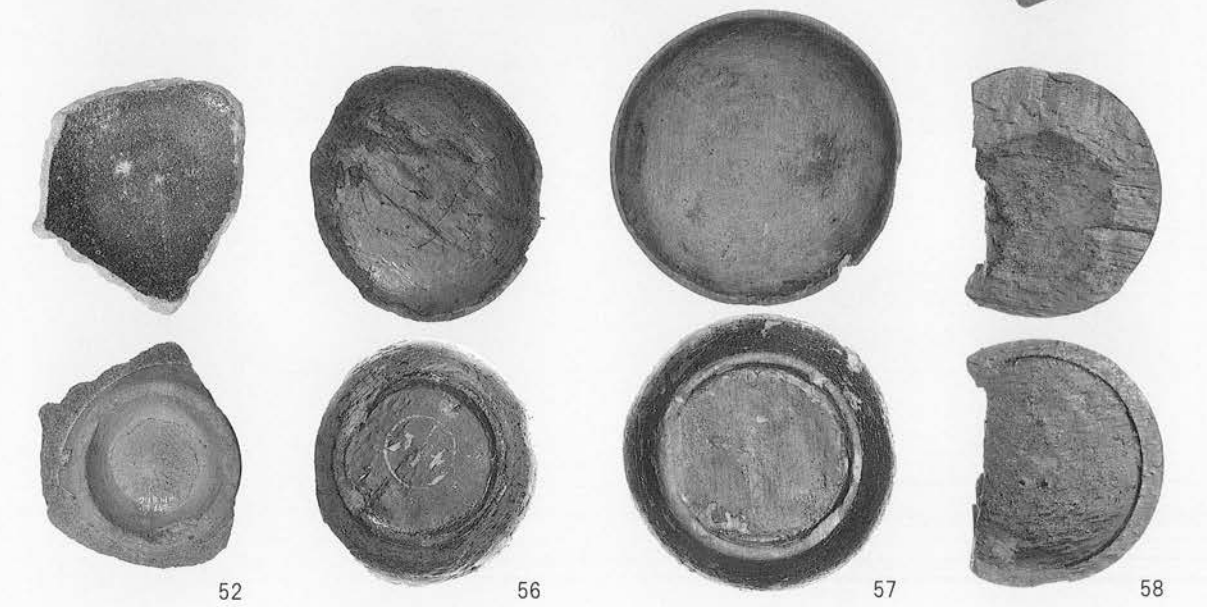
図版40




43 44 46 50 45 47


51 53 54 55


42 48 49


52 56 57 58

図版42

32

42

48

49

72-1

72-2

80

82

報告書抄録

ふりがな	くろべふるやしき
書名	黒部古屋敷
副書名	新潟県柏崎市 黒部古屋敷遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書第74集
編著者名	中島義人
編集機関	柏崎市教育委員会　教育総務課 埋蔵文化財係
発行者	柏崎市教育委員会
所在地	〒945−8511　新潟県柏崎市中央町5番50号　　TEL　0257−23−5111
発行年月日	西暦　2015年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 西暦年月日	調査面積 ㎡	調査原因
くろべふるやしきいせき 黒部古屋敷遺跡	にいがたけんかしわざきし 新潟県柏崎市 にしやまちょうくろべ 西山町黒部 あざふるやしき 字古屋敷	15205	1002	37度 27分 17秒	138度 39分 16秒	20120806 〜 20121121	750	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒部古屋敷遺跡	集落跡	古代	溝	土師器・須恵器・鍛冶滓	出土遺物は少なく、時期不明の遺構（柱穴・ピット、土坑、溝など）が多い。集落は断続的に形成されたとみられる。
	集落跡	中世	井戸・掘立柱建物	珠洲・越前・青花・銭貨	
	集落跡	近世	井戸・土坑・掘立柱建物・柵・溝	陶磁器（肥前系・瀬戸美濃系）・漆器・金属製品・木製品・石製品	

要約

遺跡は、鯖石川支流の別山川左岸に立地する。古代から近世の複合遺跡である。

古代は、溝から須恵器・土師器・鍛冶滓がまとまって出土した。土師器の形態から11世紀後半頃のものとみられる。周辺では同時期の資料はほとんど確認されていないことから、当時期の様相を検討するための貴重な資料となる。

中世の遺構として確認できたものは井戸1基である。出土遺物が少なく、様相は不明であるが、短期的な集落が営まれたとみられる。

近世は、掘立柱建物・柵・土坑・井戸・溝などが確認された。18世紀前半頃までの遺物が確認される。現在の黒部地区の住宅地は、「ふるやしき」の地から移ったものだと伝わっている。今回の調査結果からすれば、18世紀中頃まで、この地で集落が営まれていたことが確認された。

※　緯度・経度は世界測地系に基づく。

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第74集

黒部古屋敷

── 新潟県柏崎市 黒部古屋敷遺跡発掘調査報告書 ──

平成２６年３月　５日　　印　刷
平成２６年３月２５日　　発　行

発　　行　　柏崎市教育委員会
〒945-8511　新潟県柏崎市中央町５番５０号
印　　刷　　株式会社　小　　田
〒945-1352　新潟県柏崎市安田４１５３番地１